

早稻田大學四十二年
文學部 科第 學年講義錄

手抄朝散文評釋

澤村宗八

62-409
1200701687677

62
409



始



種村宗八述

平安朝散文評釋



明治
44.6.3
製本

早稻田大學出版部蔵版

平安朝散文評釋目次

赫夜姫の生ひたち	竹取物語	一三
東下り	伊勢物語	二二
攝津の處女塚	大和物語	三〇
楚の莊王、臣下の無禮を赦す	唐物語	三三
仲忠、空洞を發見す	宇津保物語	四〇
落窪の君、繼母に虐待せらる	落窪物語	四五
桐壺の更衣の卒去	源氏物語	五八
狹衣大將、源氏宮を慕ふ	狹衣物語	六九
大湊を出帆す	土佐日記	七八
父に従ひて上總を出づ	更科日記	八五
上巳の節句、小弓の遊、高明の左遷	蜻蛉日記	九三
敦道親王、式部を訪ふ	和泉式部日記	一〇五
土御門殿の秋のけはひ	紫式部日記	一一九
思はむ子を	枕草子	一二三
憎きもの	枕草子	一二三

目次

鳥は 枕草子……………	一二五
蟲は 枕草子……………	一二七
川は 枕草子……………	一三一
頭辨の職に参り給ひて 枕草子……………	一三三
村上天皇の御事 榮華物語……………	一四〇
源高明公の左遷 榮華物語……………	一四六
菅公の配流 大鏡……………	一五六
藤原時平の逸事 大鏡……………	一七四
藤原鎌足の薨去 水鏡……………	一八三
上東門院の事 今鏡……………	一八八

平安朝散文評釋目次終

平安朝散文評釋

種 村 宗 八 述

赫夜姫の生ひたち 竹取物語

竹取物語は、我が國に於ける小説的物語の中にて、最も古いものであるが、何人の作であるか、善く分らぬ。一篇の趣向は、赫夜姫と云ふ美人が竹の中より生れて竹取の翁に養はれたが、非常の美人であつた爲に、數多の男子の戀愛の的となつた。けれども姫は皆之を退けて應ぜない。時の帝、姫の美を聞こしめして、入内せしめようと成されたが、姫は之にも應ぜないで、八月十五夜に、月界より來た所の使者と共に上天してしまつて、數多の男子をして失望せしめた、と云ふ事を書いたものである。茲に掲げたのは、其の發端の一節であつて、赫夜姫の生立より、數多の男子に懸想せらるゝ事を叙した所である。

平安朝散文評釋 竹取物語 赫夜姫の生ひたち

りけり、野山にましりて、たけをとつ、よろつゝの事につかひけり、名をは、さぬきの
みやつこまろとなんいひける』となつてゐる如く、其の大部分が假名になつてゐる
のみならず、假名の清濁すらも區別してない。之を原文のまゝに記すときは、今日
の漢字交り文を読み馴れた者には甚だ讀みにくいので有らうと思ふ。故に茲には
便宜のために、差支なき限りは、假名を漢字に改めて掲ぐる事と致さう。

今は、昔竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取
りつゝ、萬の事に使ひけり。名をば讃岐の造麻呂となんいひけ
る。其の竹の中に、本先る竹、一筋ありけり。怪しがりて寄りて
見るに、筒の中、光りたり。それを見れば三寸ばかりなる人、いと
美しうてゐたり。翁いふやう、われ朝ごと夕ごとに見る竹の中
に、おはするにて知りぬ。子になり玉ふべき人なめり』とて、手に
うち入れて、家にもちて來ぬ。妻の嫗に預けて養はず。美しき
こと限りなし。いと稚ければ籠に入れて養ふ。

語釋 竹取の翁。竹を取りて籠などを造り、それを以て生計とせし故に、世人が竹
取の翁というたのである。○まじりて。入り交りてと云ふこと。○讃岐の造麻
呂。讃岐は姓、造麻呂は名。○子になり玉ふべき人なめり。子と籠とを引きかけ
て云ふ。「めり」は「見えあり」の約で、其の様子がしか見ゆと推量して云ふ助辭である。
我が子と成るべき人と見ゆると云ふ意。

通釋 今では昔の事になつたが、昔竹取の翁といふ者がゐた。此の翁は野山に交
り入りて、竹を切り取つて、種々の事に使用して、それを以て生計とした。其の姓名
を讃岐の造麻呂と云ふ。毎日切りに行く竹の中に、本の方のピカ／＼光る竹が一
本あつた。不思議に思つて近寄つて見るに、筒の中が光つてゐる。それを善く見
れば身の丈が三寸ばかりなる美しい子供がゐる。依て翁は「我れが毎日見る所の
竹の中に、おいでなさるに依て、御身は、我が子となり給ふべき人であらう」と云ふこ
とが知れたと申して、手のひらへ入れて、我が家へ持つて來た。さて、それを、我が妻
なる老嫗に預けて養はせた。此の子の美しいことは非常のものである。まことに
小さな子であつたから、籠の中に入れて養つてゐた。

竹取の翁、此の子を見つけて後に、竹を取るに、節を隔て、よごと

に、黄金ある竹を見つくること重なりぬ。かくて、翁やうく、豊になりゆく。

語釋

よごごに。よとは節と節との間を云ふ。節の間ごと。

此の小兒、養ふ程に、すくくと大きになりまざる。三月ばかりになるほどに、善き程なる人になりぬれば、髪あげなど、さだして、髪あげせさせ、裳着す。帳の内よりも出さず。いつきかしづき養ふほどに、此の小兒の形けうらなること、世に無く、屋の内は暗き處なく光り満ちたり。翁、心地悪しく心苦しき時も、此の子を見れば、苦しき事も止みぬ。はらたしき事も慰みけり。

語釋

すくくと。すんくと速に。○大きになりまざる。いよく大きくな

つてゆく。○善き程なる人。かなりの大きさの娘。○髪あげ。中古の女子は、幼き間は放髪にして髪を垂れてゐたのであるが、成女期になると、それを結び上げたのである。これを髪あげと云ふ。これは男子の元服と同じことである。○さだ

して。「さだは定であつて、相談して定むること。○裳着す。裳は、中古の女子が、後腰につけて裝飾とした衣である。女子が成長して始めて、裳を着る式を行ふを、裳着すと云ふ。○帳のうちよりも出さず。高貴の人は室内の席上に、更に座を設けて、其の上には布帛を張り、其の周圍にも布帛を垂れ下げて、其の中に居たものである。此の座を「帳臺」といひ、帳臺に垂れ下ぐる布帛を「帳」と云ふ。故に、帳のうちよりも出さずと云ふは、此の座の外には、室内にも出さぬと云ふことで、極めて秘藏したことを云ふのである。娘が成人したゆゑに、之を秘藏して外に出さないものである。○いつきかしづき養ふ。いつきは不淨なきやうにして、謹み仕ふること。「かしづき」は愛護すること。故に、謹んで愛護して養ふを云ふ。○けうらなる。清らなるの音便。○世に無く。世に類なしと云ふこと。○はらたしき事。腹の立つこと。

通釋 此の小女は、養うてゐる中に、すんくと滞りなく、いよく大きくなる。三月月ばかり立つ中に、かなりの娘になつたから、髪上げの式を行ふ事に定めて、今までの放髪を結ばせ、又、裳着の式をも行うた。之より、いよく成女となつたのであるから、帳以外には、少も出さぬやうにして、謹んで大切に養うてゐた。此の小女の

容貌の清らかなること、世に類がない。その清らかなる光の爲に、一家の内は、暗い處のない程に光が充滿した。竹取の翁は、心地の悪くして苦しい時でも、此の子を見ると苦しみが止まり、腹の立つやうな事の有る時にも、此の子を見ると、心が和いで愉快になつた。

翁、竹を取ることに久しくなりぬ。勢、猛のものになりけり。此の子大きになりぬれば、名をば三室戸齋部の秋田を呼びて附けさす。秋田、なよ竹の赫夜姫と附けつ。此のほど三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊をぞしける。男女嫌はず、呼び集へて、いと畏く遊ぶ。

語釋 勢、猛のもの。勢のすばらしい者。「も」は字音を其まゝに用ひたのである。○三室戸齋部の秋田。三室戸は地名。齋部は姓。秋田は名。○うちあげ遊ぶ。酒宴を開き手を拍ちて愉快に遊ぶ。○いと畏く遊ぶ。「畏く」は甚しくと云ふこと。大層に盛に遊ぶと云ふこと。

通釋 翁は竹を取ることに久しくして、いよく富み榮え、其勢がすばらしいものになつた。此の子が大きくなつたに依て、三室戸と云ふところの齋部の秋田と云ふ人と呼んで名を附けさせたるに、秋田は、此の子の名を、なよ竹の赫夜姫と附けた。さて命名の祝のため、三日間、宴會を開いて、いろいろの遊び事をした。男女の嫌なく呼び集めて、大層に盛に遊んだ。

世界の男、貴なるも賤しきも、いかで、此の赫夜姫を得てしがな、見てしがなと、音に聞き、めでて惑ふ。其のあたりの垣にも、家のもとにも居る人だに、たはやすく見るまじきものを、夜は安き寝も寝ず、闇の夜に出でて、も穴を抉り、こゝかしこより覗き、かいまみ惑ひあへり。さる時よりなむ、夜這とは云ひける。

語釋 あてなる。上品なる。○得てしがな。得たいものであると願ふこと。「が」は願望の助辭。○音に聞き。評判にて聞く。○めでて惑ふ。「めで」は「賞め出で」の略であらう。好しと思つて慕ひ惑ふと云ふことであるから、戀慕するをいふ。○家のと。家の外の略で、極めて近き處に居るをいふ。○たはやすく。「容易」に同

じ。○安やすきいもねず。いは寢入ることで名詞。安眠もせずと云ふこと。○かいまみ。垣間見の音便で、垣の間などより覗き見ること。○夜よ。這こ。夜に紛れて這ひありくと云ふこと。男女相會ふことを「よばひ」と云ふは、もと「呼合ヨビアヒ」の約である。然るに、夜這より起つた語なりと云ふは、面白く云ひなしたのである。

通釋 世界中の男が、貴きも賤しきも、何とかして此の赫夜姫を得たいものである。見たいものであると、熱望して、赫夜姫の美をば、世間の評判で聞いて、惚れ惑うてゐる。竹取の翁は、前に記せる如く、赫夜姫をば帳チヤウの外にも出ださぬ事なれば、其の邊の垣の近くに居る人、又は家の外に居る人でさへ、姫をば容易に見ることが出来ない。然るに世界中の男どもは、是非とも姫を見たいと思つて、夜は安々やすと眠りもせず、闇夜に徘徊して穴を抉りあけて、あちよりも覗き、こちよりも覗いて、夢中になつて騒いでゐた。男女の情交を結ぶ事を「よばひ」と云ふのは、此の時に、男どもが、夜中這ひまはつた爲に出来た言葉である。

人のものともせぬ處に惑ひありけども、何の驗シルシあるべくも見え
ず。家の人どもに、物をだに言はむとて、言ひかくれども、ことゝ

もせず。あたりを離れぬ公達キツダチ、夜をあかし、日をくらす人多かり。
おろかなる人は、やうなきありきは、よしなかりけりとして、來きずな
りにけり。其の中に、なほ言ひけるは、色好みといはるゝ限り五
人、おもひやむとき無く、夜晝ヨルヒル來けり。其の名、一人は石作イハツクリの皇子ミコ
一人は車持クルマヂの皇子ミコ、一人は右大臣ウヂナヒ阿倍アヒの御主人ミウヂ、一人は大納言大
伴オホトモの御幸ミヨキ、一人は中納言石上イシノカミの麻呂マロ。たゞ此の人々なりけり。

語釋 人のものともせぬ處。人の居らぬ處と云ふこと。田中大秀の竹取物語解
に「人のものしもせぬところの誤寫であらうと疑を記してある。若し、原文のまゝ
で解釋すれば、人の物音モノネもせぬ處の略と見るのであるから、つまり、人の居らぬ處の
意であるから、人のものしもせぬ處」と同義になる。○ことゝもせず。前記の物語
解に「こたへもせず」の誤寫であらうと云つてある。此の原文のまゝで解すれば、「こ
とともせず」は「何事とも思はず、輕視して顧みない」と云ふ事になるから、つまりは「答
へもせず」と大差はない。○公達。こゝでは若君等を汎く指して云ふ。○おろか
なる人。疎オロカかなる人の略で、熱心でない人、即ち疎略に思ふ人。○公達。君等キミタチの音

便にして貴族の子弟を云ふ。○やうなきありき。益なき歩きの音便。無益なる歩行。○よしなかりけり。詮が無いと云ふこと。

通釋 世間の男どもが赫夜姫を慕うて、人の居りもせぬ處に惑ひあるいたけれど、何等の功能も有りさうにない。そこで、せめては、赫夜姫の家の者になりとも、言葉掛けて見たいと思つて、言ひかけて見たけれども、何等の答へもしてくれない。これでは如何なる熱心家でも腹を立て、断念しさうなものであるが、それにも拘らず、赫夜姫の家のあたりを離れずして、夜をあかし、日をくらす若君達が澤山あつた。けれども、左程に熱心の在る譯では無く、たゞ一寸覗きに來た位の人は無益の夜歩きは、つまらぬと言つて來なくなつた。之とは正反對に、赫夜姫の家の近邊を徘徊してゐた好色連の中の選り抜きの好色家五人は、赫夜姫を思ひ忘るゝ事なく、夜となく晝となく、相變らず近邊を徘徊してゐた。其の名を記してみると、石作の皇子、車持の皇子、右大臣阿倍の御主人、大納言大伴の御幸、中納言石上の麻呂の五人である。たゞ此の人々だけは、相變らず熱心に徘徊してゐた。

世の中に多かる人をだに、少しも貌よしと聞きては、見まほしうする人々なりければ、赫夜姫を見まほしうて、物もくはず思ひつ

よ、彼の家に行きて、たゞすみ歩きけれども、詮あるべくもあらず。文を書きてやれども返事もせず。侘歌など書きてやれども返しもせず。詮なしと思へども霜月極月のふり氷、水無月の照りはたゞくにも、さはらず來けり。

語釋 多かる人。多くある人の約にて、十人並の人を云ふ。○たゞすみ。立休の約にて、行くに立ち止まるを云ふ。○侘歌。思ひ煩ひて、切なる情を訴ふる歌。○霜月極月。霜月は陰曆の十一月にて、霜の降り初むる月なれば云ふ。極月は陰曆の十二月にて、萬事爲果の意、又は歳果の意であらう。○ふり氷。氷雪の降るを云ふ。○水無月。陰曆六月を云ふ。水之月の義にて、田毎に水を湛ふる月なるを以て名く。○照りはたゞく。雷電の烈しきを云ふ。霹靂の二字を、はたゞくと讀む。**通釋** 此の五人の好色家は、世間に澤山ある婦人にて、其の婦人が聊か美貌なりと聞くときは、それを見たと思ふ人々である故に、赫夜姫の美を聞きては、是非に見たしと思ひて、物も食はずに心配し、赫夜姫の家の周に行きて、或は佇立し、或は緩歩して、姫を見んと試みたけれども、其の詮の有らう筈は無い。艶書を書いて送つ

ても姫よりは返事も無い。切なる情を述べた歌を詠み送つても姫よりは返歌も無い。斯くては到底詮も有るまいとは思へども、萬一にも姫を見ることを得べきかと思ひて、陰曆十一月十二月の嚴寒中の雨雪をも物ともせず、陰曆六月の烈しき雷電をも恐れずして、相變らず姫の家に通つて來た。

此の人々、或時は竹取を呼び出でて、「娘を我れに賜へ」と伏し拜み手を摩り宣へど、「己がなさぬ子なれば、心にも従はずなんある」といひて、月日を送る。かゝれば此の人々、家に歸りて物を思ひ、祈りをし願を立て、思ひやめんとすれども止むべくもあらず。さりとも遂に男合せざらんやはと思ひて、頼みをかけたり。

語釋

己がなさぬ子。己が生まれぬ子。○心にも従はず。思ふ通りはならぬ。○かゝれば……止むべくもあらず。有らゆる手段を試みたれども、姫を見る事が出来ぬ故に、斷念するの外なしと思ひ、祈願をかけて斷念せんと試みたれども斷念すること能はずと云ふこと。○さりとも云々。今日までは、姫を見る方法が無かつたけれども、姫も婦人なるからには、遂には男子に合せて結婚せさする事があら

う故に、其の時の候補者にならうと思つて、心に頼みをかけてゐた。

東下り 伊勢物語

伊勢物語は、在原業平の作とも、又伊勢の御(御前)の略にて婦人の敬稱の作とも云ひ傳へられて有るが、これは業平の歌集などの残つてゐたのを基として其の歌の端書を文飾し附會して、後人が筆を加へたものであらうと云ふことである。此の物語は、和歌に基いて趣向を案出して、人(業平)の一代記のやうに綴りなしたものであるけれども、一篇に通ずる脚色のあるわけではない。只簡單なる事件を數多集めて一章毎に歌を附して之を結んだものである。故に、端書の長い歌集と見れば大差は無い。茲に掲ぐるは、この物語の主人公(業平)が東に赴いた一節の記事である。昔、男ありけり。其の男、身をよくなきものに思ひなして、京には居らじ、東の方に住むべき國求めにとて往きけり。もとより友とする人、一人二人して、もろともに往きけり。道知れる人もなくて惑ひいきけり。三河の國八橋といふ所に到りぬ。そこを

八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛クモ手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋とはいひける。其の澤の邊ほとりの木の蔭かげに下り居てかれいひ食ひけり。其の澤にかきつばた、いと面白おもしろく咲きたりそれを見て或人の曰く、かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅の意を詠めと云ひければ詠める。

からごろも、きつゝ馴れにしつ。ましあれば、はるく來ぬるたびをしぞ思ふ。

と、詠めりければ、みな人、かれいひの上うへに涙落なみだして、ほどびにけり。

語釋 男ありけり。男は在原業平を暗に指して云ふ。○ようなきもの。無用のもの。「やうなきもの」と書いた本もあるが、それは益なきものえきなきものの音便で、無益のものと云ふことであるから、何れにしても、結局の文意には變りがない。○東の方。關東を云ふ。○國求めに。國を探し求むる爲に。○水ゆく河の蜘蛛クモ手なれば。蜘蛛の手は八本あつて、八方へ出てゐる故に、八方に分れてゐるを「蜘蛛手」と云ふ。水の流れ

ゆく河が蜘蛛手の如くに八方に分れてゐる故にと云ふこと。○かれいひ。乾飯かんぱんと書いて干飯かんぱんの事を云ふのであるが、これは辨當べんたうを携へて行つた飯をいふので、必ずしも干飯に限るわけではない。○かきつばた。燕子花つばたと書いて、花菖蒲あやむぎに似て、花も葉も、花菖蒲よりは大きいもの。○唐衣。着へ係る枕詞。○着馴妻。着は衣きを着ること、馴なは、衣を久しく着ると、衣と體とが馴れ合ひて善く熟合すること、妻つまは衣の袂たもとで衽あてより下の縁へりを云ふ。されど、これは、上に「唐衣」と云ふ枕詞を置いた爲に「衣」に縁のある詞を以て「着」といひ「馴」といひ「袂」というたのである。要するに「唐衣着つゝ馴れにしは妻」といふための序と、棲み馴れたと云ふ意とを兼ねさせた言葉に過ぎぬ。○ほどびにけり。濕ぬひて膨ふれたりと云ふこと。「ほどび」は「太び」の轉で、膨ふれて大きくなることを云ふ。

通釋 昔、一人の男があつた。其の男は己が身を、此の世に用の無いものと思ひ定めて、もう京都には居るまい、關東の方に住處を求めようとして關東へ赴いた。此の時に、兼てより友としてゐる人を二人つれて、同道して行つたのである。此の同道者の中に、關東の道案内を知つてゐる者が無いから、諸處に惑まよひあるいた。其の中に、三河の國の八橋と云ふ處へ到着した。其處を八橋と云ふは、其處を流れゆく

河が、蜘蛛の手の如くに入つあるので、橋を八つ渡してある故に、八橋といふのである。此の八橋と云ふ處の澤の邊の木蔭に降りて、辨當を食べた。見れば其の澤には燕子花が面白く咲いてゐる。それを見て或人が「かきつばたと云ふ五字を、句の頭に置いて、旅の意を詠め」と申したので、次の歌を詠んだ。

(歌の意) かねて、ともに棲み馴れた家内がある故に、故郷を離れて、遙に、こゝまで来た旅を、悲しく思ふ。

此の歌を詠んだところが、聞く人が、皆悲しくなつて、辨當飯の上に、涙を落したので、辨當飯が膨れて大きくなつた。

往き往きて駿河の國に到りぬ。宇津の山に到りて、我が入らむとする道は、いと、暗う細きに、蔦葛は茂りて物心ぼそく、すゞろなる目を見る事と思ふに、修行者遇ひたり。かゝる道は、いかでかおはすると云ふを見れば、見し人なりけり。京に其の人の御許にとて文書きてつく。

駿河なる宇津の山邊のうつゝにも、

夢にも人に遇はぬなりけり。

富士の山を見れば、五月の晦に、雪いと白う降りり。

時知らぬ山は富士の嶺、いつとてか、

鹿の子斑に、雪の降るらむ。

其の山は、こゝに譬へば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、形は鹽尻のやうになむありける。

【語釋】 物心ぼそく。心ぼそく淋しいこと。○うつゝなる目を見る。不覺の二字を、すゝろと讀む。思ひがけなき意外の目に遇ふを云ふ。○すぎやうじや。修行者で佛教を修業する者。○見し人。かねて京都にて見知れる人。○京に其の人。京都に在る其の人で妻をいふ。○文書きてつく。つくは、ことづけやるを云ふ。文を書いて、ことづけやること。○駿河なる宇津の山邊の。今、駿河の宇津の山に來てゐるに依て、其の地名を記して、下に「うつゝにも」と云ふ爲の序としたのである。○うつゝにも、夢にも。「うつゝ」は現實を云ひ「夢」は現實ならぬ夢幻を云ふ。京都に在る人と、駿河に旅して居る人とが、如何に相慕へばとて、現實に逢ふとのならぬは

言ふまでも無いことであるが、若しも實際に我れを慕うてゐるならば、夢になりとも見るべき筈であると云ふ意を以て云ふ。○さつきつごもり。陰曆の五月三十日を云ふ。陰曆では六月一日から夏の氣節になるのであるから五月卅日には平地には雪は無いのである。○鹿の子斑に。鹿には斑文がある故に云ふ。○比叡の山。近江の比叡山。○鹽尻。鹽を製する濱邊にて、鹽水を沙に注ぎて之を乾かし、鹽分の濃く附着したる砂を積み上げて桶鉢の如き形の高き塚にしたるを鹽尻といふ。此の砂に又潮水を汲みかけて鹽分を洗ひおとし、其の洗ひおとしたる水を煮て鹽を取るのである。

通釋 だん／＼往き進んで駿河の國に到着した。此の國の宇津山に到りて見たところが、これより我が入らうとする道は暗く且つ細きが上に、蕪葛などが茂つてゐて、非常に淋しい處である。こんな淋しい處へ入つたなら、どんな意外の目に遇ふかも知れぬと思つて、躊躇してゐたところが、一人の修行者に遇つた。修行者は我等に辭をかけて「こんな道へは、どうした譯で、おいでなさる」と云ふ故に、其の顔を見れば、かねて京都にて知つてゐる人であつた。依て京都にゐる我が妻の許にて一通の消息を認めて、これをことづけてやつた。此の時に認めて、贈つた歌は左

記の意味である。

○(歌の意) 予は今、駿河の國の宇津の山に來てゐる。地名がうつなればとて、數百里を隔てたる御身と現實に遇ふことの出來ざるは是非に及ばぬ次第である。けれども、御身が熱心に我れを思ふからには、夢になりとも、御身に遇ひさうなものであるに、夢にも御身に遇はぬと云ふは、どうした事であらうぞ。富士の山が巍然として聳えてゐるので、それを眺めたところが、今は五月の卅日、將に夏にならんとする時であるのに、尙雪が白く降つて積つてゐた。そこで、次の意の歌を詠んだ。

(歌の意) 氣節と云ふことを知らぬ山は富士の山である。今は五月卅日であるのに、何時と思つて、あの通り、白く雪が降るのであらうぞ。

其の富士の山と云ふは、此處で譬へて云ふと、比叡山を、二十ばかり積み重ねた程の大きさの山であつて、其の形は、鹽濱にて砂をかき集めて造る鹽尻のやうである。なほ行き行きて、武藏の國と下總の國との中に、いと大きな川あり。それを隅田川といふ。其の川の邊に群れゐて、思ひやれ

ば、限りなくも遠くも来にけるかなと侘びあへるに、渡守はや船
に乗れ、日も暮れぬ」と云ふに、乗りて渡らむとするに、皆人ものわ
びしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥
の嘴と足と赤き、鳴の大ききなる、水の上に遊びつゝ魚を食ふ。
京には見えぬ鳥なれば、皆人知らず。渡守に問ひければ、これな
む都鳥」と云ふを聞きて。

名にし負はゞ、いざこと問はむ都鳥

我が思ふ人は、ありや無しやと、

と、よめりければ、船舉りて泣きけり。

語釋 わびあへるに。互に思ひ煩ひたるに。○渡守。渡船場の船頭。○思ふ人。
心に戀しく思ふ人と云ふ事で、妻を云ふ。○名にしおはゞ。しは強めの助辭。「都
鳥」と云ふと、其の名稱の上に「都」と云ふ言葉を負うてゐるのである。故に、名の上に
都と云ふ言葉を負うてゐるからには、都の事を知つてゐるであらう程に、都の事を

尋ねよう、と云うたのである。○我が思ふ人云々。我思ひをる妻は無事にてゐる
か、どうかと云ふこと。○船舉りて。船中のもの舉りて。

通釋 尙、更に進み行きて、武藏の國と下總の國との界に到りたるに、其處に大きな
る川があつて、それを隅田川と云ふ。其の川の邊に、同伴のもの一同群れゐて、思へ
ば思へば、無限に遠く来た事であるわいと互に思ひ煩うて涙にむせんでゐたるに、
渡船場の船頭は何等の思ひやりも無く、はやく船に乗りなさい、日も暮れた」と云ふ
故に、其の船に乗りて下總へ渡らんとするに、何れも京都に思ふ人が無いわけでも
無き事なれば、又も一ヶ國遠くなる事かと思つて感慨胸にせまりて、思ひ煩うてゐ
たる折しも、白い鳥が見えた。よく見ると嘴も足も赤くて、鳴ほどの大きな鳥が水
の上に遊びながら魚を捕り食ふのである。此の鳥は京都にては見えない鳥であ
ることゆゑ、一同の者が其の鳥の名を知らない。そこで船頭に尋ねたところが、之
は都鳥であります」と云ふを聞いて、次の意の歌を詠んだ。

(歌の意) 其の方は、名稱の上に都と云ふ名を負うてゐるからには、定めし都の事
を知つてゐるであらう程に、さあ都の事を尋ねよう、都鳥よ。我が思つてゐる人
は無事にて有りや否やを知りたい程に、はやく答へてくれよ。

此の歌を詠んだところが、同船のもの一同、感慨に堪へずして泣いた。

攝津の處女塚 大和物語

大和物語は在原滋春業平の次子の作とも、花山院の御作とも云ひ傳へられてあるが、何れも慥なる證據のあるわけではない、只此の頃に出來たものと見れば、善いのである。此の物語の體裁は、全く伊勢物語に倣うて、歌を基として、それに、見聞せる事實を敷衍し若くは假作して書いたものであるが、伊勢物語の如くに、或一人の歌を中心として、其の一代記らしく作つたものではない。之を大和物語と云ふは、外國の物語では無い、日本の物語であると云ふ意であらう。

昔、津の國に住む女ありけり。それをよばふ男二人なむありける。一人は其の國に住む男、菟原になむありける。今一人は和泉の國の人になむありける。姓は血沼となむいひける。斯くて其の男ども、年齢、顔貌、人の程、唯同じばかりになむありける。志の優らむにこそは、遇はめと思ふに、志の程、唯同じやうなり。

暮るれば諸共に來逢ひぬ。物おこすれば、唯同じやうにおこす。何れ優れりといふべくもあらず。女思ひ煩ひぬ。此の人の志の、おろかならば、何れにも逢ふまじけれど、これも、かれも、月日を経て、家の門に立ちて、萬の志を見えければ、しわびぬ。これよりも、かれよりも、同じやうに、おこす物ども、取りも入れねど、いろいろに持ちて立てり。

語釋 津の國。攝津の國。○よばふ男。よばふは、呼ぶの延音であつて、男女相呼ぶを云ふ。こゝは、男女相呼びて、情交を結ばん爲めに、女のもとに、通ひ來る男を云ふ。○人の程。人品と云ふこと。○物おこす。品物を贈る。○おろかならば。疏ならば、と云ふことで、熱心ならぬを云ふ。○志を見えければ。志の切なることを見せければ。○しわびぬ。爲侘ぬと書く。爲るに艱んだ、と云ふこと、即ち如何にして善いか、取計ひ方に困つたと云ふこと。○取りも入れねど云々。折角の贈物を、女の方にては取り入れもせぬけれども、男の方にては、色々の物を持つて來て、門に立つてゐたと云ふこと。

通釋 昔攝津の國に住む娘があつた。此の娘の處へ每晚通つて來る男が二人ほどあつた。一人は攝津の國に住む男で、其の姓は菟原と云ふのである。今、一人は和泉の國の人で、姓を血沼といふ。此の二人の男どもは、年齢といひ、顔貌といひ、人品といひ、まるで同一である。故に娘も、其の熱心の優つてゐる方の男と伉儷を結ばうと思ふが、其の熱心の程度も同一である。日が暮れると二人とも來る。品物を女に贈つたのを見ると、兩方ともに同じ程の物である。故に何れが優つてゐるとは、いはれない。是に於て、娘も、どうしてよいか思案にくれた。娘の心には、もし、此の人等の志が熱心ならずして疎^{オロツカ}であるならば、どちらの男にも逢ふまいと思つたけれども、二人ともに熱心で、長い月日の間、この娘の家の門に立つてゐて、萬事につけて、その切なる志を見せたに依て、娘も其の處置に困つた(しわびぬ)。甲の男よりも、乙の男よりも同じやうに贈り届けてくれる品物をば、娘の方では、取り入れもせぬけれども、男の方では色々持ち來つて、娘の門に立つてゐた。

親ありて、斯く見苦しく、年月を経て、人の歎きを、徒らに負ふも、いとほし。ひとりびとりに逢ひなば、今、一人が思ひは絶えなむと云ふに、女、こゝにも、さ思ふに、人の志の同じやうなるになむ、思ひ煩ひぬる。さらば、いかゞすべきと云ふに、當時、生田川の面に、ひらばりを打ちてゐにけり。かゝれば、其のよばひ人どもを呼びに遣りて、親の云ふやう、誰も志の同じやうなれば、此の稚きものなむ思ひ煩ひにて侍る。今日、いかにまれ、此の事を定めてむ。あるは遠き所よりいまする人あり。あるは此處ながら、其の苦勞限りなし、これも、かれもいとほしき業なりと云ふ時に、いと畏く喜びあへり。

語釋 人の歎きを徒に負ふもいとほし。負ふは負ひ持つこと。いとほしは氣の毒といふこと。○思ひは絶えなむ。戀慕の情は斷絶するであらう。○こゝも。私もと云ふこと。○ひらばり。平張と書く。平に張りて、日の覆ひとしたる天幕を云ふ。○打ちて。張るを云ふ。○よばひ人。娘の處へ通ひ來る人。○いと、かしこく喜びあへり。かしこくは甚しくと云ふこと。大層に喜びあうたと云ふ意。**通釋** 時に此の娘の親があつて、娘に向ひ、幾年月の間、人の歎きを徒に身に負うてゐるのは、先方へ氣の毒であるのみならず、世間に對しても見苦しいことである。

通ひ来る二男子の中の一人に、御身が逢うたならば、あとの一人は断念して、来なくなるであらうというた。ところが、娘は親に向ひ、私とても、左様に思うてはゐますけれども、二人ともに、熱心の程度が同じやうであるので、何れとも決し兼ねて、煩悶するのでありますが、さらば、どうしたならば善からうかと申した。その當時に、この娘は、生田川の水の邊に、天幕を張りて、そこに住んでゐたのであれば、親は、通ひ来る男どもを呼び迎へて、御兩人とも、御熱心の程が同じであるために、この稚い娘が、思ひ定めかねて煩悶いたします。今日は、如何にもあれ、此の事を定めてしまひませう。御兩人のうち、遠方より御通ひになる方もあり、又は、此の國にゐて、御通ひになる方もありますが、何れにせよ、毎晩、お通になる御苦勞は容易ならぬ事である。どちらの御様子を見ても、お氣の毒でありますと申したところが、二人ともに、大層に喜びあひました。

「申さむと思ふ給ふやうは、此の川に浮きて侍る水鳥を射給へ。それを射あて給へらむ人に奉らむ」といふ時に、いと善き事なりと云ひて射る程に、一人は頭の方を射つ。今一人は尻の方を射

つ。當時、何れと云ふべくもあらぬに、女思ひ煩ひて、

住み侘びぬ、我が身投げてむ、津の國の、

生田の川は、名のみなりけり。

と、詠みて、此の平張は川に臨みて、したりければ、つぶりと落ち入りぬ。

語釋

申さむと云々。これは親の言葉。○思ふ給ふ。思ひ給ふの音便で、こゝは

自稱の敬語である。○住み侘びつ。棲息することが嫌になつた。○我が身投げてむ。我が身を投げて死んでしまはう。○生田の川は云々。生田の川と云ふ以

上は人を活かす筈であるが、我れは此の川の邊に居りながら、死なねばならぬ事になつた。故に生田と云ふは有名無實であると云ふ意。○つぶり。水に落ちる音。

通釋

さて娘の親は、二人の男に向つて「申上げやうと思ひまする事は、外ではありませぬ。此の川に浮きて遊びである水鳥を、御兩人とも射て御覽なさい。それを射當てた御方に娘を差上げませう」と云うた時に、二人の男は「それは善い事でありませぬ」と答へて、さて弓を取りて射たるに、一人は、水鳥の頭の方を射て、あとの一人は

水鳥の尾の方を射た。その時、娘は何れが上手で、何れが下手ちやと云ふことの出
來ぬために、煩悶して次の歌を詠んだ。

(歌の意) 此の世に住むのが嫌になつた。此の身を投げて死んでしまはう。攝
津の國の生田川と云ふ川は、生と云ふは名ばかりであつて、實は人を活かす川で
は無いわい。

此の娘のゐた天幕は生田川に臨んで、造つてあつた故に、歌を詠んでしまつてから、
娘はドブリと川に落ちて死んだ。

親あわて騒ぎのゝしる程に、此のよばふ男二人、やがて同じ所に
落ち入りぬ。一人は足を捕へ、今一人は手を捕へて死にけり。
そのかみ、親いみじく騒ぎて、取り上げて泣きのゝしりて、はふり
す。男どもの親も來にけり。此の女の塚の側に、又塚ども作り
て、堀り埋む。時に津の國の男の親いふやう、同じ國の男をこそ
同じ所にはせめ。異國の人の、いかでか此の土をば犯すべきと
云ひて、妨ぐる時に、和泉の方の親、和泉の國の土を船に運びて、こ

ゝに持て來てなむ、遂に埋みてける。されば女の墓をば中にて
左右になむ男どもの塚ども、今もあなる(中略)。かの塚の名をば
處女塚とぞ云ひける。

語釋 はふりす。葬りすに同じ。○今もあなる。今もあるなるに同じ。「なる」と
云ふは、上にある「なむ」の結びである。故に若し「なむ」が無いならば「なり」となるので
ある。

通釋 娘が生田川へ落ちた故に、親は周章して、騒いでゐる中に、娘の處へ通ひ來つ
た二人の男も、すぐに同じ處へ落ちた。一人の男は娘の足を捕へ、一人の男は娘の
手を捕へて死んだ。その時、娘の親は、大層に騒いで、娘の屍を取り上げて泣き騒い
で埋葬した。二人の男の親も來て、此の娘の墓の側に、墓を造つて、男の屍を埋葬し
たが、此の時に攝津の國の男の親は、同じ國の男だけは、同じ處に埋むべきであるが、
他國の男を、どうして、同じ處に埋むることが出來よう。他國の人は、此の國の土を犯
す権利は無いと申して、其の埋葬を妨げた。此の時に、和泉の國の男の親は、和泉の
國の土を船で運んで、持つて來つて、とう／＼其の男を埋葬した。されば、女の墓を

中央にして、左右に男どもの墓を造つたのであるが、其の墓は、今でもある。その墓の名を處女塚と云ふ。

楚の莊王、臣下の無禮を赦す 唐物語

唐物語は何人の作であるか、毫も分らぬが、平安朝の末頃に出来たものであらうといふことである。これは支那の書籍に散見する話説を國文に翻譯して、其の上に、支那人が和歌を詠むと云ふ風に仕組んだ物語を、幾つも纂めたものであるから、一貫せる脚色の無いことも、其の體裁も、誠に善く大和物語に似てゐる。故に大和物語を掲げた序に、茲に掲ぐる事とした。

昔、楚、莊王と申す人、群臣を集めて、よもすがら遊び給ひけり。その御傍に、淺からず思ひ聞えさせ給ひつる后、侍ひ給ふを、人知れず、いかでかと思ひ奉れる臣下あり。燈火の風に消えたりける隙に、後の御袖を取りて引きたりけるを、限りなく憤り深くや思しけむ、御手をさしやりて、此の男のかうぶりの纓を取りて、かゝ

る事なむ侍る、早く火を燈して、纓無からむ人を、それと知らせ給へ」と申し給ふを、みかど素より、人を憐み、情深くおはしければ、燈火消えたる程に、これに侍る人々、各々纓を取りて奉るべし、其の後、火はともすべし」と宣たまはするに、此の男、涙こぼれて嬉しくおぼえけり、かくて燈火あきらかなれど、誰も皆纓なかりければ、其の人と見えざりけり。

語釋 よもすがら。夜も盡ガラの意であるから、終、夜の文字を書く。○淺カサからず思ひ聞えさせ給ひつる后。「聞えは、他の動詞と熟合して敬意を添ふる言葉であるから」「思ひ聞えさせ」は思ひ奉らせと同じ程の敬語である。「后」は莊王の妃をいふ。莊王が深く、かわゆく思召されてゐる妃と云ふ。○人知れず。竊に。○いかでか。何とかして逢ひたいものちや、の下を略したのである。○かうぶり。かゝぶり(冠)の音便。○纓。字典に説文を引いて「冠系也」と云ひ、又釋名を引いて「纓、頸也、自上而繫於頸也」と注してある纓であつて、即ち冠の紐をいふのである。(本邦中古の冠の上の後方に裝飾として立てゝある所の羅ウシキを纓と云ふのは違ふ。○みかど。莊

王のこと。○其の人と見えざりけり。其の人が、後の袖を引いたのだとは見えなかつたと云ふこと。

かゝれども、此の人、いかなるわざしてか、君の情を報い奉らむと、思へりけるに、あるじ、敵の國に攻められて危ふき程におはしけるを、此の人一人、身を棄て、戦ひければ、あるじ、勝たせ給ひけり。此の事を思はずに、怪しくおぼして、其の故を尋ね問はせ給ふに、此の人申して曰く、「我れ、昔、后に、纓を取られ奉りて、思ひやる方なく侍りしに、誰となく、紛はし給ひし事、我れ、今に忘れ侍らず」と泣く泣く申したり。

なさけなき言の葉ならば、今までに、露の命のかゝらましやは。

あるじ之を聞かせ給ふにも、猶、人として情あるべき事にこそと思しけり。

語釋

かゝれども。「かゝれば」と書くべき所であらうと思ふ。莊王、寛大にして臣下の者を助けたれば、と上を承けて云ふのである。○あるじ。主人と書く。莊王を指す。○此の事を思はずに。此の事を知らずに。莊王は嘗て己れの助けた臣下が、今回報恩の爲に奮戦したのであると云ふ事を知らずに。○思ひやる方なく。思ひを晴らす方法なくして、途方に暮るゝを云ふ。○誰となく。誰の仕業と分らぬやうに。○なさけなき云々。此の歌の上に、「大王の情深き御言葉ありし故に、命が助かりしなり、若しもなどの言葉を冠らせて讀むと、意味が善く分かる。」なさけなき言の葉ならばは、若しも情を知らぬ御言葉のありたらんにはと云ふこと。○かゝらましやは。「斯くあらましやは」の約。斯くの如く、今日まで命が有るべきか、否、命は無しと云ふ意。一首の意は萬一、大王より無情の御言葉の下りたらんには、私は其の當時に殺されてしまふ筈。今日まで斯くの如く生きてゐる事は出来ないと云ふこと。

仲忠空洞を發見す

宇津保物語

宇津保物語は源順の作と云ふ説もあるが、何人の作とも分らぬ。一篇の趣向は、清

平安朝散文評釋

宇津保物語

仲忠空洞を發見す

原俊蔭と云ふものが、遣唐使となつて唐へ行く海上にて、暴風に吹き流されて波斯國に漂着し、そこにて琴の秘曲を覚えて歸朝した。俊蔭の死後に、其の女は、おちぶれて京都に住み、藤原兼正と云ふ者と通じて仲忠此の物語の主人公と云ふ子を設けた。此の仲忠は至て孝行の子であつて、善く母を養ひ、山中に入り、大なる杉のうづぼ。此の物語の名稱の出處を見つけて、之に住んでゐて、其處にて母より琴を習うた。此の琴が縁となつて、後に左大將雅頼の最愛の女なる、あての宮。此の物語の女主人公を貫ふ筈になつて、大に宮を戀ひ慕うた。此の外にも、あての宮を慕ふ公達が澤山あつたが、あての宮が、春宮の妃となつた爲に、何れも志を遂げなかつた、と云ふ戀愛小説である。さてこゝに掲ぐるのは、仲忠が山中に入りて、母を養ふ料の木の實をあさりありいた時に、杉のうづぼを見つけたところである。

いかで此の山に、さるべき處もがな。近くて養はむと思ひて、山深く入りて見れば、いみじういかめしき杉の木、よつものを合せたるやうにて立てるが、大きなるやのほどに、あきあひてあるを見て、此の子の思ふやう、此處に我が親を居る奉りて、拾ひいで

む木の實を、先づ參らせばやと思ひて、寄りて見るに、いかめしき牝熊牡熊、子生みつれて住むうづぼなりけり。

語釋 さるべき處もが。然るべき場處があれば善いがと思ふこと。「がな」は願望の助辭。○近くて。近くに居て、即ち、遠く離れない處にゐて、と云ふこと。○いみじういかめしき杉。「いみじう」は「甚だしう」に同じ。「いかめし」は威嚴ありて犯すべからざる意味の言葉であるが、こゝの意は、かうくしくして大なるを云ふ。甚だ立派なる大きな杉といふこと。○よつものを合せたるやうにて。四つの物を合せて、一つの物に拵へたやうにて、と云ふことで、杉の根が四方に張つてゐる爲に、其の幹までが四隅に突起して、宛も四本の樹を一つに合せたやうになつたのである。○大きなるやの程にて。大なる屋、即ち家ほどありて。○あきあひ。口が開いて空になつてゐること。

通釋 仲忠は、母を養ふために毎日、深く山に入りて木の實を拾うてゐたが、或時思ふやう「何とかして、此の山の中に然るべき住處があつて呉れると善い。さうなると、其處に母を置いて、母と離れない處で食物を求めて、母を養ふことが出来よう」と。是に於て、深く山に入りて探がし見たるに、すばらしい大きな杉の木がある。其の

木は、四本の木を一つに合せたやうな形になつて、立つてゐたが、大きな家ほどに、空
が開いてゐる。仲忠は之を見て、此處に我が母を置いて、我れの拾ふ木の實を、先づ
母に奉りたいものであると思つて、近寄つて見たところが、ビックリした。なせと
云ふに、此の空には、恐ろしい牝牡二頭の熊が、子をつれて住んでゐる。

出で走りて、此の子を食ませんとする時に、此の子の曰く「しばし
待ち給へ。麻呂が命、斷ち給ふな。麻呂は孝の子なり。親同胞
も無く、使ふ人も無くて、荒れたる家に、只、獨り住みて、麻呂が參る
物に係り給へる母を持ち奉れり。里には、すべき方も無ければ、
斯る山の果實、葛の根を取りて親に參らするなり。高き山、深き
谷を降り昇り、罷り歩いて、朝に罷り出でて、暗う罷り歸る程だに、
うしろめたう、悲しう侍れば、斯る山の王、住み給ふとも知らで、此
の木の空洞に母を居る奉りて、芋一筋を堀り出でて、先づ參ら
せんと、また遠き道をも、親の爲にと罷り歩けば、苦しうも覚えね

ど徒然と待ち給はんと、悲しう侍れば、近くと思ひ給へて、見侍り
つるなり。

語釋 走り出で。熊が空洞中より走り出で。○此の子。宇津保物語の主人公な
る仲忠。○麻呂。男子の用ふる自稱代名詞。○麻呂が參る物に係り給へる母。
者の差上げる物に依りて露命を繋げる母。○すべき方。爲すべき業。○うし
ろめたう。後目痛しの義にて、後の事に心の係ること。○山の王。熊を指して云
ふ。○先づ參らせんと。下の思ひ給ひて、見侍りつるなりへ續く文脈。○見侍り
つるなり。此の空洞を見たのである。

通釋 熊が空洞中より走り出して仲忠を食はんと致した。此の時仲忠は熊に向
ひ云へるやう「暫時待ち給へよ。拙者の命を取り給ふな。拙者は孝子である。親
も無く、兄弟も無く、又使ふ人も無くて、荒れたる家に、只、獨り、淋しく住んでゐる母の
命は、拙者の差上げる物に依りて繋がれてゐるのである。里の方には、爲すべき業も
無きゆゑに、斯る山の果實、葛の根を取りて母に奉るのである。高山深谷を昇降す
る爲に、朝早く家を出で、日暮れて家に歸る其の間も、母の事が氣に係りて悲しきゆ
ゑ、住處を山中に求めようと致したのである。斯る山の王の住める場處とも知ら

ずして、此の空洞に母を居るおきて芋一つを掘りても、先づ母に差上げたいと思つて此の空洞を見たのである。遠き道を歩くことも、母の爲と思へば、決して苦しとは思はねども、家に残れる母が退屈して待つてゐるであらうと思つて、悲しきゆゑに、近き處にゐて母を養ひたいと思つて、此の空洞を見たのである。

されど、斯く領じ給ひける所なれば罷り去りぬ。空しくなりなば、親も徒になり給ひなん。己が身の中に、親養はん、にやう無き所あらば、せし奉るべし。足なくば、いつくにてか歩かん。手なくば、何にてか、果實、葛の根をも掘らん。口なくば、いつこよりか魂通はん。腹胸なくば、いつくにか、心の有らん。此の中に、徒なる所は、耳のはた、鼻の峯なりけり。之を山の王に、せし奉るゝと涙を流して云ふ時に、牝熊、牡熊、あらしき心を失ひて、涙を落して、親子の悲さを知りて、二つの熊、子供を引きつれて、此の木の空洞を此の子に譲りて、異峯に移りぬ。

語釋 領じ給ひける。所領として持つてゐる。○罷り去りぬ。罷り去りぬべし。の略であらう。○空しくなりなば。此の身が無くならば。○やう無き。益なきの音便にて無益の事。○せし奉る。施し奉る。差上げようと云ふこと。○口なくば云々。口無くば命を繋ぐべき飲食物が通はなくなつて、死ぬるであらう。○耳のはた鼻の峯。耳の端、鼻の梁。○異峯。の峯。

通釋 さりながら、山の王が此の空洞を領せられた事を知りたる上は、速に罷り去りて空洞を返上いたさう。若し拙者が山の王に食はれて、空しくなつたならば、親も生存する事が出来なくなるのであるから、我が命を取り給ふな。我が身體中に親を養ふ爲に無益の個處あらば、其の個處を山の王に施し奉らう。足なくば歩くことならず、手なくば果實、葛の根を掘ることならず、口なくば生きては居られず、胸腹なくば心の宿る場處が無くなる。されば足、手、口、胸、腹の五つは、親を養ふ爲に缺くべからざるものである。故に身體中にて、無くとも差支なきは耳の端と鼻の先だけであるから、之を山の王に差上げよう」と仲忠が涙を流して、熊に云うた。此の時に牝牡二頭の熊が暴き心を失ひ、涙を落して、仲忠母子に同情し、子熊どもを引きつれて他の峯に移り、此の空洞をば仲忠に譲り與へた。

平安朝散文評釋 宇津保物語 仲忠空洞を發見す

落窪の君、繼母に虐待せらるる 落窪物語

落窪物語は源順の作と古くより言ひ傳へられてゐるが、誰の作と云ふことは、慥には分らぬ。落窪とは、外の席よりも一段低く落ち窪みたる席を指して云うた名である。此の物語を斯く名づけたるは、此の物語の女主人公なる中納言の女が、繼母の虐待を受けて、一段低き座席に押込められ、落窪の君と呼ばれた故である。落窪の君は幼きとき繼母の爲に困難したけれども、後に左近衛少將に嫁して榮華を極め、繼母は之に反して零落してしまつた。之が此の物語の一篇の趣向である。さて茲に掲ぐるは、落窪の君が、なほ繼母の許に在りて虐待を受け、悲嘆に沈む様を記した一節である。

やうく思ひ知るまゝに、世の中のあはれに心憂き事のみ思さ
れければ、斯くのみぞ打ち嘆く。

日にそへて憂さのみまさる世の中に、

心づくしの身を如何にせむ。

と云ひて、いたう物思ひ知りたる様にて、

大意 落窪の君が、やうく成長して、分別の生ずるに従ひ、身の不幸を感じて嘆息してゐることを述べ。

語釋 物思ひ知るまゝに。「物思ひ」は憂ひ思ふこと、即ち心配。何人も幼稚の間は、無心である爲に心配と云ふことを知らぬけれども、成長して思慮分別の生ずるに従つて、心配と云ふ事を知るに至るのである。落窪の君も、幼稚の間は、虐待を受けてゐる事にも心附かない爲に、氣樂に思うてゐたのである。然るに追々と成長して、己れ獨り繼母の虐待を受けてゐる事に心附くに及んでは、身の不幸を嘆かすには居られない。是に於て、しみくと心配と云ふことを知るに至つたのである。○世の中のあはれに心憂き事。此の世の中にある、痛はしく辛い事と云ふ意で、主として己れの身の不幸を指して云ふ。○日にそへて云々。「日にそへて」は日増しに。「心づくし」は心を盡して心配すること、即ち氣を揉むこと。「うさは憂さに地名の字、佐を引きかけ、つくし」は盡しに地名の筑紫を引きかけて詞をあやなしたのである。さて、歌の意は、日を経るに従つて辛い事のみ殖えて行く世の中に、氣の揉める我が身を如何したら善からうと云ふことである。○いたう……にて。落窪の

君が大層に心配せる様子にて、おいでなさる。此の下に「おはすなどの言葉を補うて解釋するが善い。

大方の心さま敏くて、琴なども習はす人あらば、いと善くしつべけれど、誰かは教へん。母君の六つ七つばかりにておはしけるに、習はしおい給うけるまゝに、箏の琴を、世にをかしく弾き給ひければ、向ひ腹の三郎君、十ばかりなるに、箏心に入れたりとして、これに習はせ」と北の方の、の給へば、時々教ふ。

大意 落窪の君は心敏くして箏の琴を巧に弾き、その技をば、時々、繼母の生める三郎君に教へたと云ふ事を記す。

語釋 大方の心さま。落窪の君の大體の心さま。○琴。「キン」と讀む。キンの琴とは七絃の琴を云ふ。○人。あらば云々。琴を習はせて呉るゝ人が、若しも有りたらば、落窪の君は必ず巧に弾いたであらうが、習はせて呉るゝ人が無かつたから、琴の弾き方は知らぬと云ふこと。○母君。落窪の生母。此の生母は、落窪が六七歳の頃に歿したのであるが、六七歳なる落窪に、箏の琴を教へておいた。○習はしお

い給うける。習はしおき給ひけるの音便。○箏の琴。十三絃の琴。○世にをかしく弾き。特に面白く弾く。落窪が箏に巧なるを云ふ。○向ひ腹の三郎君。「向ひ腹」は嫡妻腹で、即ち本妻の生めるを云ふ。落窪は妾服の子なれば、繼母の子を、向ひ腹の子といふのである。「三郎君」は三男と云ふこと。○十ばかりなるに。十歳ばかりなる三郎君に。これは、句末の「教ふへ」に係る副詞である。○箏心に入れたり。箏を心に入れた、即ち箏が氣に入つたと云ふことで、三郎君は箏が大好きであるから、之に、箏を教へよと、繼母が落窪に命じたのである。○北の方。貴人の妻を云ふ。此處では落窪の繼母をさす。

つくぐと暇のあるまゝに、物縫ふ事を習ひけるが、いとをかしげに、ひねり縫ひ給ひければ、いとよかめり。ことなる形なき人は、物實やかに習ひたるぞ善きとて、二人の聲の装束、いさゝかなる隙なく、かきあひ縫はせ給へば、しばしこそ物いそがしかりしか。夜も寐もねず。聊か遅き時は、かばかりの事をだに、物憂げにし給ふは、何を役にせむとてならむと責め給へば、うち泣きて、

「いかで、なほ消えうせぬるわざもがな」と、なげく。

大意 落窪が裁縫を巧にせる爲に、繼母より、非常に澤山の縫物を言ひ付けられて、夜も寝ることが出来ないで、困難した事を述ぶ。

語釋

つくとくくと暇あるまゝに。落窪は一室に押込められて、世間に顔を出すこ

とも出来ねば、徒然に困却してゐたのである。「つくくとく」は、よくよく、と云ふこと。よくよく暇で困つてゐた故にと云ふ意。○物縫ふ事。裁縫の技。○をかしげにひねり縫ひ。巧に縫ふこと。○いとよかめり……善き。繼母が落窪に言ふ詞。

「いとよかめり」は、最善からんと見えたり略で、裁縫を習ふは至極善からうと云ふこと。「ことなる形は人に異なりたる美しき容貌と云ふこと。落窪は非常の美人なるに、之を指して勝れたる容貌無き人と云ふは、繼母の悪口である。「物實やかに」は實體に、まじめに、と云ふこと。美貌を有せざる婦女は、裁縫などを、まじめに稽古するが善いと云ふ意。○二人の聲。繼母の女の嫁したる聲二人。○装束。衣服。○聊なる隙なく。縫はせへ係る副詞。○かきあひ。掻き集めて。○しばしこそ忙しかりしか。最初暫時の間だけは、多忙と云ふ程度で忍耐することも出来たが、やがて澤山の縫物を言ひ付けられて、夜中も寝る隙のないやうになつたので、多忙

と云ふ程度を超越して最早忍耐の出来ぬやうになつたのである。「しかは、こそこの結びである。○遅き時。衣服を仕立つる時間の遅れた時。○かばかりの……ならむ。これは繼母の叱る言葉。「かばかり」は、こればかり、と云ふことで、分量の少きを云ふ。「物憂げ」はおつくふげに、苦しうに、など云ふ意。仕立の遅れたのは必ず、おつくふがつて、仕事を怠つた爲に遅れたのであらうと、繼母が叱つたのである。「何を役にせむとてならむ」は、何を職務と心得てゐるぞ、と云ふこと。裁縫する事が其の職務であるのに、何と心得て怠るぞ、と繼母の小言。○うち泣き。落窪が啼くこと。○いかで、なほ云々。これは落窪の意中の歎きを述べたのである。「なほ消えぬるわざ」は、此の上に、尙、一步を進めて消滅する方法と云ふこと。落窪は、一室に押込められてゐるから、まるで、此の世から消滅したやうなものである。然るに更に一步を進めて消滅したいと云ふは、其の身の辛さに死にたいものぢやと願うたのである。

桐壺の更衣の卒去 源氏物語

源氏物語は紫式部の作である。此の物語は桐壺帚木等の五十四帖より成り立つ

平安朝散文評釋 源氏物語 桐壺の更衣の卒去

てゐて、其の趣向は大體二段に分れてゐる。前の四十四帖は「光源氏」と其の北の方なる「紫の上」とを男女の主人公として書いたもので、後の十帖は光源氏の子なる「薫の大將」を主人公とし、之に幾多の佳人を配合して書いたものである。さて、茲に掲げたのは、光源氏の母なる「桐壺の更衣」時の帝の御息所の卒去を記した一節である。其の年の夏、御息所はかなき心地に煩ひて、退出なむとし給ふを、暇更に許させ給はず。年ごろ常のあつしさに、馴り給へれば、御目馴れて、猶暫し試みよ」と宣たまするに、日々に重り給ひて、たゞ五六日の程に、いと弱うなれば、母君泣くく奏して、退出させ奉り給ふ。斯る折にも、あるまじき恥もこそと心づかひして、御子をば留め奉りて、忍びてぞ出で給ふ。限りあれば、さのみも、え留めさせ給はず。御覽じだに送らぬ覺束なさを、いふ方なく悲しと覺さる。

大意 桐壺の御息所が、病氣のため、其の生家に歸りて療養せんとするを、帝の惜み悲ませ給ふことを記す。

釋語 御息所。皇子を生み奉りたる女御、更衣の敬稱。桐壺の更衣は、光源氏を生みし故に御息所と云ふのである。○はかなき心地に煩ひて。「はかなきは苟且にして取りとめたること無きを云ふ言葉であるから、輕微なる病氣に罹りたる事を、斯う云ふのである。○退出。宮中より退出すること。御息所が病氣の爲に生家へ歸ることを云ふ。○年ごろ常のあつし。年來の慢性の病氣。「あつし」は病氣にて熱の出ることを云ふ言葉であるから、病氣と云ふに同じ。御息所は常に虚弱にて煩ひゐたる事ゆゑ、帝は、今回の病氣も亦例の煩ひと思召されて、別段の病氣とは思召されないものである。○馴り。馴れに同じ。○猶暫し試みよ。今少し宮中にて養生して見よ。之は帝の御言葉。○斯る折……心づかひして。これは御息所の心づかひを云ふ。斯る退出の折にも、他の女御、更衣等の平生の嫉妬よりして、途中にて不慮の恥辱を與へらるゝ事があるかも知れぬ」と心配して、愛兒の光源氏をば宮中に留めおいて、成りたけ人に知れぬやうにして、己れ獨り生家へ歸らうとしたのである。○限りあれば。帝が、別れを惜ませ給ふにも、其の限りの有ることゆゑ。○御覽じだに送らぬ。御息所は人の目を忍びて里へ歸らうとするゆゑに帝も、其の退出を見送らぬのである。○おぼつかなさ。心もと無く不安心に思

ふこと。御息所の退出を送らぬ故に、不安心に思召すのである。○いふ方なく悲しと覺さる。云はん方なく悲しく思召さる。

通釋 其の年の夏に御息所は指したる事なき病氣にて、御暇を頂戴して、里へ歸つて養生したいと願うたが、帝は、それを御聞届にならない。帝は、御息所が、平生病氣勝ちである事に、馴れておいでなさる爲に、亦、平生の病氣と思召されたので、猶、暫しの間、宮中で養生して見よと仰せられたのである。斯くしてゐる中に、病氣は日増しに重くなつて、僅に五六日の間に、大層に衰弱した。依て御息所の母は、泣きつゝ、帝に申上げて、御暇を頂戴して、宮中より退出することにした。御息所は帝の特別なる寵愛を受けてゐた爲に、他の女御更衣どもより嫉まれて、これまでも度々その妨害を受けた事がある。故に御息所は、斯る退出の折にも、心の中に、不慮の恥辱を與へらるゝ事が有るかも知れぬと心配して、愛兒なる光源氏をば宮中に留めて、己れ獨り、コツツリと生家へ歸る事にした。帝は固より別れを惜まるゝけれども、惜むにも其の限りがある事なれば、左程に強ひては引き留めなさらぬで、御息所を歸すことになされた。けれども、御息所の退出を御見送りにならぬ事が、御心配になつて、其の事を云はん方なく悲しく思召された。

いと匂ひやかに美しげなる人の、痛う面瘦せていと哀と、ものを思ひしみながら、言に出でてでも聞えやらず。有るか無きかに消え入りつゝ、ものし給ふを御覽するに、來し方、行く末、おぼしめされず。萬の事を泣くゝ契り宣たまはずれど、おほんいらへもえ聞え給はず。まみなども、いとたゆげにて、いとゞなよくと、我れかの氣色にて臥したれば、いかさまにかと、おぼしめし惑はる。

大意 御息所の病み疲れて、氣息奄々たるを見そなはして、帝の憂ひたまふことを記す。

語釋 匂ひやかに云々。御息所の容貌の、つややかに美しきを云ふ。○思ひしみにしみと云ふ。○有るか無きか。居るか居らぬかも分らぬ程に弱つてゐる故に云ふ。○おほんいらへ。御答へ。○まみ。目にて物を見る様子、目つき。○たゆげにて。物憂げにて、たいぎげにて。○なよと。萎え靡くさま。○我れかの氣色。我れか他人かも分らぬ夢中の様子。○いかさま云々。帝は如何にかして、

御息所の病氣を直してやりたいと思召されて御心が迷はれた。

通釋 實につややかに美しい御息所も、今や甚しく面が瘦せてゐる。御息所は誠に悲しいと、つくづく思ひながらも、詞に出しては、何とも申さない。居るか居らぬかも分らぬ程に、だんくと消え入りて、静になつて行く。帝はその有様を御覽になつてもう胸が塞つて、過去の事も未來の事も、一切考へられずに、只、差當りて、御息所を慰めたい一心で、色々の事を涙ながらにお契りなされた。けれども御息所は御返事も申上げない。御息所の目の様子なども、誠にものうげに見えて、いよゝゝ弱つてゆき、我れか人も分らぬ夢中の状態にて臥してゐる。帝は、これを見て、如何にかして、此の病氣を直してやりたいと思召して御心が迷はれた。

輦の宣旨など宣たませても、又入らせ給ひては、更に許させ給はず。「限りあらむ道にも、後れ先だたじと契らせ給ひけるを、さりととも打ち捨てゝは、え行きやらじ」と宣たまはするを、女も、いとみじと見奉りて、

かぎりとして、別るゝ道の悲しきに、

生かまほしきは命なりけり。

いと斯く思う給へましかばと、息も絶えつゝ。

大意 帝が御息所との別れを惜みて、御息所を生家にやらじと仰せられたる事と、御息所の答とを記す。

語釋 輦の宣旨云々。輦は輪が無くして、人の昇き行く屋形車を云ふ。「輦に乗りて宮中より退出することを許す」との勅旨を與へながらも、帝は、尙、御息所を留めおかうとなさつたのである。○入らせ云々。御息所の室へ、帝が御入りなされて、御息所の退出を許さぬ。○限りあらむ云々。生者必死は定まれる道であれば、死の道を指して「限りあらむ道」と云ふのである。死する道をも、諸共に行かうと兼て契りたりとの意。○さりとも。御息所の病氣の重きを指して云ふ。たとひ病氣が重くなりたりともと云ふこと。○打ち捨て云々。帝をば此の世に打ち捨て、残しておいて、御息所一人のみが、死去の旅に立ち行くことは出来まいと云ふこと。○女も云々。御息所も、誠に悲しくおもうて。○かぎりとして云々。「かぎりとして」は帝の御言葉の「限りあらむ道云々」を承けて云ふ。死は定まれる道なれば、之を避くるこ

とは出来ぬ。さりながら、陛下が、左程までに妾を愛して、お嘆きなさるを見奉りては、陛下に別れて死に行く事の悲しきにより、生きてゐたいものちやと思ひますと云ふ意の歌。○いと斯く思う給へましかば。「思うは思ひの音便。誠に斯る事と、思豫て思ひましたならば、申し上げて置きたいことも有りましたが」と云ふこと。「思う給へ云々」は御息所が自らの上に敬語を用ひたのである、古き國文には此の例が多い。○息も絶えつゝ。此處で句が切るゝのであるから、おはしますなどの語を補うて解釋するが善い。

聞えまほしげなる事は、ありげなれど、いと苦しげに、たゆげなれば、斯くながら、ともかくもならむを御覽じはてむと思召すに、今日始むべき祈りども、さるべき人々うけたまはれる、今宵よりと聞え急がせば、わりなく、おもほしながら、退出させ給ひつ。

大意 帝は、兎も角も御息所を宮中に留めおかうとなされたが、御息所の生家にては、今宵より祈禱を始めますとて急がすまゝに、帝も餘儀なく、其の退出を許した事を記す。

語釋

聞えまほしげ……たゆげなれば。御息所は、帝に申上げたいと思ふ事が有るらしい様子ちやが、其の容體が、いかにも苦しうにも、ものうげであれば、と云ふこと。○斯くながら。此のまゝに動かさずに置いて、即ち宮中に在るまゝに置いて。○ともかくも……はてむ。御息所が、死するか生くるかを、此のまゝに留めおいて見届けようとの叡慮である。今日始むべき……今宵より。御息所の里にては、病氣全快の祈禱を今日より始むる筈になつてゐるので、然るべき修驗者が其の御用を承つてゐて、今夜より始めますと、急がしたのである。○わりなく云々。帝は非常に別れ難く思召しながらも、御息所の退出を御許しになつた。

御胸のみ、つと、ふたがりて、つゆ、まどろまれず、明しかねさせ給ふ。御使の行きかふ程もなきに、猶いぶせさを限りなく宣たまはせつるを、夜中うち過ぐる程になむ、絶え果て給ひぬるとして泣き騒げば、御使も、いとあへなくて歸り参りぬ。

大意 御息所退出の後、帝は、いたく御息所の病を案せられて、幾回となく使を走らせて、其の容體を訪はせられた。ところが、使の者は、御息所のなくなつた事を聞いて

て、空しく歸つて來た事を記す。

語釋 御胸のみつとふたがり。「つとは一つ處に留まりて動かぬ狀に云ふ副詞である。帝の御胸には、御息所の事のみ思ひつゞけて、心が他に移らないで、それが爲に胸が塞がる故に云ふ。○つゆまどろまれず。少も、お眠りなされず。「つゆは露程も。「まどろむ」は、暫時の間、我れ知らず眠ること。○明しかね。夜を明かしかぬる、即ち夜の明くるを待兼ねるを云ふ。○行きかふ。往き返り。○いぶせき。氣が塞がりて苦しいこと。○夜中……果て給ひぬる。これは御息所の邸内の者の言葉であつて、それを使の者が聞いて來たのである。意は、夜半過ぎに御息所が絶息なされたと云ふこと。○あへなくて歸り。張りあひ抜けがして歸る。

聞しめすおほん心惑ひ、何事も覺しめしわかれず、籠り坐します。御子は斯くてもいと御覽ぜまほしけれど、斯る程に、さぶらひ給ふ例なき事なれば、退出たまひなむとす。何事のあらむとも思ほしたらず。さぶらふ人々の泣き惑ひ、上もおほん涙の隙なく流れおはしますを、怪しと見奉り給へるを。よろしき事にだに、

斯る分れの悲しからぬは無きわざなるを、まして哀れに、いふかひなし。

大意 御息所の卒去を聞いて、帝の悲ませ給ふ事と、光源氏の極めて、あどけなき様とを記す。

語釋 聞しめす御心惑ひ。帝は御息所の卒去を聞召された御愁嘆の爲に。○何事も覺しめしわかれず。ボンヤリとして夢中でおいでなさる。○籠り。寢室に籠りをること。○御子。光源氏。○斯くても。母の御息所は亡せられても。○斯る程……例なき。「斯る程」は、忌中の時をさす。忌中に宮中に留まり居る例はない。○退出たまひなむとす。光源氏が、宮中より退出して母の生家へ御出でにならうとする。○何事の云々。光源氏尙極めて稚きを以て、己が母の卒去をも知らない。故に何事のあらうとも思つてゐない。○上も。主上も。○怪しと見奉り給へるを。光源氏が人々の泣き悲むのを、不思議がつて見てゐるのを。此の下に「見ては、涙に咽ばぬものは無いなどの言葉を補うて解釋せよ。○よろしき事に云々。悪しき事が有つて別るゝのでは無くして、よろしき事の爲に別るゝのであつても、親子の別れと云ふは悲しいものである。まして今回の別れは、人生の一大不

幸の爲に別るゝのであるから、其の哀れなる事は言ふに及ばぬのである。「かゝる別れは親と子との別れを云ふ。「いふかひなしは、言ふだけの効能は無い、即ち言うても何にもならぬ」と云ふこと。何人も承知の事なれば、言ふ必要は無いと云ふのである。

限りあれば、例の作法にをさめ奉るを、母北の方、同じけぶりにも登りなむ」と泣きこがれ給ひて、御送りの女房の車に慕ひ乗り給ひて愛宕といふ所に、いと、いかめしう其の作法したるに、坐し着きたる心地、いかばかりかはありけむ。「空しき御からをみるく、尙おはするものと思ふが、いと、かひなければ、灰になり給はむを見奉りて、今は亡き人と、ひたぶるに思ひなりなむ」と、さかしう、の給ひつれど、車より落ちぬへう惑ひ給へば、さは思ひかしたと、人々もて煩ひ聞ゆ。内より御使あり、三位の位贈りたまふよし、勅使来て、其の宣命讀むなむ悲しき事なりける。

大意 御息所の亡骸を火葬すること、御息所の母の泣き悲むこと、御息所に三位を贈ることを述ぶ。

語釋 限りあれば。亡骸を茶毘一片の煙となすに忍びず、永く留め置きたいと思つても、それには限りの有ること故。○例の作法。例の通りの仕方に従つて火葬する。○同じけぶり。御息所と同一の煙り。○女房。侍女を云ふ。○愛宕。山城の地名にて火葬場の在る所。○いかめしう作法したるに。おごそかに、式を設けたる處に。○空しき御から。魂なき骸。○みるく。見てをりながら。○ひたぶるに思ひなりなむ。一向に思ひ明めよう。○さかしう。殊勝げに。○さほ思ひつかし。斯うであらうと思つた。侍女等の意中にて、思つてゐたのである。○もて煩ひ聞ゆ。もてあますと云ふ事。「聞ゆは、申す」の敬語であるから、もてあまし申す、と云ふ事、即ち處置に因る事になる。○内より。禁中より。

通釋 御息所は亡せられたけれども、其遺骸を茶毘一片の煙となすには忍びない。さりとして無限に其の遺骸を留めおく譯には行かぬ故に、例の通りの仕方に従つて葬儀を営むことにした。御息所の母は痛く愁傷して、己が體も、御息所の體と同一に、火葬の煙になつてしまひたい、と申されて、泣き焦れて御葬送の侍女の乗る車に

乗つた。さて、愛宕と云ふ處の火葬場におごそかに、式を設けたる場所へ、此の母の到着した時の心地は、どんなであつたらう。此の時、母は、魂の無き空しき骸を目撃してゐるにも拘らず、尙御息所の存生せるやうに思はるゝのが、誠に悲しい故に、火葬にされて、灰になつてしまつたのを見届けて、いよゝゝ此の世に亡い人ぢやと思ひ明めたいと、言葉の上には尤もらしく、云はるゝけれども、其の實は心も錯亂して、車から落ちさうに感ひ騒いでゐる。之を見て侍女どもは、定めし、こんな事であらうと思ひましたがと、云うて、其の處置に困つてもてあましてゐた。此の時、禁中より、御息所に三位の位を贈り給ふ由の沙汰があつて、勅使が來て、其の宣命を讀みあげたが、其の光景は何とも名狀し難い程に悲しい事であつた。

狭衣大將源氏宮を慕ふ 狭衣物語

狭衣物語は紫式部の長女なる大貳三位の作ともいひ、或は三位の妹なる辨局の作ともいひ、或は其の他の者の作とも云ひ傳へてあるので、今、之を確むることは難い。此の物語の主人公は狭衣大將とて、容貌才學ともに衆に秀で、特に管絃に巧なる才子である。時の天皇狭衣の笛の音に愛でて、最愛の皇女なる二の宮を與へようと

なされたが、狭衣には外に意中の佳人がある。其の佳人とは己が従妹に當つてゐる源氏宮先帝の皇女である。狭衣と宮とは相愛の情、切なるにも拘らず、或事情に妨げられて其の意を遂ぐる事が出来ない。之がために狭衣の品行が亂れて、幾多の婦女に關係するに至りても、尙源氏宮を戀しく思うてゐた。これが、此の物語の趣向である。さて、茲に示すのは、狭衣が源氏宮の室に至りて、切なる情を告ぐる一節である。

暑さの、わりなき程は、水こひ鳥にも劣らず、心一つに焦がるゝを、知る人も無し。晝つ方、源氏の宮の御方に参り給へれば、白き薄物の單、着給ひて、いと赤き紙なる文を見給ふ。御色は單よりも、白う透き給へるに、額に髪、のゆらくと懸り溢れ給へる裾は、やがて、後と等しう引かれいきて、こちたう、たゝなはりたる裾のそぎする、幾年を限りに、生ひ行かむとすらむと、所せげなるものから、たをくと、あてになまめかしう見え給ふ。隠れなき御單に、御髪の際々より見えたる御腰つき肱などの美しさは、人にも似

たまはねば、餘り、思ひしみにけむ我が目からにやと守られて、例の胸は、つぶくとなり騒げど、よく忍び返して、つれなくもてなし給へり。「いと暑き程に、如何なる御文御覽するぞ」と聞え給へば、齋院より繪など給はせたる」とて、くま無き日の景色に、華々と匂ひみち給へる御顔つきを、まはゆげにおぼして、少し打ち赤みて、此の御文に紛はし給へる用意、氣色、まみなど言ひ盡すべうもあらず。

語釋 暑さの……人もなし。狭衣大將は、源氏宮に對して深く思ひを焦がしてゐるが、それを誰も知らぬと云ふこと。「暑さのわりなきは折しも盛夏の頃で、暑氣の甚しきを云ふのではあるが、又大將が宮を思ふ熱心の甚しき事にも引きかけて云ふ。下の「焦がるゝも、暑さの縁語である。「水こひ鳥は、下紐に「胸火の如く赤き也」とも、極暑の頃鳴く鳥也」とも注してあるが、どんな鳥だか分らぬ。胸が赤色であつて、夏時に頻りに啼く故に、水を戀しく思うて啼くのであらうと云ふ意を以て「水こひ鳥」と云ふのであらう。「心一つに焦がるゝは、大將が一意専心に宮を慕うて思ひ

焦がるゝを云ふ。○晝つ方云々。晝頃に大將が源氏の宮を訪問したるに。○白き薄物の單着給ひて。源氏宮が、白色の薄き織物の單衣を着てゐて。○御色は云々。源氏宮の膚色が、單衣を透して、白く見ゆる。○ゆらゆら。揺々と書く。あちこちに揺れ動くさま。○裾。髪の手で、髪の手を云ふ。○後と等しう引かれいきいてゐる。髪が長くして座席に引きずりたるさまを云ふ。○こらたう。言痛く音便で、甚だ多きを云ふ。○たなはり。畳み重なる。○裾のそぎすゑ。髪の手で、髪の手を云ふ。○たなはり。畳み重なる。○裾のそぎすゑ。髪の手で、髪の手を云ふ。○幾年を限りに生ひゆかむとすらむ。源氏宮の長き髪の手が、殺ぎ落してあるを見て、此の髪は、今後幾年の間、伸びゆく事であらうかと、其の髪の手を歎美するのである。○所せげなるものから。髪が澤山にあつて場所も狭いと云ふ程に見えてはゐながらも。○たをく……見え結ぶ。「たをく」は、やはらかに撓みたるさま。「あてには、上品に。「なまめかしう見え給ふは、美しく婀娜なる狀に見ゆる。○隠れなき御單。宮は薄き織物の單を着てゐる故に、膚が見え透きて隠れなき故に云ふ。○御髪の手。髪の手が垂れさがつてゐる間から、中體が見ゆるのであ

る。○人にも似たまはねば。此の世の婦人とは思はれぬ程に美しく見ゆる。天女でもあるかと思ふ程に美しく見ゆる。○餘り思ひしみにけむ我が目からにや。餘りに深く思ひこんであるために、目がどうかして、こんなに美しく見ゆるのではあるまいかと我が目の正否を疑ふのである。○守られて。一つ物を見つめてゐることを「守る」といふ。目が其の方に専ら引寄せらるゝと。○胸はつぶくとなり。○心臓の鼓動の次第に烈しくなること。○忍び返して。こらへ忍びて。○つれなくもてなし給へり。大將が何氣なきやうに装ひわたるを云ふ。「つれなくは氣強くそ知らぬ顔つきをしてゐること。○いと暑き……御覽する。これは大將が源氏宮に云ひたる言葉。こんな暑い日であるのに、何の書物を御覽になりますか。○聞え給ふ。聞かせ給ふで、御断を申上げたまへばと云ふこと。○齋院より繪など給はせたる。これは宮の返事言葉。「齋院」とは、古天皇御即位の時、未婚の皇女を選びて加茂神社に奉仕せしめたるもの。齋院より、繪の本を頂戴したれば、それを見てをりますと云ふこと。○くまなき日の景色。影なき日光。○華々と匂ひみち給へる御顔つき。源氏宮の顔つきを云ふ。花やかに映えて美しき顔つきと云ふこと。○まばゆげに思して。大將が源氏宮の顔を見ることを、眩しく思

うて正視しかねたること。○此の御文に紛はし云々。其の時に丁度源氏宮が書物を見てゐたので、大將も其の書物を覗き見る體に装うて、己れの顔つきを紛はしたが、其の用心其の様子ぶり、其の目色などは、言葉を以て形容することは出来ない。と云ふこと。「まみは目をあげて見る目色を云ふ。

通釋 折しも夏の事であつて暑氣が非常に甚しい。夏には水こひ鳥は、水を戀しく思うて頻りに啼くものであるが、狭衣大將が源氏宮を戀しく思うてゐることは、水こひ鳥が水を戀しく思ふのにも劣らない。大將は、只一意専心に、源氏宮に焦がれてゐるけれども、其の意の切なることを知る人も無い。大將は晝頃に源氏宮を訪問したところが、宮は白色の薄織物の單物を着てゐて、赤色の紙に書いた文を見てゐた。宮の膚色は、單物を透して白く見えてゐる上に、額の髪はふさくと澤山に垂れて、其の末は背に垂れた髪と同じやうに座席に引きすつてゐて、大層に疊み重つてゐて、いかにも美しい。其の髪の末は切り揃へてあるが、このそぎ末は、今後幾年ぐらゐ伸びてゆくことであらうかと、行末ゆかしく思はるゝ。髪は、いかにも澤山にあつて座席の狭いほどに見えてはゐながらも、物利からに且つ上品に見える。透き通る單物を着てゐるに依て、髪の垂れてゐる間から、腰や腕などが見ゆ

るが、其の美しいことは、人間界のものとは思はれない程である。是に於て、大將は、「餘り熱心に思ひ込んだ爲に、目の迷ひで斯う美しく見ゆるのではあるまいか」と思ふて、宮の方を夢中になつて見つめてゐると、心臓の鼓動が次第に烈しくなつてくる。けれども、其の戀情をば顔色に出すまいと思つて、一生懸命に堪へて、素知らぬ様子を装うてゐる。さて大將は膝を進めて、實に暑い時候でありますのに何の書物を御覽なさいますかと云へば、宮は「齋院より繪本を下さいましたから」と答へたが、折しも日光が隠れなく差し入りて、宮の顔に當つて、宮の顔は花やかに映えて、つや／＼としてゐる。大將は宮の顔を正視するのを、何となく眩しいやうに思つて、少々顔を赤くして、己が舉動をば宮の見てゐる書物にかこつけて紛らかさうとしてゐたが、其の用心、其の様子、其の目色などは、到底、言葉を以て之を言ひ盡すことは出来ないから、讀者は之を推量するが善い。

めでたう見え給ふに、涙さへ落ちぬべう覺え給ふまぎらはしに、此の繪どもを見給へば、在五中將の日記を、いとめでたう書きたるなりけり」と見るに、あひなう一つ心なる心地して、目とゞまる

所々多かるに、得忍び給はて、こは、いかゞ御覽ずるとて、差し寄せ給ふまゝに、

よしさらば、昔のあとを尋ね見よ、
我れのみ迷ふ戀の道かは。

とも云ひやらす、涙の、ほろ／＼とこぼるゝをだに怪しとおぼすに、御手をさへ捕へて、袖の箒せきやらぬ氣色なるに、宮いと、あさましう、恐ろしうなり給ひて、やがて、捕へ給へる御脰にうつぶし、臥し給ひぬる氣色の、言ひしらぬ者に捕へられたらむやうに、おぼしたるも、いとゞ心騒ぎして、こゝら思ひつむる心のうちを、かたはしをだにも、うち出づべうもなく、涙にのみ、おぼれ給へり。

語釋 めでたう見え給ふ。源氏、宮の様子が美しく見ゆる。○涙さへ云々。大將は、宮の美を見て、感極まりて涙が垂れさうになつたのであるが、それを紛らかす爲に繪本の方を見たのである。○在五中將の日記。在原業平の日記であるから、伊

勢物語のことであらう。業平は阿保親王の第五子で、在原の姓を賜はり、右近衛中將となつた故に在五中將と云ふのである。○めでたう書きたる。奇麗に書いた。○あひなう……心地して。「あひなうは間無で、區別なきこと。」「一つ心は業平の心も、大將の心も、女を戀うてゐるのは同じである」と云ふこと。これは、大將が「己れも業平も同じである」と思つたのである。○目とゝまる所々。業平の日記中に、大將の目の留まる個處。これは戀愛の記事に、目が留まりたるをいふ。○得忍び給はで。もう堪へかねて。大將、これ迄は、務めて平氣を装うてゐたが、いよく堪へかねて、意中を打ちあけんとするのである。○こはいかい御覽する。大將の言葉。「こはは、之はで、次の歌を云ふ。○よし、さらば云々。昔のあとは古人の事蹟。戀の道かはは反語で、戀の道では無いといふこと。○云ひやらす。やるは爲すと云ふ意の語であるから、此處は、たゞ云はずと云ふことである。○涙の云々。大將が涙を垂れたのである。○怪しとおぼす。宮が、大將の様子ぶりを、不思議に思ふ。○御手云々。宮の手を大將が握つたのである。○袖の箒せきやらぬ氣色。大將が、さめざめと涙を流すを云ふ。「箒は竹木などを横に並べて、水を塞きとむるものである。」「袖の箒と云ふは、袖を以て水(涙)を塞き止めんとせし故に、比喻を以て云ふの

である。「せきやらぬ氣色は塞き止まらぬ様子」と云ふと、涙が袖から漏れて止まらぬ故に云ふ。○あさましう恐ろしうなり。大將の様子のみならず、宮を見て、宮は呆れて恐ろしくなつたのである。○御腕。大將の腕。○言ひしらぬ者。言ふことの出来ぬもの、名狀し難きもの、など云ふ意で、恐ろしき者を云ふ。宮は、大將に手を握られて、ビツクリして、其手の上にうつつ伏しになつた。それを見て大將も、宮は何か恐ろしい者に捕へられたやうに思ふのであらうと察したのである。○いと心騒ぎして。大將の心臓の鼓動が、ますます烈しくなりたるを云ふ。前に「胸は、つぶつぶとなり騒げど」と云うてある故に、其の「一層烈しくなりたるを」と云々と云ふのである。○こゝら思ひつむる心。こゝらは許多と云ふこと。いろいろと思ひ詰めてゐる心。○うち出づ。語り出す。○おぼはれおたり。漏れてゐた。涙の中に溺れたと云ふのは、涙の滂沱たるを誇張して云ふ形容である。

通釋 源氏宮の姿がひどく美しく見いたので、大將は、ますます情が動いて、心臓の鼓動は云ふに及ばず、涙までも溢れさうに思はれた。此處で涙を落してはならぬと、大將も思はれた故に、それを紛らかす爲に、宮の讀んでゐる繪本を覗いて見たところが、其の繪本は在原業平の日記を、大層奇麗に書いたものであつた。此の日記

に戀愛の記事の多いことは何人も知るところである。大將はそれを讀んで行く
と、業平の心も己れの心と同一であるやうな心地がして、目に留まる記事が、其の書
中に澤山に見ゆる。己れの情火は、此の日記のために、ますます／＼煽らるゝのである。
今や大將も堪へかねて、突然に「これを何と御覽なさいますか」と云うて、次の歌を書
いた紙片を宮へ突きつけた。

(歌の意) 然らば古人の事蹟を調査して御覽なさい。古人も多くは戀の道に迷
うたものであります。決して、私一人のみが迷ふのではありませぬ。

大將の言葉の、未だ終らぬに、大將の顔には涙がポロ／＼溢れてゐる。餘りに突然
の事であるから、宮は何故とも合點がゆかないで、不思議に思つてゐた。大將が涙
を落した事だに、宮は怪しと思つてゐるのに、大將は宮の手を握つて、むせび泣きを
して、袖で拭ひきれぬ程に涙をこぼした。宮は大將の舉動の只ならぬを見て且つ
呆れ且つ恐ろしくなつて、己れの手を握つてゐる大將の脰の上に、うつ伏しになつ
て伏した。其の伏したる様子を見て大將は、宮は宛も、名狀し難き者に捕へられた
やうに思ふのであらうと思はないでは無いけれども、己れの胸はと云ふと、心臓の
鼓動が、いよ／＼、ますます／＼烈しくなつて來たれば、いろ／＼と思ひ詰めてゐる心

中の一端をも、打ち明けて云ひだす事が出來ないで、涙に咽んで泣いてゐた。

大湊を出帆す 土佐日記

土佐日記は紀貫之が土佐守の任期が満ちて、朱雀天皇の承平四年十二月二十一日
に土佐國を出帆して、翌五年二月十六日に京都に着するまでの船路の日記である。
當時は、尙、漢文隆盛の時代であつて、男子の書いたものは多くは漢文を用ひ、假名書
きの國文は概して婦女子に用ひられた。故に國文にて認めたる此の日記の巻頭
には、男もすといふ日記といふものを、女も、して見んとてするなりと記して、此の日
記が婦女子の手に成れるものゝ如くに裝うてある。此の日記を讀む者は、其の心
して見るが善い。さて茲に掲ぐるのは、承平五年正月九日に、土佐國の大湊を出帆
して同國の那波と云ふ處に泊するまでの記事である。

九日。つとめて、大湊より那波の泊を追はむとて漕ぎ出でけり。
これかれ互に、國の境の内はとて、見おくりにくる人數多が中に、
藤原の言實、橘の季衡、長谷部の行政なむ、御館より出でたうひし

日より、此所彼所におひくる。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。

語釋 九日。これは九日の記事なる由を示したのである。つとめて、つとは風。其の翌朝夙くと云ふこと。これは前夜(八日の晩)に深更まで月を賞し居たる記事を受けて云ふ故に、つとめてと云ふのである。○大湊那波。何れも土佐の碇泊地。○追はむ。風に追はれて進行するを、追ふと云ふは舟子の方言を其の儘に記したものであらう。○御館より云々。土佐守が、その御屋敷より、御出立なされた日から。これは傍觀せる婦人の書いたもの、如くに装うた爲に、斯く爲いたのである。「出でたうびのたうびは、たびの延音で、給ひ」と同義の敬語である。

通釋 九日の記事。八日の晩には、夜の更くるまで月を賞してゐたが、翌九日には朝早く大湊を出帆して、那波の湊へ進航しようとして船を漕ぎ出した。此の時、彼の人も此の人も、互に土佐の國の境の内だけは土佐守の歸京を送りたいと申し、見送つて來る人が澤山にあつた。その見送り人の中に藤原言實、橘季衡、長谷部行政の三人がゐたが、此の三人の者は、土佐守紀貫之が、其の御屋敷を御出立なされた

日より、此處にも彼處にも、後を追うて、遙々と見送つた人々である。此の人々こそは、志の厚いものと申さねばならぬ。此の人々の志の深さは、此の海の深さにも劣らぬことであらう。

これより、今は、漕ぎ離れて往く。これを見送らむとてぞ、此の人どもは追ひきける。かくて漕ぎ行くまに、海の邊にとまれる人も遠くなりぬ。船の人も見えなくなりぬ。岸にも、いふ事あるべし。船にも思ふことあれど、かひなし。

語釋 漕ぎ離れ。大湊より漕ぎ離るゝこと。○此の人ども。上記の三人及び數多の見送り人を云ふ。○船の人も見えなくなりぬ。これは船中より岸上の方を察して云ふのであるから、見えなくなりぬらむの下略と見て解釋すべきであらう。船中より見るに、岸上の人も遠くなつたれば、岸上よりは、定めし、船の人が見えなくなつたらう、といふこと。○かひなし。その効用が無い。岸上の人にも何ぞ言ひたい事があらう、船中の人にも、言ひたいと思ふ事があるが、距離がだん／＼遠くなつて、聲が届かぬゆゑ、何と思ふとも効能が無い。

かゝれど、この歌を獨言にしてやみぬ。

思ひやる心は海を渡れども、

ふみし無ければ知らずやあるらむ。

語釋

かゝれど云々。船にも思ふ事あれど、かひなしを承けて云ふ。船中にて何と言ふとも、其の聲が岸に達する譯では無ければ、無益の事ではあれども、次の歌を詠んだ。されど、岸上にて何と答ふべき譯も無きゆゑ、獨言に止まつたのであると云ふこと。○思ひやる云々。双方にて、互に思ひやる心は海を渡つてゐる、即ち岸上の人の心は海を渡つて船中に及び、船中の人の心は海を渡つて岸上に及んでゐるけれども、勿論、聲の届かぬ處なる上に、文を送り届くることも出来ぬゆゑに、こちらにて思ふ心の中を、あちらにては、知らずに居ることであらう。さて、文は、渡るの縁を以て、踏を引きかけて用ひたのである。

かくて宇多の松原を歩き過ぐ。其の松の數、幾そばく、幾千年へたりと知らず。もとごとくに浪うちよせ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。おもしろしと見るに堪へずして船人のよめる歌。

見渡せば、松のうれごとにしむ鶴は、

千代のどちとぞ思ふべらなる。

とや。この歌は、所を見るに、えまさらず。

語釋

宇多の松原。土佐の海岸にある松原の名。○いくそばく。幾十許の轉で、幾許と云ふに同じ。○もとごとくに。松の木の根本毎に。○飛びかふ。飛びちがふと、即ち、こちらから飛び行き、あちらから飛び來りて、互に飛びちがふこと。○船人。船人は船中の人を云ふにも、船子を云ふにも用ふる語であるが、茲では船中の人であらう。○松のうれ。松の末、即ち松の梢。○千代のどち。どちは連、仲間、同志など云ふに同じ。松は常緑樹であるから、幾年たつても色が變らぬ。鶴は千年の壽を保つと云はるゝ鳥である。故に松と鶴とは千代も變らぬ友達同志と思ふであらうと云うたのである。○思ふべらなる。べらは平安朝頃の俗言であつて、其の前にも後にも無い言葉である。正しく云へば、思ふべきなると無ければならぬ。「なるは」なり」の連體段で、ぞ」の結びである。○とや。……とかや歌ひしやうに覺ゆ」と云ふを略して云うたのである。此の歌は、貫之の詠んだのであらうけれども、

此の日記は例の如く、傍觀者の書ける體を装うたものゆゑ、船中の人が、こんな歌を詠んだやうに覺ゆと、漠然と記したのである。○この歌は云々。此の歌は、之を宇多の松原の明媚なる景色に比較すると、勝ることは出来ない。一體、景色などを歌に詠めば、歌の形容の方が、實景よりも勝るのが常であるけれども、此處の景色は非常に美しい爲に、歌の形容にては、其の實景を寫すに足らぬのである。

かくあるを見つゝ漕ぎ行くまに、山も海もみな暮れ、夜更けて、西ひんがしも見えすして、てけのこと、櫂取の心に任せつ。

語釋 見えすして。見えないからして。○てけのこと。天氣の事。天氣次第にて、船を進め、又は止めねばならぬが、其の事は素人に分らぬゆゑに、すべて、船子に任したのである。○櫂取。船子を云ふ。

男も、ならばねば、いと心細し。まして女は船底に頭をつきあて、ねをのみぞなく。かく思へば舟子櫂取は船歌うたひて、何とも思へらず。その歌ふ歌。

春の野にてぞねをばなく。わが薄にて手をきるきる、つんだ

る菜を、親やまほるらむ、姑やくふらむ。かへらや。よんべのうなるもがな。錢請はむ。そらごとをして、おぎのりわざを

して、錢も、もてこず、己れたにこず。

これならず多かれど書かず。これらを人の笑ふを聞きて、海はあるれど、心は少しなきぬ。

語釋 男もならばねば云々。男子でさへも、船路に馴れてゐない故に心細い。女子の心細いとは云ふに及ばぬ。男は暗に貫之を指す。○ねをのみぞなく。音を立て、泣く。○かく思へば。船中の者が何れも心細く思へば、と云ふことで、此の下に、舟子櫂取も、同情の涙を注ぎさうなものであるに、などの意が省かれてある。○思へらず。思へる様子が無い。○薄にて云々。野に出でて菜を摘む時に、薄の葉にて手を傷けたのである。○親やまほるらむ。親は、菜を借りに来た小供の親。「まほる」は言海に「まハ發語カ、或ハ旨欲ルノ意カ、むさぼるノ約トイフハイカ、欲ヲテ食フ云々」と解いてある通り。○かへらや。これは節の詞であるから、歌意には關係が無い。たゞ歌曲の調を助くる爲に、聲を出して囁すのである、今の俗曲の間

に挟む、コリヤ／＼の類。○よんべ。昨夜の音便。○うなるもがな。「うなるは項居で、幼少なる子供の結びたる髪を後に垂れたるを云ふ。」がなは願望の助辭で、小供の再び來んことを願ふのである。○錢請はむ。菜の錢を請求しよう。○そらご。虚言を以て欺く。○おぎのりわざ。掛にて物を買ふこと、即ち代金を後日に拂ふ約束にて物品を買ふこと。○己れだに來ず。錢を持參せざる迄も、言譯のために其の身だけは來さうなものであるが、來ない。だには重き方を省いて、輕き方を云ふ時に用ふる助辭。○これならず。此の歌のみならず、他にも多くの歌があつた。○海はあるれど心はなきぬ。海は依然として荒れてゐるけれども、餘りの可笑さに、心はおちついて和いだ。和ぐは、風が止んで波の靜まることを云ふ言葉であるが、それを轉じて心の和平を云ふ言葉に用ひて洒落たのである。

通釋 男子貫之も船路に馴れてゐない故に、誠に心細い。まして女の心細がることは言ふに及ばぬことなれば、船底に頭をつき當て、俯伏になつて聲を立て、泣いてゐる。船客の有様が此通りなれば、舟子機取なども、幾分か同感しさうなものと思ふに、少も同感する様子は無くて、平氣で船歌を歌うてゐて、何とも思つてゐない。其の歌の意味は次のやうなものである。

(歌の意) 春の野に出て、予は聲を立て、泣く。それは、菜を摘まうとして、薄の葉で手を傷けた故である。こんな苦しい思ひをして、摘み來つた菜をば、あの使に來た小供の親は甘がつて食ふとであらうし、姑も食ふとであらう。コリヤ／＼。昨夜、使に來た、あの小供が今日、來れば善いのに。あの小供が來ると、菜の代金を請求しようものを。あの小供は、虚言を言うて、菜を借りていつて、錢も持て來ないのみならず、其の言譯の爲にも來ない。

此の歌ばかりではない、此の外にも、歌が多くあつたけれども、茲には記さぬ。こんな風の歌ゆゑ、人が可笑がつて笑うた。之を聞いた爲に、海は尙、依然として荒れてゐるけれども、心の方は少しく落ちついた。

かくゆき暮して、泊に至りて、おきな人ひとり、たうめ一人あるがなかに、心ちあしみにして、ものも物し給はでひそまりぬ。

語釋 泊。那波の湊。○おきな人。貫之を指す。○たうめ。老女を云ふ。○あるが中に。數多の乗客の中に。○ものも云々。何事もなさらずして潛んで居た。

通釋 此の日の船路は、こんな有様で進航して行く間に、日が暮れて那波の湊に碇

泊した。時に老翁一人、老女一人は、數多の乗客の中に在りて、船酔の爲に心地が悪くして、何事もなさらずして潜んで居られた。

父に従ひて上總を出づ 更科日記

更科日記は菅原孝標の女後に橘俊通の妻の著した日記である。著者の父孝標は後一條天皇の朝に上總介となつて、久しく任地に居た爲に、著者も父と與に上總に居て、そこで成長したものであらう。著者は十三歳になつた年の九月三日に、父に従つて上京の途に就いた。此の日記は、此の門出の記事に筆を起して、康平元年十月に夫俊通の死したる記事を以て筆を結んだものである。之を更科日記と云ふは、夫俊通が信濃守となつてゐた爲に、信濃の名所なる更科を以て、本書に名けたのであらう。

あづまぢの道のはてよりも、なほ奥の方に生ひ出でたる人、いかにばかりかは怪しかりけむを、いかに思ひ始めける事にか、世の中に物語といふ者のあんなるを、いかに見ばやと思ひつゝ、徒然なる晝間宵居などに、姉、繼母などやうの人々の、其の物語、彼の物語、光源氏のあるやうなど、ところ／＼語るを聞くに、いと懐しき勝れど、我が思ふまゝに、諳に、いかでか覚え語らむ。いみじく心もとなきまゝに、等身に薬師佛を作りて、手洗ひなどして、一間に、みそかに入りつゝ、京に疾く上せ給ひて、物語の多く候ふなる、あの限り見せ給へ」と、身を捨て、額をつき祈り申すほどに、十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、今たちといふ所にうつる。

大意 小説を讀みたいために、小説の澤山にある京都へ早く行きたいと思つて、薬師佛に祈願をかけてゐたが、十三歳になつた時に、漸く上京する事になつた。

語釋 生ひ出でたる人。普通には、生ひ出では生るゝことを云ふ言葉であるが、著者の生れたのは父孝標が、未だ上總に赴任せざる時なるを以て、茲にては、育ちて人となる意に解釋するが善い。田舎で育つた者の意。さて、此の下には、斯る願を起したのは、他人より見る時は、などの意を補うて解釋せよ。田舎育ちの者が、小説を讀みたい爲に、小説の多くある所(即ち京都)へ行きたいと願うた事などは、他人の目

よりは、さぞ、をかしい事であつたらう、と云ふ文脈。○あんなる。有るなるの音便。
 ○いかで見ばや。どうぞ見たいものぢや。○ひるまよひ。○よひは宵に久し
 く起きてゐることを云ふ詞であるが、茲では、只夜の意に用ひたのである、即ち晝も
 夜も。○光源氏。源氏物語の主人公。○あるやう。どんな事をした人で有るか
 と云ふ實際。○いとゆかし。勝れど。いとよは益。ゆかしさは、實を知りた
 いと思ふこと。豫てより、小説を讀みたいと思つてゐたのであるが、母や姉やから、
 小説中の話を聞いて、益々其の話を知りたくなつた。○諳にいかでか覺え語らむ。
 此の上に、母や姉やもなどの意を補うて解釋せよ。○いみじく心もとなき。甚だ
 待遠でたまらぬ。○等身。我が身の長と等しき高さ。○みそかに。竊に。○身
 を捨て、額をつき。一生懸命になつて、額を地につりつけて禮拜する。○今たち
 地名であるが、何處であるか分らぬ。

通釋 關東の果よりも、更に深田舎に育つた私(著者)が生意氣にも、疾く上京して小
 説を讀みたいと願つた事は、之を他人の目より見たならば、どんなに、をかしかつた
 事であらう。然るに私は、どう思つたのであるか、此の世の中に、小説と云ふ者のあ
 るのを、何とかして讀んで見たいと思つた。用事なくし、退屈してゐる時に、夜にも

せよ、晝にもせよ姉や繼母や、又その他の人やが、あの小説の話、此の小説の話、光源氏
 の話などを、あちこちと話をする。その話を聞くと、私は益々精しく其の話を知りた
 くなる。げれども、母や姉やも、私の思ふ通りに、其の話を請記してはゐない。是に
 於て、私は早く其の話を知りたと思つて、大層に待遠に思つて、我が身の長に等し
 い薬師佛を作つて、手を洗ひ清めなどして、竊に一室に入りて願をかける。「私を疾
 く上京させて下さいまして、小説の澤山にあるのを、有らん限り見せて下さいまし
 と、一生懸命に禮拜して祈つてゐた。薬師佛の御利益にや十三歳になる年に、父が
 上京するとて、父と共に九月三日に其の任地を出發して、今立と云ふ所に移つた。
 年頃遊び馴れつる所を毀ち散らして立ち騒ぎて、日の入り際の、
 いと凄く霧り渡りたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、人ま
 には参りつゝ額をつきし薬師佛の立ち給へるを見捨て奉る悲
 しくて、人知れず、うち泣かれぬ。

大意 いよく任地出發と云ふ時になつて、年來禮拜してゐたる薬師佛を車上よ
 り見て、之を捨て行くに忍びずして竊に泣いた。

語釋 年頃云々。年來住み慣れてゐた家を毀ちてと云ふ事であるが、茲の毀ちと云ふは、造作及び諸道具などを、家より取り放つことを云ふのである。○霧り渡り。霧が降つて薄暗くなつてゐる。○人ま。人間で、人の見てゐない間。上文に「みそか」に入りつゝとあるを云ふ。

通釋 年來住み慣れた家から、諸道具などを取り放ちて立ち騒いで、日没頃の、物凄く霧の降つてゐる時に、車に乗らうとして、家の方を見たところが、今日まで、竊に参拜して願をかけてゐた薬師佛が、室の中に立つてゐる。それを見て、薬師佛を見捨て、此の家に置いてゆくことが悲しくて、人知れず泣いた。

門出したる所は、めぐりなども無く、かりそめの萱屋の蔀などもなし。簾垂れかけ、幕など引きたり。南は遙に野の方見やらの。ひんがし西は海近くて、いとおもしろし。夕霧たち渡りて、いみじうをかしければ、朝寝などもせず。

大意 今立の宿所の様を述ぶ。

語釋 門出したる所。門出して、其の晩に泊つた所の意。○めぐり。家の周囲の

垣を云ふ。○蔀。檐の日除に用ふる戸。高貴の家、また神社佛閣などの建築に用ふるもの。

通釋 下總の官舎を出發して其の晩に泊つた今立の宿所は、家の周囲の垣なども無く、ごく粗末なる萱葺の家であつて、檐の日除とすべき蔀も無いので、或は簾を垂れ下げ、或は幕などを引き渡してある。南方を見ると遙に野が見晴しになつてゐる。東西は海が近くて誠に善い景色である。夕霧が立ち渡つて、いかにも善い眺めであつたから、朝寝などもせず、早く起きた。

かたぐ見つゝ、こゝを立ちなむ事も、あはれに悲しきに、同じ月の十五日、雨かきくらし降るに、境を出で、下野の國の「いかた」といふ所に泊りぬ。庵なども浮きぬばかりに雨降りなどすれば、恐ろしくて寝も寝られず。野中におりたちたる所に、唯木ぞ三つ立てる。其の日は雨に濕れたる物ども乾し、國に立ちおくれたる人々待つとて、そこに日を暮しつ。

大意 今立の宿所を出發し、雨を犯して「いかた」と云ふ所に移り、そこに泊りて雨に

濡れたる品物を乾し、又、出發の際に立ちおくれたる人を待つ爲に日を暮した。

語釋

かた／＼見つゝ。南は遙に見晴らし得る平野で、東西は海に瀕してゐて、景色が善いと云ふ事が前に記してある。南を見、東西を見、あちら、こちらを見ながら

と云ふこと。○雨かきくらし降る。空掻き曇りて雨が降る。○境。上總の國境。

○下野の國のいかた。下野は下總の誤寫であらう。「いかたは何處の地名か分らぬ。○おりたちたる所。降りて行く所、即ち低き方。○唯木ぞ三つ立てる。木が

三本だけ立つてゐると云ふので、低い草木は概して水に没したといふ事が分るのである。

通釋

今立は景色の善い所なれば、あちらを見、こちらを眺むるにつけて、此處を出

發する事も亦、誠に悲しい。然るに長く此の地に泊るべきにもあらねば、同月の十五日には、大雨が降つてゐるにも拘らず、上總の國境を出でて下野の「いかた」と云ふ所に泊つた。此の宿所は、小さな假屋であつたところが、其の假屋が、浮きて流れ出

すかと思ふ程に大雨が降つたので、恐ろしくて寝られない。此の宿所よりも低い方の野の中に、唯三本だけの木が立つてゐるのみで、他は皆、水中に没してしまつた。

其の日は雨に濡れた品物を乾し、且は、上總を立つ時に、都合あつて、後から立つこと

になつた人々の來るのを待合マテアヒするために、そこに日を暮した。

上巳の節句、小弓の遊、高明の左遷 蜻蛉日記

蜻蛉日記は右大將藤原道綱の母藤原倫寧トモシヅメの女にて藤原兼家の妻の著したものである。此の日記には、村上天皇の天曆八年に、兼家が著者の許に通ひ始めた事から

書き起して、道綱の誕生した事、道綱の童殿ワラヒヂヤウ上の事、元服の事など、凡そ二十餘年間に於ける著者の境遇、見聞、感想等をば、月日を逐うて記してある。此の日記の上巻の

終に「有るか無きかの心地するかげふの日記といふなるべし」と記してある意味を以て此の日記の書名としたのである。本書には異本數種あつて、語句の相違が

少くないが、今は解し易きに從ふことにする。

三月三日。せくなど物したるを、人なくて、さうぐしとて、こゝ

の人々、かしこの侍サツラヒに、斯う書きてやるあり。戯ぶれに

桃の花、すきものどもを西王サイウが

そのわたりまで尋ねにぞやる。

即ち、かいつれて來たり。おろしいだし酒飲みなどして暮しつ。

語釋 三月三日。陰曆の三月三日は上巳ジヤウシの節マツリの供へ物を爲す日である。即ち桃花、草餅、白酒などを供へて、女子の雛遊ジヤウウを爲す日である。故に此の日を桃の節句とも雛の節句とも云ふ。○せく。節供マツリに同じ。節日マツヒに供ふる食物を云ふ。節句マツリと云ふは節供の誤轉であらう。○物して。準備して。○さうくし。淋しいこと。○侍サマ。侍ひ居る所、即ち従者などの居る所。○桃の花。桃の節句なれば云ふ。○西王サイウがその。唐桃タウマウの一名を西王母と云ふ故に、桃園を斯く云ふのである。○かいつれ。搔き連れの音便。○おろしいだし。臺に載せずして、飲食物を出すことをいふのであらう。

通釋 三月三日は桃の節句の日である。依て、節の供へ物を準備いたした。然るに人がゐないでは淋しいからとて、茲に居る人々が、かしの侍ひ所即ち従者どもの居る所へ、戯れに、斯んな歌を書いてやつたものがある。

(歌の意) 桃花の好きな者どもをば、尋ね探すために、桃園の邊まで使をやるのであるから、桃の節マツリの供へ物を好む者は早く來玉へ。

使に行つたものは、即席に、多くの従者共を引き連れて來た。大勢の事なれば、食器を一々に臺に載せて出す事は煩しきを以て、卸して出して、酒宴を開いて其の日を暮した。

中の十日のほどに、此の人々、方分カタワきて小弓コユミの事せむとす。互タガヒに出で集りてぞ、し騒ぐ。後シノの方の限り、こゝに集りて爲す日、女房メヤウに賭物カケモノ乞ひたれば、さながらに、物モノや忽タチマに覺えざりけむ、佗タびざれに、青き紙を柳の枝に結びつたり。

山風のヤマカゼ前マエより吹けば此の春の、
柳の絲ヤナギノイトは後シノにぞ寄る。

かへし、口々クチクチしたれど、忘るゝ程、押し計らなむ。一つは斯くぞある。

數々タカタカに、君かたよりて引くなれば、

柳の眉ヤナギノメジロも今ぞ開くる。

つこもり方にせむと定むる程に、世の中に、いかなる咎トガまさりた

りけむ、この人々流さるゝと罵ること出で来て紛れにけり。

語釋 中の十日。一月の中には、上の十日と、中の十日と、下の十日との三つがある。中の十日とは廿日のこと。○此の人々。桃の節に来た人々。○方分きて。兩方に分れて。○小弓。左右に分れて、小さき弓を引いて、其の技の巧拙を争ふ遊戯。○し騒ぐ。弓引く技を爲して騒ぐ。○後の方の限り。家の後の方の空地の有る限り一杯に。○爲す。弓引きを爲す。○女房。茲では侍女を云ふ。○賭物。勝負事の賞として掛けておいて、優勝者に贈るもの。○さながらに。丁度に。○物や忽に覚えざりけむ。賭物には、何を與へて善いかと云ふ事が、急に心に浮ばなかつたのであらう。賭物を乞ひに来たけれども、何を與ふべきかと云ふ事が、急に心に浮ばなかつたと見えて、歌を書いた紙を柳の枝に結んで、それを與へたといふ文脈。○佗びざれに。佗びは思ひ煩ふこと。ざれは戯るゝこと。どうして善いか分らぬ爲に、思ひ煩うて戯れに。○山風の云々。人々が皆、後の庭に集まりし故に、それを前より風が吹いて、柳の枝が後に寄るに譬へて詠んだ歌である。「柳の絲は絲の垂れたる如くに細く垂れたる柳の枝を云ふ。山風が前より吹く故に、此の春の柳の枝は後に寄るのであらう」と云ふ意。○かへし口々したれど。返歌を口々に

多くの人が詠んだけれども。○忘るゝ程押し計らなむ。忘れしことを推察せよと云ふこと。數の多き故に忘れたのであるから、それを推察して貰ひたい。○數々に云々。數々には、事毎に行き届きて深切に、と云ふこと。「かたよりにては一方に偏りて。眉も開くる」は愁の解けて喜ぶことを云ふ。「柳の眉は、美人の眉の細く美しきを云ふ言葉であるが、茲では前の歌に「柳の絲」とあるに依て、それを承けて「柳の眉」と云うたのであるから、必ずしも美人の眉には限らぬ。一首の意は「柳の絲は後にぞ寄ると云ふ御歌でござるが、斯う寄りましたのは、御深切に、一方へ御引寄せ下さつたからであります。御蔭に依て、愁眉を開いて一同の者が喜んでをります」と云ふこと。○つごもり方にせむ。晦日に行はう。○いかなる答云々。この人々は下に記す源高明等を云ふ。「言るは聲高く騒ぐを云ふ。如何なる答ありての事なるか、分らぬが、この人々が流罪になるのちやと、世間で聲高に騒ぐ様の事が生じて、紛雜を極めれば、晦日に行ふ事は廢止になつた。

廿五日六日の程に、西の宮の左の大臣流され給ふ。見奉らむとて天の下ゆすりて、西の宮へ人走り惑ふ。「いと、いみじき事かな」と聞く程に、人にも見え給はで、逃げ出で給ひにけり。「愛宕にな

むと聞えし程になど、ゆすりて、遂に尋ね出でて流し奉る」と聞くに、あへなしと思ふまで、いみじう悲しく心もとなき身だに、かく思ひ知りたる人は、袖をぬらさぬといふ類なし。

語釋 廿五日六日。源高明左遷の事は、日本紀略には廿五日となり、百練抄、公卿補任には廿六日となつてゐる。混亂中の事なれば、何れが真か分らぬ。此の日記の「廿五日六日の程」とあるのが、最も適當の記し方かも知れぬ。○西の宮の左の大臣。源高明は醍醐帝の第十七子であつたが、源姓を賜はつて、冷泉天皇の朝には正二位左大臣となつてゐた。同帝の安和二年、讒に依て太宰権帥に左遷せられたが、圓融帝の朝に召還されて京都で、無くなつた。世に西宮大臣と云ふ。○ゆすりて。震動して。人の騒ぎで、天地も震動すると云ふは、誇張の言葉である。○いみじき事。大事件と云ふ程の意。○人にも見えて。人に隠れて。○聞えし程になど、ゆすりて。○聞えし程に、必ず居るべし、杯ゆすりての略であらう。○あへなし……身だに。○あへなしは頼み甲斐なく、張合なきこと。○心もとなきは、覺束なく、氣遣はしきこと。生きてゐる張合も無いと思ふ程までに、覺束ない、あはれなる身分の者でも、と云ふ

意であるから、高貴の者は云ふに及ばぬのである。○かく思ひ知りたる人。云々。己の身が斯くなるものと、心に思ひ浮べ知る人は、同情の涙に袖を濡さぬ者は無い。通釋 廿五日六日の間に、西宮左大臣源高明公は流された。それを見んとして、西の宮へ人が走り行くので、天下が震動する程の騒ぎである。これは大變な事であるよと聞く間に、高明公は、人にも見えぬやうにして逃げ出された。ところが高明公は、愛宕の方に隠れておいでなると云ふ噂のある程に、必ず隠れて居るであらう、杯云うて、大騒ぎをして馳せ向つて、遂に高明公を尋ね出して流したと云ふ。之を聞くにつけては、たとひ賤しき身分の者でも、萬一己が身が斯うなつた時には、と思ふと、同情の涙を注がぬものは無い。

數多の御子供も、怪しき國々の空になりつゝ、行くへも知らず、散りぢり別れ給ふめるぞ。御くしおろしなど、すべていへば、おろかにいみじ。大臣も法師になり給ひにけれど、強ひて帥になし奉りて追ひ下し奉る。其のころほひ、たゞ此の事にて過ぎぬ。身の上をのみする日記には、入るまじき事なれども、悲しと思ひ

入りしも誰ならねば、記し置くなり。

語釋 國々の空。空は方向。○給ふ様子。めるぞの下に「いみじきを
加へて解釋せよ。○御ぐしおろし。御剃髪。○おろかにいみじ。いみじき事は、
言ふもおろかなりと云ふこと、即ち其の悲惨なる事は言ふに及ばすと云ふこと。
○帥。太宰權帥の略。○たい此の事にて過ぎぬ。只此の事件の噂のみで持ちき
つて過ぎた。○誰ならねば。誰でも無い、即ち己れであれば。

通釋 高明公に數多の御子供があつたが、其の御子供達まで、譯も分らぬ國々の方
向へ遷されて、何處へ遣らるゝのか分らず、散りくばらぐに分れなざる様子で
あつたが、あはれな事である。高明公は、此の世には望みが無いと思されたものか、
御剃髪なされた。すべて、此の間の事をいへば悲惨なることは言ふに及ばぬ。高
明公は法師になられたけれども、それにも拘らず、無理やりに、太宰權帥になして筑
紫へ追ひ下した。此の事件が非常の騒であつた爲に、此の頃の世間話と云ふもの
は、すべて、此の話で持ちきりと云ふ有様で経過した。我が身の上の事はかりを記
すのが日記である。されば、斯る出来事は書き入るまじき事ではあれども、此の事
件を聞いて、悲しい事ぢやと思ひこんだのは、他人では無くして己れである。己れ

の感じた事を己れの日記に書き入るゝ事は、差支なからうに依て、此の通りに記入
しておく。

敦道親王、式部を訪ふ 和泉式部日記

和泉式部日記は冷泉院の第四子なる太宰帥敦道親王が式部の許へ通ひなされた
始終を、式部が自ら書き記したものである。此の書中には情事を憚りもなく書い
てあるといふので、批難する人が多いが、文學史上には名高い日記である。本書に
も異本があつて、語句の相違が多いが、例に依て、解し易い方を取らうと思ふ。

夢よりも果なき世の中を歎き、佗びつゝ、明かし暮らすほどには、は
かなくて四月十日あまりにもなりぬれば、木の下暗がりもてゆ
く。端の方を眺むれば、築土の上の草の青やかなるも、人は殊に
目留めぬを、あはれに眺むる程に、近き透垣の下に、人のけはひの
すれば、誰にかと思ふ程に、さし出でたるを見れば、故宮に侍ひし
小舎人童なりけり。

大意 式部が身の果なきを歎きつゝ、庭前の方を眺めてゐたる處へ、故爲尊親王に仕へてゐた小舎人童が來た。

語釋 はかなく。はかなしは存在の長からず慥ならぬを云ふ言葉であるから茲では、忽ちなどの意である。○歎き佗び。或は歎き或は佗びて心淋しく思うて。○四月十日あまり。一條天皇の長保五年四月十日過ぎ。○木の下云々。木葉繁茂して樹の下が暗くなる。○端。庭の端であらう。○築土。土塚のこと。柱を立て板を添へ、泥土にて其の間を填め固めて造り、屋根を瓦にて葺きたる垣。○透垣。竹を疎に並べて、透目あるやうに造りたる垣。○人のけはひ。人の來たやうな様子。○故宮。冷泉院の第三子爲尊親王。○小舎人童。舎人は天皇皇族に近侍する雜使をいふのであるから、其の少年なるを小舎人童と云ふ。

通釋 此の世の中の事は、夢よりも更に果ないものである。さう思うて、或は歎息し或は心淋しく感じて、夜を明かし日を暮らしてゐるうちに、何時の間にか四月十日過ぎになつた。最早初夏の時候であるから木の葉が繁りて、其の下が、だんくと薄暗くなつて行く。庭の端の方を眺むれば、築地の屋根の上に草が生えて青々となつてゐる。それを見ても、他人は何とも思はない事であらう、即ち特別に目を

留めないことであらうけれども、世の中を歎き暮らしてゐる妾(式部)の目には、見るとして感動かす種子とならぬは無い。依て其の草を、あはれに眺めてゐると、家の方に近い透垣の下に、人の來たやうな様子がする。誰ちやと思つてゐる中に、顯れたのを見れば、近き頃薨せられた所の爲尊親王に近侍して使はれてゐた少年である。

哀に物を思ふ程に來たれば、などか、いと久しう見えざりつる。遠ざかる昔の名残にはと思ふをなど云はすれば、其の事とさぶらはで、馴れくしきやうにやと、つゝましう、さぶらふうちに、日ごろ、山寺にまかり歩き侍りてなむ。いと便なく、徒然に候へしかば、御かはりに見參らせむとて、帥の宮になむ參りて侍りしと語れば、

語釋 遠ざかる昔の名残にはと思ふ。遠ざかり行く昔の人の名残には、汝なりとも來よかしと思ふと云ふことであるから、日夜に忘れ難き爲尊親王には、最早、御目にかゝる事は出來ぬに依り、せめて親王に近侍してゐた者になりとも遇ひたいも

のぢやと思ふ。さて名殘は別れて後に、尙其の面影の心に残りて忘れ兼ねるを云ふ。○其の事とさぶらはで。左様の事とは存じませんで。「其の事より参りて侍りし」までは、小舎人童が式部に答へた言葉である。○つゝまじう。慎み差控へてゐる意。○侍りてなむ。此の下に「久しく参らざりける」などの語を補うて見よ。○御かはりに見参らせむ。故爲尊親王の御代りに、其の御弟なる敦道親王に御目にかゝらう。○帥の宮。太宰帥敦道親王。

通釋 築地の上の草を眺めて、哀に感じてゐた時に、小舎人童が来たのであるから「どうして、こんなに久しく見えなかつたぞ爲尊親王在世の時には親王の御供を致して、たび／＼式部の所に見えたものであるのに。」汝の仕へてゐた爲尊親王は、今や此の世に無き人となつたれば、妾は如何に親王を慕ひ奉るとも、最早、遇ふことは出来ぬ。せめては、其の名殘に、汝なりとも見て心を慰めたいと思つてゐたのに」と云ひやりたるに、小舎人童は答へて「左様の事とは一向に存じませぬゆゑ、たびたび拜趨しまするのは馴れ／＼しいやうで、却て失禮であると思つて、遠慮して差控へて居りまする中に、平生、山寺杯に参詣に参つてゐました爲に御無沙汰になりました。御主人(爲尊親王)に無くなられましたから、たより所もなくなりまして、寂寥に

堪へませぬゆゑ、故御主人の御代りに御目にかゝりたいと存じまして、故御主人の弟君なる帥の宮(敦道親王)へ参つてをりました」と物語れば、「これより次へ續く」
「いと善き事にこそあなれ。其の宮は、いと、あてに、けちかうおぼしますなるは、昔のやうには、えしもあらじ」など云へば、

大意 これは、式部が小舎人童に尋ねた言葉で、帥の宮の御近況は如何にかと云ふことである。

語釋 あなれ。あるなれの略。○あて。上品。○けちかう。「けは發語。「ちかう」は「近く」の音便。氣のさく御方であつて、人の近づき易きを云ふ。○えしもあらじ。「し」は強めの助辭。あり得まいと云ふこと。

通釋 「汝が帥の宮に参つてゐるのは、誠に結構の事である。其の宮は、誠に上品にして、且つ人の近き易い氣さくの方であつたが、其の氣さくで、おいでなさる事は、御兄君の薨後、昔のやうにはあるまいと思ふが、御近況は如何であるか」と云へば。(又次へ續く)

しか、おはしませど、いと、けちかう、おはしまして「参るや」と問はせ

給ふ。「参り侍り」と申しつれば、「これ持て参りて、いかゞ見給ふとて奉らせよ」とて、橘の花を取り出でたれば、

大意 小舎人童が式部の尋ねに答へ、且つ、今日己れは帥の宮の御使として参つたのであると云ふことを述べて、宮より託されたる橘の花を差出す。

語釋 しかおはしませと。「昔のやうには、えしもあらしを承けて、左様ではあれども、と云うたのである。○参るや。「汝は式部の所へ参るか」と、宮が小舎童に尋ねた言葉。○奉らせよ。式部に奉らせよ。○橘の花。伊勢物語に、「五月まつ花橘の香をかげば、昔の人の袖の香ぞする」と云ふ歌があつて、それを當時の佳人才子は皆よく知つてゐたのである。故に帥の宮より橘の花を式部に贈りて、「此の花が昔の人の通りに薫るであらうと思ふが、御氣に入るや否や」と尋ぬる印としたのである。今少し露骨に云ふと、「拙者では、昔の人暗に爲尊親王を指したのであらう」の如くに御氣に入りませぬか」と斬り込んで、婦人の返答を求むる印としたのである。○取り出で。取り出す。

通釋 小舎人童は答へて「左様では、ございますけれども、誠に氣さくの御方で御坐いまして、汝は式部の處へ参るか」と御尋になりました。私が「ハイ参ります」と御返事を申しましたれば、之橘の花を式部の所へ持参して、さて、此の花を見て、何と思ふかと申して式部に渡せと申されました」と云うて、小舎人童は橘の花を取り出したれば、又、(續)

「昔の人のと云はれ参りなむ」とて、「いかゞ聞えさせむ」といへば。

語釋 いかゞ聞えさせむといへば。何と御返事を申上ぐべきかと云へば。文は此處で句になるのであるから、此の下に、童が、その返事を待つてゐたなどの意を補うて見ねばならぬ。

通釋 式部は橘花を受取りて、さて意の中に「昔の人のと云はれて、此の童は橘花を持参したのであらう。さすれば此の橘花は、伊勢物語に書いてある所の「五月待つ花橘の香を嗅げば、昔の人の袖の香ぞする」と云ふ戀歌の代りである、即ち戀の申込である」と思つて、「何と御返事を申上げようか」と獨語すれば、童は之を聞いて其の返事を待つてゐた。

「言葉に聞えさせむも、かたはら痛うて、何かは、あだくしくも聞えさせ給はざる、はかなき事も」と思ひて、

かほる香に、よそふるよりは郭公、

聞かばや同じ聲やまさると。

さし出でたり。

大意 式部は何とか御返事をせねばならぬ場合であるが、口上にて御返事をするのは、宮に對して御氣の毒ゆゑ、歌を以て快諾の意を申上げた。

語釋 かたはら痛うて。傍らに觀て居るにも心に痛く感ずること、即ち氣の毒に思ふことをかたはら痛しと云ふ。使の童には、分らぬやうにする爲に、戀の申込みをするのに、只、插花のみを持たせて遣したのであるのに、それに對して、口上にて諾否の返事をしてやるのは、先方に氣の毒であると云ふ意。〇何かは、あだしくも聞えさせ給はざる。何かはは反語。「あだは徒(空)で、實なきを云ふ言葉である。それを重ねて「あだしくし」と云ふのであるから、あだしくしくは實意の無いらしくと云ふ意を強めて云うたのである。帥の宮は何故に、實意の無い者らしく、仰しやつて下さらぬのであらうぞ、と云ふことで、これは式部の意中である。若しも、實意の無さうなる申込であるならば、返答をするのに、こんなにも困ることは無いが、實意

の満々たる申込であるから、返答に困つてしまふ、と云ふ事で、文面にては、其の申込を怨んだやうに見せてあるが、實は、非常に其の申込を歓迎した事が、言外に溢れてゐる。「遠ざかる昔の名残」また「昔の人の」などの文句に依て察すれば、式部は故爲尊親王とも情交を結んだものであらうに、其の弟君なる帥の宮から僅に一回の申込を受けて、直に之を快諾するとは實に驚き入つた淫奔家である。〇はかなき事もと思ひて。「はかなきは、前にも解いた如く、取りとめたる事なき事、苟且なる事を云ふ。茲の意味は、はかなき事も、言葉に聞えさせむには勝ると思ひて」と云ふことであらう。苟且の歌なれども、言葉にて御返事するよりは善いと思つて、次の歌を書いたといふこと。〇かほる香云々。「よそふるは、寄するの延音。「よりは」の下には「自ら來て囀つて見る方が善い」の意を補うて解釋せよ。「聞かばやは聞かせて呉れよ。「同じ聲やまさると」は、先年の郭公と同じやうに、其の聲が勝れたものであるか、どうかと云ふことを聞き分けたい程に、速に來給へ。〇さし出でたり。歌を差出した。

通釋 式部は今や、何とか御返事をせねばならぬ場合となつた。一體、斯る申込に對して、口上を以て御返事を申上ぐるのは、先方へ對して御氣の毒である。されば

と云うて、即席には甘い方法も考へ出せない。サア、斯うなると、實意を込めた申込が却て怨めしい。實意の見えない申込ならば、返事には困らぬのである。帥の宮は、何とて、實意の無い者らしく仰しやつて下さらぬのであらうぞ。嗚呼、苦しいく。苟且の歌ではあれども、尙言葉で返事をするよりは善からうと思つて、

(歌の意) 橘花の香にこと寄せて、昔の人の袖の香がするから、昔の人と同じ様に、私をも愛して呉れよ、杯と云ふよりも、茲へ来て囁つて、愛を求めた方が捷徑で、却て善いぞよ、郭公よ。昔の郭公と同じやうに聲が勝れてゐるや否やを聞き分けたい程に、一刻も早く茲へ來給へ。

といふ歌を書いて、小舎人童に差出して、帥の宮への返事とした。

また、端におはしましける程に、かの童、かくれの方に景色ばみありければ、かくれの方にて御覽じつけて、如何にぞと問はせ給ふに、御文をさしいでたれば、御覽じて、

同じ枝に鳴きつゝをりし郭公、

聲はかはらぬものと知らずや。

と書かせ給ひて、童に賜はすとて、かゝる事、人に云ふな、すぎがましき事の様なりとて、入らせ給ひぬ。

大意 此の時に尙、帥の宮は庭の端に居られたのであるが、小舎人童が、式部の書いた歌を宮に差上げると、宮は、それを御覽になつて、返歌を認められて、それから式部の家に入らせられた。

語釋 おはしましける。帥の宮が、おいでなさる。○かくれの方。物の陰、即ち隠るゝに都合よき所。○景色ばみ。様子ありげなる舉動を爲すこと。童は、宮の使命を果して、今、それを復命せんとするのであるから、願意の貫徹したと云ふ容子を其の舉動にあらはして歩いたのである。○御覽じつけて。宮が童の來たのを見つけて。○如何にぞ。式部の返事は如何にと問はるゝのである(宮が童に問ふ)。○御文。書いたものといふことで、茲では式部の歌をさす。○さし出でたれば。童が御文を差出したれば。○同じ枝に云々。爲尊親王も敦明親王も共に冷泉院の皇子で御兄弟である。故に同じ枝に居る郭公に譬へたのである。一首の意は、同じ枝に鳴きつゝ居た所の郭公であるから、前の郭公も後の郭公も、聲に區別の有らう筈は無い。それを御承知なくして、聞かばや同じ聲やまさるとなど云ふは、な

さけないと云ふと。○童に賜はすとて。童に命じて式部に賜はすとて、童に渡した時に。○かゝる事云々。これは宮が童を戒むる言葉。「こんな事は人に言うてはならぬ。人に聞えると、好色がましい様であるから」と云うて、他言を戒められたのである。○入らせ給ひぬ。宮が式部の家へ入られた事を云ふ。

通釋 帥の宮は、此の時、尙庭の端においてなされたが、彼の小舎人童が、物陰の方に、様子ありげなる舉動を爲して歩き来るを御見つけなされて、あの事の結果は如何であつたかと尋ねられた。此の御尋ねに應じて、小舎人童は、式部より渡されたる書き物を差出した。宮は、それを御覽になつて、式部の快諾を知りたる故に、次の意味の歌を書いて小舎人童に渡して式部へ遣された。

(歌の意) 同じ枝にて鳴いてゐた郭公なれば、聲の異なるべき筈は無い。そんな事は尋ねるに及ばぬ事である。

さて宮は、こんな事を他人に話してはならぬぞ。他人に知られては好色家らしくして、外聞が悪いからと、固く小舎人童の他言を戒めて、それから式部の室に御入りなされた。

土御門殿の秋のけはひ

紫式部日記

紫式部日記は式部が、その夫なる藤原宣孝に先だゝれて寡婦となり、一條帝の中宮なる上東門院（藤原道長の女）に仕へてゐた時の日記である。此の間に宮中に起つた事、其の遭遇した事、見聞した事、感じた事などが、何くれとなく此の日記に書き記されてある。式部が時の關白藤原道長公に懸想せられた時に、ていよく之を謝絶して其の貞操を全うした事なども此の日記に見える。さて、此處に掲ぐるは其の發端の一節で、上東門院御妊娠ありて土御門殿（父なる道長の邸宅）へ歸りをられ、式部も數多の女官と與に之に従ひて赴き居たる時の記事の一部分である。

秋のけはひの立つまゝに、土御門殿の有様、云はむ方なくをかし。
池のわたりの梢（トモエ）ども、遣水の邊（ホタテ）の叢（クサヤウ）おのがじゝ色つきわたりつ
つ、大かたの空も艶（シビ）なるに、もてはやされて、不斷（ツギ）の御讀經（コトコト）の聲々、
あはれ勝りけり。やうく涼しき風のけしきにも、例の絶えせぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。

大意 これは土御門邸の秋景色の美しきこと、安産を祈るための讀經の聲の断えざること、遣水の流るゝ音が、讀經の聲か遣水の音かと聞き違へらるゝ事を述ぶ。

語釋 秋のけはひの立つまゝに。「けはひは景色」「立つは春立つ今日の風やとくらむなどの「立つ」であつて到ることを云ふ。秋の景色の來るに従つてと云ふこと。榮花物語に之と同文が載せてあるが、それには「秋のけしきに入りたつまゝに」となつてゐる。意義は云ふ迄もなく同じである。○云はむ方なくをかし。名狀し難き程に美し。○遣水。庭などを流し遣る水。○おのがじ。銘々勝手次第に。○色つき。紅葉する。○もてはやされて。賞美せられて。樹木が紅葉して美しくなり、空の景色の優美なるによりて、其の眺めが一層賞美せらるゝのである。○不斷の御讀經。中宮の御安産を祈るために、僧を邸内に召して、絶えず御經を讀ませたのである。○涼しき風のけしきにも。「けしきは様子のこと」「目に見ゆる景色のみを云ふのではない」の意味なれば、風の吹き來る様子を「風のけしき」と云ふ。涼しき風の吹き來るにつけても、と云ふことで「聞きまがはさるゝへ係る副詞。榮花物語には「も」の字が無くて「風のけしき」となつてゐる。○聞きまがはさる。聞き違へらるゝ。秋風の吹き來るやうになりて後は、遣水の音と讀經の聲とが、互に聞

き通はされて、區別がつかないやうになつた。

通釋 秋の景色の到るに従つて、中宮の御産所なる土御門殿のあたりの景色は、言葉にも言はれぬ程によくなつて來た。まづ池の邊の梢などや、遣水の邊の叢などが、それ／＼に紅葉したが、なべて空の景色の面白きによりて、其の眺めが一層賞美せらるゝやうになり、之が爲に御安産を祈るための不斷の御讀經の聲が益々人の情を動かすやうに聞ゆる。漸次に涼風吹きそよぐに依りて、例の間斷なく流れてゐる遣水の音が、終夜讀經の聲と聞きまがへらるゝ。

御前にも、近う侍ふ人々、はかなき物語するを聞きしめしつゝ、惱ましうおはしますすへかめるを、さりげなくもて隠させ給へり。御有様などの、いと更なる事なれど、うき世の慰めには、斯る御前をこそ尋ね參らすへかりけれど、現心をば引き違へ、たとしへ無く、萬忘るゝにも、且つは怪しき。

大意 中宮の御忍耐強くましますこと、御容貌の勝れさせ給へることを述べ、それより一轉して、憂き世に在りて其の心を慰めんには、斯る御主人を尋ねて宮仕へす

るを善しとすと述べ、又穢りて、かねての本心(現心)を變じて萬事を忘れて宮仕へせんとする心になりたる事を不思議に思ふ由を述ぶ。

語釋 お前。中宮の御前といふこと。○近う侍ふ人。近侍する女官等。○はかなき物語。取りとめも無き、つまらぬ話。○惱ましうおはすべかめるを。「惱ましうは苦しく」と云ふこと。「べかめる」は「べくあるめる」の約。苦しう御座いませうと見ゆるを。中宮は御妊娠中なれば、定めし苦しいことであらうと思はるゝのである。○さりげなく。そんな様子もなく。○御有様。御容貌をいふ。○いと更なる事なれど。今更に云ふに及ばぬ事なれど。○慰め。慰安。○尋ね参らすべかりけれ。尋ね奉るが善い。中宮の如き善き主人を尋ね探して宮仕へするが善いと云ふこと。○うつし心をば引き違へ。本心を變ずる。「うつし心」は現なる心で、慥なる本心を云ふ。さて此處の「うつし心」は、現世に於ける一切の望を絶ちて、専ら佛道に歸依して後生を祈らうとの豫ての式部の心を云ふ。式部は夫宣孝に先立たれたれば、現世の事をば凡て忘れて、専ら後生の爲を祈らうと思つて居たが、一旦中宮に仕ふるに及んで、其の心が變つて、永く宮仕へする心となつたのである。○たとしへ無く。譬へやうも無く。○萬忘るゝにも。これ迄の一切の事を忘るゝ

に就ても。○且つは怪しき。「且つ」は物の一つある上に、又更に重なるをいふ言葉である。中宮の御恩恵に浴するに及び、豫ての本心を變じて永く宮仕へする精神になつた事を思ふに就ては、嬉しくもあり、且つは怪しくもあると云ふ意。

通釋 中宮は、近侍の女官等が、つまらぬ雑談をするのを御聞きになりながらも、豫て御妊娠中の事ゆゑ、さぞ御太儀で御座らうと思はるゝに、苦しうなる御様子も見せず、其の御苦みを隠しておいでなさる。中宮の御容貌が美しい事などは、今更に申すに及ばぬ事なれども、實に美しい御方であるために、一たび御顔を拜むと、誰でも一切の心配を忘れてしまふのである。憂き世に在りての慰安を求むるには、斯る美しき御主人を尋ね探して御奉公をするが最も善いのである。私(式部)などは、夫に後れて以來、この世の望みも絶えたれば、固より宮仕へせんなどの心もなく、只佛道に歸依して後生の爲を祈らうとして居たものであるが、一たび中宮に仕ふるに及んで、これ迄の心は忽に變りて、譬へやうも無い程に、過去の一切の事を忘るゝやうになつた。これを思ふと嬉しくもあり、且つは不思議でもあるが、これ偏に中宮の御蔭である。

まだ夜深き程の月、さし曇り、木の下、を暗きに、御格子まゐりなば

や。女官は未だ侍はじ。藏人まゐれなど云ひしろふ程に、後夜の鐘うち驚かし、五壇の御修法時はじめつ。我れも我れもと、うち挙げたる伴僧の聲々、遠く近く聞き渡されたる程、おどろおどろしくたふとし。

大意 夜は未だ明けねば女官も未だ出勤してをらぬにより、藏人を召して格子を挙げさせようとした時に、後夜の鐘が鳴つて、五壇の御修法が始まつたが、その聲が誠に有りがたく思はれた。

語釋 夜深き程の月。深夜の月。○を暗き。「を」は接頭語で、常に「小」の字などを充て、書く。○御格子……まゐれ。中宮に侍りゐたる式部等の言葉。「御格子まゐりなばや」は格子を挙げたいものぢやと云ふこと。暗き故に、格子を挙げて明くせんとするのである。「藏人まゐれ」は、藏人よ早く参りて格子を挙げてくれよと云ふこと。此處の「藏人」は女藏人であつて後宮の女官の一種である。○云ひしろふ。互に口々に云ふこと。○後夜の鐘。後夜を報ずる鐘聲。さて夜を二分して初の半夜を初夜と云ひ、後の半夜を後夜と云ふのである。故に後夜は今日の午前零時

過ぎに當る。○うち驚かし。聞ゆること。聞きてビツクリする故に云ふ。○五壇の御修法。「壇」は物を載せおく爲に一段高く造りたる處の稱。五つの壇に安置せる佛に祈る佛事を指して斯く云ふ。さて五壇の佛は所謂五大尊で、不動、降三世、軍荼利夜叉、大威徳金剛夜叉の五つを指す。○時はじめつ。「時はじめつ」は後夜の鐘を合圖に、祈禱を始むる時を云ふ。「はじめつ」は祈禱を始めたこと。祈禱時になりたるを以て「祈禱」を始めたを云ふ。○うち挙げ。聲を張り上げる。○伴僧。佛事の式に随伴する僧侶。○おどろおどろしく。驚く程に、仰山に、などの意。○たふとし。有難しといふこと。

通釋 未だ夜は明けずして深夜である上に、月が曇りて木の下が薄暗きによりて「御格子を挙げたいものぢやが、女官は未だ出勤してをるまいから、女藏人よ、早く来て御格子を挙げよ」など、互に口々に云うてゐる程に、後夜の鐘が、ゴーンと聞えた。其の鐘を合圖に五壇の御祈禱を始めた。そこで、伴僧どもが、我れ劣らじと張り挙ぐる讀經の聲が、或は遠くも聞え、或は近くも聞ゆるなど、實に盛なものであつて、有難く思はるゝ。

観音院の僧正、東の對より二十人の伴僧を率ゐて御加持まゐり

給ふ。足音、渡殿の端のとゞろとゞろと踏み鳴らさるゝさへぞ、
異事のけはひには似ぬ。法住寺の座主は馬場の殿、遍ち寺の僧
都は文殿などに、打ち連れたる淨衣姿まで、ゆるくしき唐橋ど
もを渡りつゝ、木の間を分けて歸り入る程の、遙に見やらるゝ心
地してあはれなり。さいさ阿闍梨も大威徳を敬ひて腰をかゞ
めたり。

大意 御祈禱に参りたる僧等の往返のさまを述ぶ。

語釋 ひんがしの對。「對」は對屋の略。對屋とは寢殿に斜に對ひて別に建てたる
家を云ふ、即ち寢殿に對したる屋の義である。寢殿の東に建てたるを東の對とい
ひ、西に在るを西の對、南に在るを南の對、北に在るを北の對といふ。而して寢殿と
對屋とは廊(渡殿)を以て通する様になつてゐる。之は中古に於ける貴族の邸宅の
建築の大略である。○御加持まわり給ふ。佛力の加護を祈るを加持と云ふ。御
加持をし給ふといふこと。○渡殿。對屋より寢殿に通ふ廊をいふ。○とゞろと
いゝ。足音のドシ／＼するを云ふ。○踏み鳴らさるゝさへぞ。さへは重きが上

に輕きを添へて云ふときの助辭。足音までが貴いといへば、其の他の事の貴い事
は云ふに及ばぬ。○こと事のけはひには似ぬ。○こと事は外の事。「けはひ」は様子。
外の事とは違ひて、其の様子が貴い。○座主。寺の長。○馬場のおとゞ。馬場の
殿の方へ歸らんとして、の略で、下の「打ち連れ」へ續く。法住寺の座主は馬場の方へ
向つて歸つたのである。さて「馬場」は馬乗り場である、それを殿と云ふは、其處の建
物を指す。○文殿などに。文殿の方へ歸へらんとして、の略で「打ち連れ」へ續く。
「などは上に「馬場のおとゞ」と云ひ、茲に「文殿」といひたる故に、二つを承けて云ふので
ある。さて「文殿」は書物を入れおく建物。○淨衣姿まで。法衣を着けたる姿まで。
これは下の「あはれなり」へ續く文脈である。法師が法衣を着くるは常の事なれど
も、斯の場合に、其の姿までが、アツパレなものと感じられたのである。○ゆるく
しき。故ありさうなる。何か理由のありさうなる。○唐橋。唐風に造りたる橋。
○遙に見やらるゝ心地して。法師等が、樹木の間に行き去りて見えなくなりても、
尙、其後姿の見送らるゝ心地がする、と云ふ事で、深く尊敬の念を生じて、其の方に心
が牽きつけらるゝのである。○あはれ。贊美の意を表する嘆辭で、天晴に同じ。
○さいさ阿闍梨。阿闍梨は僧の稱號。「さいさ」は其の阿闍梨の名。○大威徳。五

壇の佛像の一つの名。

通釋 觀音院の僧正が、東の對屋より二十人の伴僧を率ゐて來て、中宮の爲に御加持の御祈りを上げた。其の足音によりて、渡殿の端が、ドシン／＼と踏み鳴らされ、たが、其の響きまでが、外の事には似ずして、貴く聞えた。法住寺の座主は馬場殿の方へ歸らうとして打ち連れだち、遍ち寺の僧都は文殿の方へ歸らうとして打ち連れだつたが、其の法衣姿までが、天晴なものと見えた。其の歸る途に、何か故ありげなる唐橋が架けてある。法師等は其唐橋などを渡りて、樹木の間に見えなくなつたが、尙、その後姿が遙かあなたに見送らるゝ心地がして、實に天晴なものと思はれた。さいさ阿闍梨も大威徳を敬ひて腰をかゝめられたが、これも貴く感せられた。人々まゐりたれば、夜も明けぬ。渡殿の戸口の局に見いだせば、ほのうちきりたる朝の露も、まだ落ちぬに、殿ありかせ給ひて、み隨身召して、遣水拂はせ給ふ。

語釋 人々まゐりたれば。夜明けて女官どもが、中宮の御前に出仕したのを云ふ。○渡殿の戸口の局に。渡殿への出入口にある部屋にて。○見出だせば。外を見

れば。○ほのうちきりたる朝。ボンヤリと薄暗く霧の降りたる朝といふこと。「ほのは、ほのかに、薄暗きを云ひ、うちきりたる」は霧の降りたると云ふ意で、「うち」は只添へて云ふ辭。○殿。土御門殿即ち道長。○拂はせ給ふ。遣水に落ちたる木の葉などを拂ひ清めさす。

通釋 女官どもが、中宮の御前に出仕したと思ふたれば、もう夜も明けた。依りて渡殿へ出入する口にある所の部屋にて、外を見れば、霧が降りて薄暗くなつてゐて、まだ草木の葉に附いた霧も落ちざるに、殿様は、もう起きて庭を歩かせられて、供人を召して、遣水の中に落ちたる落葉などを拂はせて、おいでなさる。

橋の南なる女郎花の、いみじう盛なるを、一枝折らせ給ひて、几帳の上より、さしのぞかせ給へり。御様のいと恥づかしげなるに、我が朝顔の、思ひ知らるれば、これ遅くてはわるからむと宣たまはするに、ことつけて、硯のもとに寄りぬ。

女郎花、さかりの色を見るからに、

露の分きける身こそ知らるれ。

「あな疾」と、ほゝゑみて、覗めしいづ。

白露は分きても置かじ女郎花、

心からにや色の染むらむ。

大意 道長公が女郎花を一枝折り来りて、紫式部に詠歌を促したれば、式部は一首の歌を詠みて差上げたるに、公も亦、一首の歌を詠まれた。

語釋 几帳の上より云々。紫式部の居る几帳の上から、道長公が、式部を覗かれた。式部が几帳の蔭に坐して居る處へ、道長公が立ちて来りし故に、几帳の上から見えたのである。○御様のいと耻づかしげなるに。道長公の姿が非常に美しいのに比較して、と云ふこと。さて美しきことを耻づかしげと云ふは、美しき人に對すると、己れの醜きことが耻づかしくなる故である。○我が朝顔の思ひ知らるれば。我が朝顔の醜きことが思ひ知らるゝ故に、其の醜き朝顔が耻づかしくて、たまらぬのである。さて「朝顔」とは、朝起きたるまゝにて、未だ化粧を施さざる顔を云ふ。○これ遅くては、わろからむ。道長公の詞。道長公は、手に持てる女郎花を式部に見せて、歌を詠めと促したのである。これ(女郎花)の歌が遅うては興味がない、といふ

事。○ことつけて云々。其の詞の掛りたるを幸に、其の詞にかこつけて、覗の傍に寄りて朝顔を隠し、その間に歌を認めたのである。○見るからに。見るに依りて、と云ふことで、下の「知らるれ」へかゝる副詞。○露のわきける身こそ云々。露が分け隔てをする己が身こそ、不幸のものと知らるれ、と云ふこと。女郎花には、露が最も負して、澤山にかゝる故に、其の花が美しいけれども、我が身には露が掛らぬ故に醜いのである。斯の如く、露に分け隔てをせらるゝ我が身は不運であると云ふ意。○あなとと、ほゝゑみて。道長公は「嗚呼早い」と、ニツコリ笑はせられて、「あな」は嘆辭。「と」との上の「と」は疾で、歌の早く出来たのを賞めた詞。○分きても置かじ。分け隔てをして、露が降るわけではあるまい。○心からにや云々。女郎花は、其の心の長閑なる爲に、美しく色づくのであらうと、云ふこと。心の持ちやう一つで、身形は華美にも素樸にも出来るものなれば、くよくよと心配などせず、長閑に心を持つて身形を華美にするが善いと云ふ意を裏面に含んでゐる歌。

通釋 道長公は、橋の南に、立派に咲いてゐる女郎花を、一枝折り取らせられて、其の花をお持ちになりて、几帳の上から、私式部の顔をお覗きなされた。道長公の御姿が、いかにも美しいのに比較して、私の朝顔の醜いことが思ひ知られて、恥づかしく

て隠れたいやうに思ひたるに、公は、女郎花を私に示されて、「これの歌が遅うては興が無いから、早う詠め」と仰せられましたに依りて、其の御言葉に、かこつけて、硯の傍に寄りまして、朝顔を隠しつゝ、次の歌を詠んで差上げた。

(歌の意) 女郎花の盛なる美しい色を見ると、此の花は露が澤山におりた故に美しいのである、我が身には露がおりぬ故に醜いのである」と思はれて、露に分け隔てをせらるゝ、我が身は不運の者ぢやと知られまする。

道長公は、此の歌を御覽になつて、「をう早い」と、ニツコリ笑はれて、硯を召されて、次の歌を詠まれました。

(歌の意) 白露は女郎花には澤山におりるが、お前の身にはおりぬ、と云ふやうに分け隔てをしておりるのではあるまい。女郎花は、其の心の持ちやうで、あの通り美しく、色づくのであらう。お前も、くよくよせず、心を長閑にして、身形を美しくするが善いぞや。

思はむ子を 枕草子

枕草子マクラノサワシは清少納言の作であつて、草子文の最も古く且つ最も巧妙なる者である。

少納言は後撰和歌集の撰者として名高き清原モトノリ元輔モトノリの女である。其の傳は、よく分らぬけれども、一條天皇の皇后なる藤原定子に事へてゐたものであつて、歌文ともに秀で、頗る奇骨あると同時に其の素行の修まらざる婦人であつた事などは、本書に依りて知らるゝ。思ふに本書は其の宮仕への頃に、其の奇警なる觀察眼に觸れ、其の感興を動かした事が、筆のまにまに書き連ねられた者であらう。故に巻頭に於ける四季の評の文の如く、小題を設けずして、直に書き起した個處もあり、又「山は」河は「などの如く、小題を設けて文を起した個處もある。本書は初め「清少納言の記」又は「清少納言」など呼ばれて、一定の名稱は無いのであつたが、其の跋文に「枕にこそしはべらめ」と云ふ事の書いてある爲に、終に枕草子と呼ばれるゝに至つたのである。

思はむ子を法師に爲したらむこそは、いと心苦しけれ。さるは、いと頼もしきわざを、たゞ木の端つらの様に思ひたらむこそ、いとほしけれ。さうじ物の悪しきを食ひ、寝ぬるをも、若きは、物も懐なつかしからむ。女などの在る所をも、なか差さ規規かずもあらむ。それをも安からずいふ。

語釋 思はむ子。愛子。○さるは。法師に爲したるは。○いと頼もしきわざ。佛者の説に、一人出家すれば九族天に上るなど云ふ事が有る故に、法師に爲したるを指して頼もしき業といふ。○いとほしけれ。氣の毒なれ。○さうじ物。精進物であつて、膳部に野菜のみを用ひ、肉類などを用ひざるを云ふ。○寝ぬるをも。法師は肉食妻帯をせぬものゆゑ、其の寝ぬる時の事をも思ひやるに、若き法師等は孤衾淋しくして、美人を思ふ事も、なにか無からんやと云ふ意。○物もゆかしからむ。○物は美人を指して云ふ。「ゆかし」は、なづかしく思ふこと。○それをも安からず云ふ。人情の自然なる事をも、尙且つ、安からず容易ならざる事のやうに云ひ罵る。

通釋 大切に思ふ子を法師にする事は、誠に心苦しいものである。其のゆゑ如何と云ふに、子を法師にする事は、元來、頼もしき業なるにも拘らず、世人は概して之を知らず、法師をば宛も木の端のやうに思うて輕蔑すると云ふは、誠に氣の毒千萬の事であるのみならず、法師は食物としては精進料理のみを用ひ、夜も孤衾を擁して淋しく眠る事なれば、年若き法師などは、美人の懐しく思はるゝ事もあらうに依て、女の居る處などを差覘かぬとも限らぬのである。これは人情の自然である。然るに、世人は、之を見て墮落坊主などと罵るのであるから、愛子を法師にするは心苦しいのである。

まして驗者などの方は、いと苦しげなり。御嶽熊野、かゝらぬ山なく歩く程に、恐しき目も見、驗ある聞え出できぬれば、此處彼處に呼ばれ、時めくにつけて、やす氣も無し。いたく煩ふ人にかゝりて、ものゝけ調ずるも、いと苦しければ、困じて、うち眠れば、眠りなどのみして、と咎むるも、いと所せく、如何に思はむと。これは昔の事なり、今様は、やすげなり。

語釋 驗者。修驗者で加持祈禱によりて病氣を癒やす事などをする者、即ち山伏。○御嶽熊野。御嶽は大和の金峯山で、此の山に祀れる藏王權現に修驗者が參詣して修業するのである。熊野は紀伊の熊野權現で、これも修驗者の參詣する所。○かゝらぬ山なく歩く。關係せざる山無く歩く。何れの山にも足跡の到らぬ事なしといふ意。○時めく。時を得て榮ゆること。○いたく煩ふ人にかゝりて。烈しく煩ふ人に關係してと云ふことで、大病人の處へ呼ばれて、その病氣全快の祈禱

を頼まるゝ事を云ふ。○ものゝけ調ずるもいと苦し。ものゝけは、人に祟りを爲すもの、死靈生靈などを云ふ。「調ずるは、調伏すること、神佛の力を借りて、悪魔を降伏せしむることを云ふ。昔の人は、死靈生靈などの祟りに依て、人が病むものと考えたのである。故に當時は、神佛の力を借りて、その死靈生靈などを降伏せしむるを以て、最も有功なる治療法と認めてゐたのである。當時の物語などに、病氣と云へば必ず法師を呼ぶことが記されてあるのは、當時の迷信を、その儘に書き記したものである。「苦しは祈禱に疲れて苦しきを云ふ。○所せく如何に思はむと。せくは、狭くで、究屈なること、即ち肩身の狭く思はるゝこと。誠に肩身が狭くして世人は如何に思うてゐるであらうと云ふことで、此の下に、それを思ふと誠に心苦しいなどの意を補うて解釋すべき所である。○これは云々。されど、世人の評を聞いて、法師等が心苦しく思うたのは、昔の事であつて、今の事ではない、當世風の坊主どもは、もはや墮落の極であるから、世人が己れの事を何と云はうとも、平氣に聞き流してしまふて、心苦しいとも何とも思はないらしいと云ふこと。これは少納言の例の冷評である。

通釋 通常の法師にも増して、修驗者の方は、最も苦しきうである。修驗者は、御嶽

やら熊野やらと、何れの山にも足跡の到らぬ處なき程に各地を跋渉して歩くのであるから、恐しき目を見ることも、度々有ることであらう。さて、いよく修業が濟んで、功驗ある修驗者であると云ふ評判が出ると、此處からも、彼處からも呼ばれて、持てはやされるに付けても、なか／＼氣樂では無い。大病人の處へ呼ばれて、病氣全快の祈禱をする時などにも、連日連夜の事なれば、疲れはて、思はず知らず座睡などをする事がある。さうすると、あの修驗者は座睡ばかりしてゐて困るなど云うて咎むる者もある。それを聞くに付けても、何となく肩身が狭くして、人は己れの不謹慎(座睡)を何と云うてゐるであらうなど思ふと誠に心苦しいのである。さりながら、法師等が己れの不謹慎を恥ぢて心苦しく思つたのは昔の事。當世風(今様)の法師等は、その不謹慎を恥づかしくとも何とも思はないから氣樂な者である。

憎きもの 枕草子

急ぐ事ある折に長言するまらうど、あなづらはしき人ならば、後になど言ひても追ひやりつべけれども、さすがに、心恥づかしき人、いと憎し。硯に髪の入りに磨られたる、又、墨の中に石籠りて

きしきしときしみたる、俄に煩ふ人のあるに、ケン驗者求むるに、例ある所には在らで外に在る、尋ねありく程に、待遠に久しきを、辛うじて待ちつけて悦びながら加持せさするに、此の頃、物のけに、こ
うじけるにや、居るまゝに、即ち、ねぶり聲になりたる、いと憎し。
なんで、事なき人の、すゝろに、えがちに、物いたういひたる。

大意 憎しと思ふことを記す。

語釋 まらうど。稀人の音便で、客人を云ふ。○心恥づかしき人。立派なる人と

云ふこと(一一六頁参照)。此の下に、追ひやることのならぬ故になどの意を補うて
解釋せよ。○きしみ。滑かに通らずして軋るを云ふ。○物のけにこうじ。病氣
全快の祈禱をする爲に疲れ困みて(一二二頁参照)。○なんでう事なき人。何と云
ふ長處もなき人。○すゝろに。漫に、即ちヤタラに。○えがちに。得意顔に。

通釋 憎いもの即ち嫌なるものを列挙して見よう。急用のある時に訪ひ來つて
長物語をする客人は、嫌なるものである。其の客人が、己れよりも下様の人である
ならば、後日來訪せよ、など云うて追ひ歸しもしようけれども、さりとして、立派なる人

には、さう云ふことは言はれないから、誠に嫌なものである。硯の中に髪の毛が入
りて磨られたのも嫌なもの。又墨の中に、石が入つてゐて、キシ／＼と軋るのも嫌
なもの。急病人が出來て、修驗者、祈禱者を招くに、其の修驗者が、常に居る所に居ら
ない爲に、あちら、こちらと捜し歩いて、時間がかゝり、待遠でたまらぬ時に、ヤツトの
事で修驗者が來たので、大に喜んで祈禱をして貰ふと、其の修驗者は、祈禱疲れがし
てゐると見えて、すぐに睡さうな聲で讀經するのを聞くのは、誠に嫌な心地がする。
何とて、別に取立て、云ふ程の長所の無い人が、ヤタラに、得意顔に、物をしやべり散
らしたるなども、嫌なことである。

鳥は 枕草子

五月雨の短夜に寝ざめをして、いかで、人より先に聞かむと、待た
れて、夜深く打出でたる聲の、らうくしう愛嬌づきたる、いみじ
う心あくがれ、せむ方なし。六月になりぬれば、音もせずなりぬ
る。すべていふも、おろかなり。夜鳴くものは、何れも、めでたし。

乳兒のみぞ、さしもなき。

大意 郭公ホトトギスの夜中に鳴く聲は善いものである。郭公に限らず、夜中に鳴くものはすべて善いが、小兒の夜鳴きだけはさうでないといふ意。

語釋 五月雨の短夜。霖雨ササゲの頃は晝が長くて夜が短い故に云ふ。○ねざめをし。て。寝たるより覺むるを「ねざめ」といふ。一旦寝て覺むることである。○人よりさきに聞かむと待たれて。郭公の聲を人より前に聞かうと思つて心の待たるゝをいふ。○夜深く打ち出でたる聲。夜更けて名乗りあげたる聲。○らうくしう。いかにも巧者らしくといふこと。郭公の鳴き方の巧なるをいふ。○愛嬌づきたる。かわゆらしく思はるゝさま。○こゝろあくがれ、せんかたなし。「あくがれ」は心がフハ〜と浮き立ちて、誘ひ出ださるゝこと。「せんかたなし」は禁止難きをいふ。心が自然と郭公の聲の方へ誘はれゆきて、如何とも禁止しがたしといふこと。○言もせず。郭公は六月になると鳴かなくなる故にいふ。○いふも愚なり。郭公の面白き事はいふも愚なりといふ意で、おもしろき事は茲にいふに及ばざるをいふ。○さしもなき。左様にもなき。乳兒の夜鳴きだけは、おもしろからぬをいふ。

通釋 霖雨の頃の短夜に、夜中目を醒して、何卒して他人より前に郭公の聲を聞きたいものぢやと思つて待つてゐる時に、夜更けて後に、郭公が巧者らしく、かわゆらしい聲を張りあげて鳴き出す。之を聞く時は、何とも名狀し、難い心地がする。精神恍惚として其の聲の方に、フハ〜と誘はれゆくやうに思はれて、止め難い。然るに六月になると、郭公の聲は、まるで聞えなくなるが、誠に残りをしく思はるゝ。郭公のおもしろき事は、茲に云ふも愚の事である。郭公に限らず、蟲でも何でも、夜鳴くものは、すべて善いものであるが、乳兒の夜鳴きだけは感心せぬ。

蟲は 枕草子

鈴蟲、松蟲はたおり、きりぐす、蝶、われから、ひを蟲、螢、蓑蟲いとあはれなり。鬼の生みければ親に似て、これも恐しき心ぞあらむとて、親の悪き衣ひききせて、秋風ふかむをりにぞ來むずる。まてよ」といひて逃げていにけるも知らず、風の音聞き知りて、八月ばかりになれば「父よ父よ」とはかなげに鳴く。いみじうあはれ

なり。日ぐらしぬかつき蟲、又、あはれなり。さる心に道心ダウシンおこして、つきありくらむ。又、思ひかけず暗き所などに、ほとめきたる、聞きつけたるこそ、をかしけれ。

語釋 われから。海藻に住む蟲にて其の形は蝦に似てゐる。此の蟲は、藻の濡れたる間は善く見えないが、乾くと見ゆるやうになつて、其の殻カが割るゝものといふ。割殻ワレカラの義。○ひをむし。日弱蟲ヒヨクムシの義といふ。朝生れて夕には死すといふ故に此の名がある。漢文にて蜉蝣の字を充てる。○鬼の云々。當時の諺に、蓑蟲は鬼の子というたので、斯く云うのであらう。○ちよよ。蓑蟲の鳴き聲がチツチツと聞ゆるのを、父よに引きかけていふ。○はかなげに。取りとめたることなしに、目的なしに、の意。○ぬかづき蟲。今こめつき蟲といふ。此の蟲の形は蚕に似て大きく、襟の處に褰ヒあり、物に觸れると、額カづきてバチンといふ音をさせて跳ねかへるものである。○さる心に道心おこし。「さる心には左様なる者即ち蟲の心にと云ふこと。道心は佛道に歸依する信仰心を云ふ。ぬかつき蟲が額カをついて禮拜する状を爲すは、蟲ながらも信仰心を起して佛を拜むのであらうと云ふ意。○思

ひかけず。意外に、ダシヌケに。○ほとめきたる。ほとくと聲を立つること。

通釋 蟲には、鈴蟲、松蟲、はたおり蟲、きりくす、蝶、われから、蜉蝣、蓑蟲などがあるが、蓑蟲は最も哀れの蟲である。此の蟲は鬼の生んだものである。故に親に似て恐ろしい精神を持つてゐるであらうと、其の親も恐しく思うて、蓑蟲を棄て、逃げた。其の逃ぐる時に、親の着てゐた、悪しき衣を着せて、此の秋になつて、秋風の吹く頃になると歸つてくるから、それまで、おとなしくして待つて居れよと云ひ聞かせて逃げ去つた。此の親は子を棄て、逃げたのである。然るに其の子たる蓑蟲は、親が己れを棄て、逃げたとは思はぬ故に、八月頃になつて秋風が吹くと、其の風の音を聞いて、もう父親が歸る頃であらうと思つて、父よ父よと、あても無く鳴いてゐるが、これは甚だ哀れに聞ゆる。日ぐらし蟲、ぬかつき蟲なども哀れな蟲である。ぬかつき蟲と云ふ名稱のあるを見れば、蟲の心にも、信仰心を起して、佛前に額つき禮拜しありくのであらう。又、此の額カづき蟲が暗い處などの、人目に觸れぬ所にて、ダシヌケにバチンと音をさせて跳ね返つたのを聞くのは、をかしいものである。

蠅こそ憎き者の中に入れつべけれ。愛敬アイキヤウなく憎きものは、人々しう書き出づべき者のやうにあらねど、萬マンの物に、顔コソツなどに濡

れたる足して、ゐたるなどよ。人の名につきたるは必ずかたし。夏蟲いとをかしく、廊の上飛びありく、いとをかし。蟻は憎けれど、輕びいみじうて、水の上などを、たゞ歩みありくこそをかしけれ。

語釋 人々しう。一人前の者らしくと云ふこと。○ゐたるなどよ。居たるなどは憎き者よと云ふことで、よは嘆辭。○人の名に云々。蠅と云ふ字が、人の名に附けてあるのは、必ず安からぬ感じを與ふる者であると云ふこと。人の名に蠅の字を附けて蠅磨など云ふ時は、憎き蠅を連想せしむるに依て、不安不快の感を與ふと云ふ意。「難しは不安の意。○夏蟲。蛾をさす。○輕びいみじうて。いみじく輕くしてと云ふこと。

通釋 蠅こそは、憎い者の中に入るべきものである。聊の愛敬も無く、憎い者なればとて、かゝる小動物を、一人前の者らしく書き出すにも及ばぬやうなれど、蟲の事を書く序を以て書くのである。蠅は萬の物にとまり、顔などにも濡れたる足にて、とまるが、誠に嫌なものである。故に人名に蠅の字が附いてゐると、蠅を連想せしむるに依て、不快の感を與ふるものである。夏蟲は最も、をかしい蟲である。此の蟲が廊の上などを飛びありくは殊に、をかしい。蟻は憎い蟲なれども、其の體が甚だ輕くして、水の上などを、何の苦もなく歩みありくのが、をかしい。

川は 枕草子

飛鳥川、淵瀬、定めなく、はかなからむと、いとあはれなり。大井川、いづみ川、水無瀬川、みよと川、また何事を、さしも、さかしく聞きけむと、をかし。音なし川、おもはずなる名と、をかしきなり。ほそ谷川、たまほし川、ぬき川、さは田川、催馬樂などの思ひはするなるべし。なのりその川、名取川も、いかなる名を取りたるかと聞かまほし。吉野川、あまの川、このしたにもあるなり。「七夕づめに宿借らむ」と、業平が詠みけむも、ましてをかし。

大意 川の名につきて偶感を述ぶ。
語釋 ふち瀬定めなく。水の深きを淵といひ、淺きを瀬といふ。飛鳥川は淵と瀬

とが時々に変りゆきて、此處が淵で、此處が瀬とは定まつてゐない。故に古今集にも世の中は何か常なる飛鳥川、昨日の淵ぞ今日の瀬となるといふ歌がある。此處の記事は此の歌を連想して書いたのである。○はかなからむと。取りとめて定まつて居らぬと思へばといふ意。○思はずなる名と。意外なる名と思へばといふ意。○ぬき川さはだ川。共に催馬樂歌の律の中に在る歌の名。○なのりその川。な告りそで告ること勿れといふ意。○このしたにも。此の吉野川の下にも、天の川といふ川があるといふ意。元來、天の川は天上にある川なるに、それが吉野川の下にあるはをかしいといふこと。○たなばたづめ云々。伊勢物語に業平が惟喬親王の御伴をして、天の川といふ處に行きたるをり、かりくらし棚機津女に宿からむ天の川原に我れは來にけりといふ歌を讀んだ事が記してあるが、それをさしていふ。

通釋 飛鳥川といふ川があるが、これは古歌にも「飛鳥川、昨日の淵ぞ今日の瀬となる」と讀んである程の川であつて、淵も瀬も定まりが無いから、此の後どのやうになる事かと思へば、いと哀れの川である。大井川、いづみ川、みなせ川、みよと川など云ふ川がある。耳敏川といふのは、何事を、それほどに敏く聞いたゆゑに附けられた名であらうかと思へばをかしい。又、音無川といふ川もある。川には水の流れの音があらうに、音無川といふは意外の名であると思へば、これもをかしい。又、細谷川、たまほし川、ぬき川、さはだ川、など云ふ名もある。ぬき川、さはだ川は、催馬樂歌の律の名であるから、催馬樂などの思ひがするであらう。又、なのりその川、などり川といふ川もある。名取川といふは、如何なる名を取れる故の名であるか、聞きたいものである。又、よしの川、あまの川、などいふ川もある。天の川といへば一體天上の川であらうに、吉野川の下にも天の川と云ふがあつて、此の天の川は、昔在原業平が「たなばたづめに宿からむ、天の川原に我れは來にけり」といふ歌をよんだ所であるから、それもをかしくなる。

頭辨の職に参り給ひて 枕草子

頭辨の職に参り給ひて、物語りなどし給ふに、夜いと更けぬ。明日御物忌なるに、籠るべければ、丑になりなば、悪しかりなむとて、参り給ひぬ。つとめて、藏人所の紙屋紙ひき重ねて、後の朝は殘

り多かる心地なむする。夜を通して、昔物語も聞えあかさむとせしを、鶏の聲に催されてと、いみじう清げに、うらうへに、事多く書き給へる、いとめでたし。

語釋 頭辨の職に参り。頭辨は藏人、頭にて辨官を兼ねる者の稱で、藏人、頭藤原行成卿を指す。「職」は中宮職で、皇后宮の事を掌る役所。藤原行成卿が中宮職に参りと云ふこと。○御物忌。宮中にて御慎みのある日で、此の日には政務も執らず齋戒沐浴して宮中に籠りをるのである。○丑。丑の刻で今の午前二時に當る。○つとめて。翌朝早く。○紙屋紙。紙屋川にて抄きたる紙。○後の朝。女に逢ひたる後の朝。女に逢ひたる翌朝。○雞の聲に催されて。雞の鳴き聲に退出を催促せられて。○うらうへに事多く書き。うらうへは裏表で、表裏反對せるを云ふ。反對に、數多の事を書くに云ふは、無き事をも有る事のやうに偽り書くを云ふ。**通釋** 頭辨藤原行成卿が中宮職に参られて、私ども(清少納言等)と物語などを爲さつた時に、夜が大層に更けた。行成卿は、明日は宮中の御物忌の日であるに依て、宮中に籠らねばならぬのである。然るに丑の刻午前二時頃になりたらば、遅刻とな

つてわるいであらうからと申されて、中宮職を辭して宮中へ参られた。さて行成卿は、其の翌朝早く、藏人所の用紙なる紙屋紙を引き重ねて、それに文を認めて贈りこされた。其の文の中に、美人に逢うたる翌朝は何とはなしに、残り多いやうの心地がする。夜の明るるまで、昔物語を話して、夜を明かさうと思つてゐたのに、雞鳴の爲に退出を催促されて餘儀なく歸りましたれば、など云ふ事が、大層に美しく書いてあつて、其の他にも、虚事などを澤山に取交へて書いてあつたが、其の書きぶりが、誠に立派のものであつた。

御かへりに、いと夜深く侍りける鳥の聲は、孟嘗君のにや」と聞えければ、立返り、孟嘗君の鶏は、函谷關を開きて、三千の客、僅に去れりといふは、あふ坂の關の事なり」とあれば、

「夜をこめて鶏の空音は謀るとも、よにあふさかの關はゆるさじ。

心かしこき關守の侍るめり」と聞ゆ。

語釋 御かへりに。御返書に(清少納言より行成卿への)。○いと夜深く……孟嘗

君のにや。深更に鳴いた雞の聲と云ふは、孟嘗君の雞鳴の類にや。あなたが御歸りになつた時刻は、丑の刻であつて、尙深更の事なれば、雞の鳴くべき筈は無いのに、御手紙に依れば、雞鳴に退出を催促されて餘儀なく退出したと云ふことであるが、其の雞鳴と云ふは、眞の雞鳴にはあらずして、お歸りを急がるゝ爲に、偽りの雞を鳴かせられたのでは有るまいか、即ち昔の孟嘗君の雞鳴の類ではあるまいか、と云ふ事。さて「孟嘗君」は齊の人で、食客三千人を養うた人である。孟嘗君が秦に使用して、秦より逃げ歸る時に、函谷關を通らねばならぬが、此の關の規則としては、雞鳴前に關門を開くことはない。去りとして雞鳴を待つてゐると、追手の者に捕へらるゝ虞があるので、非常に困つてゐた。此の時、孟嘗君の食客に巧に雞鳴の眞似をする者があつて、例の眞似鳴きをした所が、眞の雞も、それに欺かれて鳴いたので、關守も、亦それに欺かれて關門を開いた。是に於て孟嘗君は虎口を脱するを得たのである。○立返り。折返しての返事「行成卿より清少納言へ」。○孟嘗君の……關の事なり。孟嘗君の雞鳴は、能く函谷關を開いたので、三千の食客が漸く逃げ去つたと云ふ函谷關は、支那の函谷關では無くして、日本の「あふ坂の關」近江の逢坂の關を男女相會ふ關に引きかくである。昨夜は、御身「清少納言」に會ふ爲に行つたのであつたが、雞

が鳴いた爲に、夜が明けて人に見られては困ると思つて、急ぎ歸つたのであると云ふこと。これは、行成卿より清少納言へ、戯れに書き送つた文句。○夜をこめて云々。「夜をこめて」は夜を晝に込め加へての意であるから、夜明けに先ちての事になる。「ぞらね」は偽りの鳴き聲。「はかる」は欺き、たばかること。「よにあふ坂の」よは「よ」どころなどの「よ」で男女の間を云ふ辭であるから、「よにあふ」とは男女相會ふことを言ふのであるが、それを地名の逢坂の關に引きかけたのである。云ふ意は、支那の函谷關は、詐りの雞鳴に欺かれて關門を開いて通行を免したかも知れぬが、日本の逢坂の關は、偽りの雞鳴に欺かれて、通行を許す筈がないから、其の計略に罹りて、逢ふことを許す譯には行かない、と云ふ事である。

通釋 私「清少納言」は行成卿への返事に、「いと深夜に鳴いた雞の聲と云ふは孟嘗君の雞鳴の類にて、偽りの雞鳴では御座らぬか」と申上げたれば、折返して御返事があつた。それを披いて見ると、孟嘗君の雞鳴が能く函谷關を開いたに依て、三千の客が漸く逃げ去つたと云ふは、支那の函谷關では無くして日本の逢坂の關の事である。昨夜は御身に逢はんだめに赴いたのであつたが、雞鳴に驚かされて、急に立ち去つた爲に、其の意を遂げなかつたのは、残念である」と認めてある。依て、又、左の歌

を詠んで御返事を申上げた。

〔歌の意〕夜明けに先ち偽りの雞を鳴かせて、關守を欺かうとなされても、逢坂の關だけは通行を許すわけには参りませぬ。

此の逢坂の關には心の賢い關守が居る様子で御座いますから、偽りにては決して門を開きませぬと御返事を申上げた。

たちかへり、

「あふ坂は、人こえやすき關なれば、

鶏も鳴かねど、開けて待つとか。」

と、ありし文どもを、はじめのは、僧都の君の額をさへつきて、取り給ひてき。のちくのは、御前にて、さて逢坂の歌は、詠みへされ、返しもせずなりにたる、いとわろしと笑はせ給ふ。

〔語釋〕逢坂は云々。逢坂の關は、人の踰え易き關なれば、關守の方にて、雞の鳴かぬ中に、早くも門を開けて、人の來るを待つてゐると云ふにやの意。これは、清少納言が「逢坂の關はゆるさじ」と、跳ねつけたるを悟らぬふりして詠んでやつた歌であ

るから「清少納言の方にて、行成卿に逢ひたくて、關門を開いて待つてゐるにや」と云ふ意を裏面に含ませたものである。○はじめのは、紙屋紙に認めたる文を指す。○僧都の君。皇后の弟君なる隆圓僧都。○のちくのは、其の後に送り越したる文どもをば。○御前にて。皇后宮の御前にてと云ふ事で、下に「御覽に入れたるに」などの語を補うて解釋すべきところ。○よみへされて。押しつけらるゝ事を「へさる」と云ふのであるから、詠みまくられ、詠み負かされなどの意で、詠歌に負けて、返歌し得ざるを云ふ。

〔通釋〕行成卿より、折返しに返事が來た。披いて見ると、

〔歌の意〕逢坂は人の踰え易き關なれば、關守の方にて氣轉をきかせて、雞の鳴かぬ中に、早くも關門を開いて、人の來るのを待つてゐるとの御意にや。然らば拙者も早速に參上致しませう。

と認めてあつた。斯の如く幾度か行成卿と艶文の贈答をしたが、行成卿より最初に贈り越したる文、即ち紙屋紙に認めたる文は、僧都の君が、大層に懇望して、御辭儀までなされて御取りになつた。其の後に幾度か贈り越したる文をば、皇后宮の御前にて御覽に入れたるに、皇后宮は、さて逢坂の關の歌は、清少納言が詠みまくられて

しまうて、返歌も爲し得ぬやうになつたのは、わるい」と笑はせられた。

村上天皇の御事 榮華物語

榮華物語は赤染衛門の作とも云はれ、又藤原爲業の作とも傳へられてゐるが、何人の著であるか分らぬ。のみならず、全部一人の筆に成つたものでは有るまいと云ふことである。此の書は宇多天皇の御代より筆を起して堀河天皇の寛治六年までの歴史をば「月の宴」「花山」様々の喜びなど云ふ面白き小題を設けて、物語の體裁に書き記したものである。その記事の多くは藤原氏一門に關する事柄であつて特に藤原道長の榮華の有様が、委しく記されてある。これ榮華物語の名稱の興へられたる所以。さて茲に掲ぐるは、月の宴の一節にして村上天皇の御性質を記した所である。

かくて今の上の御心ばへ、あらまほしく、あるべき限りおほしましけり。醍醐の聖帝、世にめでたくおはしましけるに、又この御門、堯の子の堯ならむやうに、大かた御心ばへの雄々しう、けだかく、かしこう、おはしますものから、御ざえも限りなし。和歌のかたにも、いみじう、しませ給へり。萬になさけあり、物のはえ、おはしますこと限りなし。

語釋 今の上。村上天皇を申す。○御心ばへ……おはしましけり。こゝろばへは、心のさま、性質。「あらまほしくは、かく、有れかしと希望すること。今上陛下の御心の様は、如何にと云ふに、筆者等の意中に、人君たるものは、斯く有りたきものなりと思ふ所の有らゆる美點を備へさせられたりと云ふ意。○醍醐の聖帝云々。醍醐天皇は村上天皇の御父にして、聖帝の聞え高く、村上天皇また聖帝の令名がある。支那にて聖帝の聞えある堯の子には、丹朱と云ふ不肖の子が生れたが、醍醐、村上の御父子は、それとは異なりて堯の子に堯が生れたやうな者であると云ふ意。○けだかく。氣高くで、氣品の高きこと。○おはしますものから。おはしまし乍らも。今上陛下の御性質は、勇ましく、氣品高く、英明に渡らせられ乍らも、他の一方には風流の材藝も、淺からずおはしましたりと云ふ意。○御ざえ。御材藝。○いみじう、しませ給へり。大に御意を入れて嗜ませられたと云ふこと。「しむは染むで、染み

込み親しみ嗜むを云ふ。○物のはえ。物の見映にて、立派に値打あるを云ふ。
 通釋 今上陛下の御性質は、筆者等が人君たる者は斯く有りたきものなりと希望する所の有らゆる美點を備へさせられた。御父なる醍醐天皇は、世に聖帝と尊ばれ、めでたくおはしましたるに、其の御子に、今上陛下の如き聖帝の生れられたるは、堯の子に堯の生れたやうなものである。今上陛下の大方の御性質は、勇ましく、氣品高く、英明に渡らせらるゝ。剛健英明の人は、やゝもすれば風流の材藝を缺くものなるに、今上陛下は風流の御材藝も限りなく、おはしました。和歌も大層に御好みになり、萬事に、なさけ深く、御立派なること限りが無い。

そこらの女御、御息所、参り集まり給へるを、時あるも、時なきも、御志すくれたるも、こよなきも、聊か恥ぢがましげに、いとほしげに、もてなし扱も、せさせ給はず。なのめに、なさけありて、めでたう思しめしわたして、なだらかに、おきてさせ給へれば、この女御、御息所たちの御中も、いと、めやすく、びんなき事聞えず。

語釋

そこらの。數多の。○時あるも、時なきも。「時ある」とは、時を得て盛なるこ

とにて、寵遇を受くるを云ひ、時なきは、然らざるをいふ。○御志すくれたるも、こよなきも。女御等の心ばへの勝れたるも、勝れざるも。「こよなきは、ことなきの誤りであらう。特に勝れたる材藝なきこと。○恥ぢがましげに、いとほしげに、もてなしなどもせさせ給はず。恥づかしきやうに、又、氣の毒のやうに、御取扱ひなさることとは、決して成さらぬ。○なのめに、なさけありて。概して情ありて。○めでたう、おぼしめしわたして。麗はしく平等に、思召されて。○なだらかに、おきてさせ給ふ。依怙最負なく御取扱ひなさる。「なだらかは、高低少きを云ふ。」「おきてさせは、定めさせと云ふ語より轉じて取扱の意に用ひたもの。○めやすく。見苦しからぬと。「めやすくは、目易くにて、目に見て悪しからぬを云ふ。○びんなき事。便無き事で、不都合なる事を云ふ。一家の主人たる者が、妻妾の取扱ひの上に、公平を缺くときは、一家中に不都合なる紛擾の起るべきは、古今同一轍である。然るに村上天皇はすべて公平に取扱はれたれば、女御等の間に嫉妬騒ぎの如き不都合の事は起らなかつたと云ふ意。

通釋 數多の女御、御息所等が伺候するに方りては、寵遇あるも、寵遇なきも、心ばへの勝れたるも、勝れざるも、聊かの分け隔てを成さらぬ。寵遇なき者に對しても、其

の者等の恥かしきやうな氣の毒のやうな御取扱は決して成さらぬ。帝の御處置は、概して情ありて、麗はしく公平に思召されて、依怙最負なく、御取扱ひなされたれば、宮中もよく治まりて、女御、御息所たちの中も美しく和合し、不都合なる事などは、嘗て聞えぬ。

くせぐせしからず、杯して、御子生まれ給へるは、さる方に、重々しく、もてなさせ給ひ、さらぬは、さべう御物忌などにて、徒然におぼしめさるゝ日などは、御前に召し出でて、碁、雙六うたせ、偏をつがせ、石などをせさせて、御覽じなどまでぞ、おはしましければ、皆、かたみに、情をかはし、をかしうなん、おはしあひける。

語釋

くせぐせしからず。互に嫉みなどせずして。○さる方に云々。それ相應に、其の向々に依りて、大切に取扱ふ。○さらぬは。御子を生まざる女御は。前を受けて云ふ。○さべう御物忌。さるべき御物忌。物忌にて一室に籠りをる故に徒然を感ずる。是に於て、女御等を御前に召して、或は碁を打ち、或は雙六を弄び、或は偏つぎの遊を爲し、或は石などりの遊を試みさせて、御覽になつたのである。○

偏つがせ。偏つぎの遊びをさせる。偏つぎとは、文字の傍を隠しおいて偏のみを示し、其の文字を多く云ひ當つるを以て勝ちとする遊戯。○石などり。石投げの遊戯。その方法は、石を撒きおきて、其の一個を投げ上げ、その落ちざる中に、下の石をさらひて、之と打合するのである。○かたみに情をかはし。女御等が互に情を掛けあふこと。○をかしうなん、おはしあひける。おかしうは興ありて面白きをいふ。互に其の中うち解けて、興ありげに、面白く暮らされたこと云ふこと。

通釋

女御等互に僻み嫉みなどせずして、睦ましく暮らすうちに、懐胎して御子を生むものがある。御子を生みたる女御は、その向きくに従ひて、大切になさる。又、御子を生まざる女御等をば、御物忌のため、一室に籠りて御謹慎なさる時などに、御前に召して、碁、雙六、偏つぎ、石などり杯の遊戯を催させて、それを御覽になる。帝の御取扱ひが斯の如くなるが故に、女御等も、互に情を掛けあうて、面白く暮らされた。

かく御門の御心の、めでたければ、吹く風も枝を鳴らさず、杯あれば、ばにや、春の花も、にほひのどけく、秋の紅葉も枝にとままり、いと

心のどかなる御有様なり。

注釋 にはひのどけ。花の色の褪せすして、長く樹上に盛んなるを云ふ。

通釋 今上陛下の御意、かくの如く、めでたきが故に、天下平穩にして、吹く風も枝を鳴らさずと云ふ程の泰平の有様であつた。さればにや、春咲く花も、つや／＼と静に樹上に咲きて長く散らす、秋の紅葉も、長く樹上に留まりて錦を飾り、誠に心のおちついて、靜なる御有様である。

源高明公の左遷

榮華物語

冷泉天皇の安和二年に、源滿仲、橘繁延等が、爲平親王を奉じて、亂を作さんと企て、其の事が露顯に及んだ。時に左大臣源高明公の女は、爲平親王の妃となつてゐた。右大臣藤原師尹は、豫てより高明公を除いて、之に代らうとの野心を蓄へてゐた。故に高明公は、師尹の爲に、女婚なる爲平親王を帝と爲さんと謀つたものであると言ひ做されて、左遷の厄に遭うたのである。

かゝる程に、世の中に、いと怪しからぬ事をぞ言ひ出でたるや。

それは、源氏の左の大臣の式部卿の宮の御事を思して、御門を傾け奉らんとし構ふと云ふこと出で来て、世に、いと聞きにくく罵る。いでや、世に、さる怪しからぬ事あらじなど、世の人、申し思ふ程に、佛神の御許しにや、實に御心の中にも、有るまじき御心や有りけん、三月二十六日に、此の左大臣殿を、檢非違使、打ち圍みて宣命讀み罵りて、御門を傾け奉らんと構ふる罪によりて、太宰權帥になして流し遣すと云ふ事を讀み罵る。

語釋 怪しからぬ事。不思議な事、道理の分らぬ事。「怪しかる事」と同義に用ひたのである。○言ひ出でたるや。言ひ出したるぞや。「や」は嘆辭。○源氏の左の大

臣。左大臣源高明(醍醐帝の第十七子、源姓を賜りて臣下となる)。○式部卿。爲平親王(源高明の女婿)。○いでや。「いで」も「や」も嘆辭。○佛神の御許しにや云々。佛神も讒者の非違を御默許なされし故に、高明公左遷の事の生せしにや、又は、高明公の心中に、非望を懷きしに依りて、左遷せられしにやと云ふ二個の疑團。

通釋 かゝる程に、一向に譯の分らぬ事を、世の中に、言ひ出しましたるぞや。それは別の事ではない。左大臣源高明公が、其の女婿なる式部卿爲平親王の御爲を思つて、朝廷を傾けんことを謀ると云ふ事がある。こんな噂が生じて、世間では、大層に聞きにくく、罵り騒いでゐる。イヤ、こんな馬鹿氣た事は有るまい、などと世間の人を思つてゐる中に、それが事實か、どうか分らぬが、高明公左遷と云ふ結果が顯れて來た。これは、神も佛も、しばし讒者の非違を御默許になつて、それを制せられぬ爲に、茲に至つたので有らうか、或は然らずして、高明公が實際に非望を懷いてゐた爲に、茲に至つたので有らうか。その原因は、何れとも分らぬが、三月廿六日に、此の左大臣殿の邸をば檢非違使が取り圍んで、宣命を讀み上げて騒いでゐる。その宣命には、高明公が朝廷を傾けんと謀る罪に依りて、太宰權帥となして流し遣すと云ふ事が書いてあつたので、それを讀み上げて騒いだのである。

今は御位も無きぢやうなればとて、綱代車に乗せ奉りて、たゞいきにゐて奉れば、式部卿の宮の御心ち、大かたならんにて、だに、いみじと思さるべきに、まいて、我が御事によりて、出て來たるにこ

そと、聞き思すに、せん方なく思されて、われもくと、出で立ち騒がせ給ふ。

語釋 御位も無きぢやうなれば。「ぢやう」は定である。高明公、今や左大臣の位も無い事なればと云ふこと。○綱代車。綱代を張りたる車。○たゞいきにゐて。「只行きに率て」で、むやみやたらに、急いで率ゐ行くこと。○大方ならん云々。高明公は式部卿の宮の舅なれば、たとひ普通の罪に依りて流さるゝとしても、式部卿の宮は辛く思召すであらうに、まして、此の度の事は、式部卿の宮の事に關係して出來たのであると云ふ上からは、宮はどんなに辛く思召すことであらう。依て宮の中の者も、われもくと出で立ちて騒がれた。

北の方、御むすめ、男君達、いへば、おろかなる殿の内の有様なり。思ひやるべし。昔菅原の大臣の流され給へるをこそ、世の物語に聞こしめしよか。これは、あさましう、いみじきめを見て、あきれ惑ひて、皆泣き騒ぎ給ふも悲し。

語釋 北の方。高明の妻。○いへばおろか云々。高明公の邸内の悲惨なる光景

はいふも愚である故に讀者宜しく其の光景を想像せらるべしと云ふこと。○昔
 菅原……召しゝか。往時左大臣菅原道真公の流されし事は世の物語に依て高明
 公も豫て聞いて居られたのであつた。○これは云々。今回の事は他人の事なら
 ずして我が身の上の事である。少も覺えの無い罪によりて、あさましい、ひどい目
 に遭ふのであるから、皆あきれ感うて泣き騒いだが、まことに悲しい有様である。
 男君達の冠などし給へるも、後れじくと、惑ひ給へるも、敢て寄
 せつけ奉らず。唯あるが中の弟にて、童なる君の殿の御懷、離れ
 給はぬぞ、泣き罵りて惑ひ給へば、事のよし、奏して「さばれ、それは」
 と許させ給ふを、同じ車にてだに、あらず、馬にてぞおはする。十
 一二ばかりにぞおはしける。只今世の中に、悲しくいみじきた
 めしなり。人のなくなり給ふ、例の事なり。これはいとゆゝし
 う心うし。

語釋 冠などし給ふ。男子丁年に達すれば冠を加へて大人となりたる禮を行ふ。
 之を冠すといひ又元服すとも云ふ。○あるが中の弟。最も末の子。○さばれぞ

れは。「さばれは」さもあらばあれの約。左様ならば致し方が無いから、それ丈は同
 行を許すと云ふこと。○只今云々。高明公の流されて、一家中の泣き騒ぐ有様は、
 當今の一大悲惨の實例であると云ふこと。

通釋 高明公は多くの御子を持たれてゐた故に、もはや元服せられた者もあつた
 が、この御子たちが、高明公の流され行く方へ、吾れ後れじと、泣き惑ひつゝ追ひ行
 いた。それを、檢非違使が無情にも遮りて、近づく事を許さない。唯最も末の子にて
 尙、童なるもの一人居たが、此の御子は高明公の懷より離れずして、泣き騒いでゐた
 故に、檢非違使も其の事を朝廷に申上げた所が、然らば、それ丈は同行を許せとの御
 許可があつた。斯く御許可のありたる上は、高明公と同車にて送られたりとも、何の
 差支も無いのであるに、同じ車には乗せずして、別に馬に乗せて、高明公に随ひ行か
 せた。此の御子の年はと云ふと、十一二ばかりである。之を見て、涙を絞らぬもの
 は無い。これは實に當時に時ける一大悲惨の實例である。人の死ぬると云ふも
 悲しい事ではあれども、生者必死は例の事なれば、致し方もない。然るに高明公が
 流されて一家離散すと云ふ事は、實にく心痛の限りである。

醍醐の御門、いみじうさかしう、賢くおはしまして、聖の帝とさへ

申し、御門の第一の御子、源氏になり給へるぞかし。かゝる御有様は、世にあさましく、悲しう、心憂き事に、世に申しのゝしる。

語釋 第一の御子。高明公は醍醐帝の第十七子で、源姓を賜はりて臣下に列したのであるから、こゝに「第一の御子」とあるは「第十七の御子」の誤寫であらう。

通釋 醍醐帝は大層に御賢明に渡らせられて、聖帝とまで尊稱せられた御方である。今回流された高明公は、此の聖帝の第一の御子で源氏になられたのである。聖帝の御子でありながら流されてしまふと云ふ事になつたのであるから、實に悲しい實に心憂い事であると云うて、世間では噂とりどりである。

式部卿の宮、法師にやなりなましと思せど、稚き宮達の、美しうておはします。大北の方の、世をいみじきものに覺えたるも、只今は宮の一所の御蔭に隠れ給へれば、いみじう哀に悲しとも、世のつねなり。

語釋 大北の方。大臣公卿等の妻を尊稱して北の方と云ふに對して、其の母を大北の方と云ふ。式部卿爲平親王の妃は高明公の女である、故に高明公の妻を大北

の方と云ふのである。

通釋 式部卿の宮も、此の世の事が、嫌になつて、法師となつて、遁世したいと思はれた、稚き御子たちが、美しく愛らしい爲に、遁世しかねたのであるが、今一つ其の遁世の妨げとなるものがあつた。それは高明公の妻、宮の妃の母が、此の世をば、大層に憂いものと思うたが、我が女が式部卿の宮の妃となつてゐるのをば、たよりに思つて、宮にすがりついて居るのであるから、それをふり捨てかねた故である。世に悲惨なる事を述ぶるに、いみじう哀に悲しなど云ふ言葉を用ふるのであるが、この言葉は尋常普通の悲みを述ぶるに適するのみであつて、今回の如き極て悲惨なる事を述ぶるには適せないのである。

住ませ給ふ宮の内も、萬に思し埋れたれば、御前の池、遣水も、みくさる、むせびて、心もゆかぬやうなり。さまざまに、さばかり植ゑ集め、繕はせ給ひし前栽、植木どもも、心にまかせて生ひあがり、庭も淺茅が原になりて、哀に心ぼそし。

語釋 住ませ給ふ宮の内。高明公の住ませられた西宮の邸内。高明公は西宮の

邸に住ませられた故に、世に西宮左大臣と云ふ。○萬に思しうもれ。邸内のもの何れも思ひに沈んで悲しんでゐる。○みくさむむせびて。水草が居塞りて。池も遣水も之を掃除する者の無い爲に、中に水草が生じ、それに依て流れも堰き止められて噎ぶやうに滞るを云ふ。○心もゆかぬやうなり。思ふ如くに行はるゝを「心行く」と云ふのであるから、其の反對に、意の如くならず不愉快なる様子を指して云ふ。○さばかり植ゑ集め。高明公在邸の頃、あれ程立派に植ゑ集められたといふこと。○つくろはせ。手入れをさする事、即ち草を刈り、枝を剪り揃へるなどの事を云ふ。○前栽。庭前に栽ゑたる草木。○心のまゝに云々。高明公の在邸の頃には、屢々手入れをなされたるに依て、庭も奇麗であつたが、其の後は手入れをする者のない爲に、草木はのびたいまゝに伸び、庭はまるで茅野のやうになつて、誠に心細い淋しい處となつてしまつた。

宮は、哀にしみじと思しめしながら、くれやみにて過ぐさせ給ふにも、昔の御有様戀しう悲しうて御直衣の袖も、絞りあへさせ給はず。生きながら身をかへさせ給ふやうなぞる、哀に辱けなき。

語釋 宮。式部卿の宮爲平親王。○くれやみにて過ぐさせ給ふ。「くれは」は、涙に暮れ、途方に暮れなどの「くれでやみ」は物の黒白も分らぬ程に感ふを云ふ。式部卿の宮は、涙に暮れ感うて、高明公の邸前を御通過になると云ふこと。○直衣。中古の官服の名であつて、其の制、大抵袍と同じで、只その地と紋とに相違がある。袍は晴の儀式の時に着用するもの、直衣は平日に着用するものである。○絞りあへさせ給はず。直衣の袖を以て涙を拭うたのであるが、其涙が絞りきれぬ程に出る。○生きながら云々。爲平親王は生きてゐながら、其の身が取り換つたやうに、昔と今とでは榮枯盛衰が烈しく異なつてゐるが、誠に勿體ないことである。

源氏の大臣のあるが中の弟の女君の、五六ばかりにおはするは大臣の御はらからの十五の宮の御女もおはせざりければ、迎へとり奉り給ひて、姫宮とて、かしづき奉り給ひて、養ひ奉り給ふ。それにつけても、いと哀なるものは世なりけり。帥殿は法師になり給へりとぞ聞ゆめる。

語釋 あるが中の弟の女君。多くの女子のある中の最も末なる女子。○御はら

から。御同胞兄弟。○十五の宮云々。醍醐帝の皇子盛明親王を十五宮と云ふ。盛明親王には御女子の無かりし故に、御弟なる高明公の末女を貰ひ受けて、我が姫宮として大切に養育したと云ふこと。○帥殿。高明公が太宰權帥になつた故に云ふ。

菅公の配流 大鏡

大鏡は藤原爲業の著であると云ふ説もあり、爲業の著と云ふは疑はしいと云ふ説もあつて、慥かに誰の著とも分らぬ。此の書は文徳天皇より後一條天皇まで、凡そ百七十年間の事蹟をば、大宅の世繼と云ふ假託の老翁が、夏山の繁樹と云ふ假託の老翁に向つて物語つたのを、著者が、傍らに聽いてゐて、それを書取つた體裁に述べたものである。之を大鏡と名けたるは、繁樹翁が世繼翁の物語の明晰なるを賞めて「明らけき鏡にあへば過ぎにしも、今ゆく末の事も見えけり」と詠じたるに對して、世繼翁が「天皇の蹟もつぎく隠れなく、あらたに見ゆる古鏡かも」と返歌したと云ふ本書中の記事に基いたものである。さて茲に掲ぐるは「左大臣時平」と題する記事の中の一節で菅公配流の顛末を叙したる所である。

醍醐の帝の御時、この大臣（時）左大臣の位にて、年いと若くておはします。菅原の大臣、右大臣の位にておはします。其の折、帝おほん歳いと若くおはします。左右大臣に世の政を行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、其の折、左大臣御歳廿八九計り、右大臣御歳五十七八にやおはしけん、ともに世の政をせしめ給ひし間、右大臣、才も世に勝れ、めでたくおはしまし、御心おきても、殊の外に賢くおはしまし、左大臣の御歳も若く才も殊の外に劣り給へるにより、右大臣御覚え、殊の外におはしましたるに、左大臣安からず思したる程に、さるべきにやおはしけん、右大臣の御爲に善からぬこと出で來て、昌泰四年正月廿九日、太宰權帥に爲し奉りて流され給ふ。

語釋 菅原の大臣。菅原道真。大臣は大殿の略轉でもと貴人の居室の尊稱であるが、それを轉じて大臣たる人をも云ふ故に通常大臣の文字を書く。○おほん歳

「おほんは大御の音便で尊意の接頭語であるが、更に之を約めておんと云ふ。御歳。○めでたくおはし。愛しくして賞すべきを云ふ。御立派でおいでなさると云ふこと。○御心おきて。御心の定め、御心の持ちやう。○御覚え。天皇陛下の御信用、御寵遇。醍醐天皇が右大臣を御寵遇なさる事の特別なるを云ふ。○さるべきにやおはしけん。然るべき因縁にやおはしけんの略。右大臣の配流は、前世の因縁にやありけん」と云ふ意。○善からぬ事。不都合なる事と云ふ意で、時平の讒言を指して云ふ。

此の大臣の子ども數多おはせしに、女君達は婿どりし、男君達は皆、程々につけて、位どもおはせしを、それも皆かたぐに流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君女君達、慕ひ泣きておはしければ、小きは、あへなんと、おほやけも許さしめ給ひしかば、ともにて下り給ひしぞかし。

語釋 此の大臣。菅公を云ふ。○程々につけて。其の材能の程に應じて。○かたぐに。彼方、此方へ別々に。○小きはあへなんと。幼少のは、怵へよう。幼少の

者だけは、こらへて、父と同行する事を許さうと云ふこと。○おほやけ。朝廷。○ともにて。共に率ゐて。

通釋 菅公には數多の子どもがございまして、御女子たちは夫を持ち、御息子たちは其の材能に應じて官職に就いて、おいでなさいましたが、それ等も皆、彼方、此方へ流されて、まことに悲しい事になりました。されば、御幼稚なる男女子たちは、その後を慕うて泣いておいでなさつて、其の様が、いかにも哀れであります。依りて朝廷にても、幼少なる者だけは勘忍して、特別を以て同行を許されましたれば、菅公は、幼き子どもを引き連れて、筑紫へ御下りになりましたぞよ。

帝の御掟きはめて、あやにくにおはしませば、此の御子どもを同じ方にだに遣さゞりけり、かたぐに、いと悲しく思ひて、御前の梅の花を御覽じて、

こち吹かば、香おこせよ梅の花、
あるじなしとて春を忘るな。

又亭子の帝に聞えさせ給ふ。

流れゆく我れは水屑となりはてぬ、

君しがらみとなりてとゞめよ。

〔語釋〕 帝の御掟。帝の御處置御命令。○あやにく。意地わるきこと。○此の御子ども。年長の御子ども幼少の御子どもではない。○かた／＼に。あれを思ひ、これを思ひて。○こち。東方より吹く風。これは春になると吹く風である。○香おこせよ。香を送り越せよ。○あるじ。家の主人(菅公自ら云ふ)。○亭子の帝。字多上皇。○聞えさせ。申上ぐる。○しがらみ。竹木などを横にふせて、水の流をせき止むるもの。

〔通釋〕 帝の御命令が、誠に意地わるくございまして、此の年長の御息子どもを同じ方角へだに遣らずして、方角の違ふ處へ遣りました。菅公は、それを思ひ、かれを考へ、誠に悲しく思されて、御庭前の梅の花を御覽になつて、次の歌を詠まれました。

〔歌の意〕 春になつて東風が吹くやうになりたらば、例年の通りに開いて、其香を筑紫まで送り越して呉れよ、梅の花よ。主人なる我れは、もう此處には居らぬけれども、主人が不在なりとて、春になれば開くが善い、春を忘れないがよい。

又、宇多上皇に次の歌を申上げた。

〔歌の意〕 流れて参りまする私は水屑となりはてました。陛下よ、どうぞ、シガラミ無き事によりて、斯く罪せられ給ふを、からく思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。其の程、極めて悲しきこと多かり。日頃經て、都遠くなるまゝに、哀れに心細く思されて、君が往む宿の梢をゆく／＼と、

隠るゝまでも願みしはや。

又、播磨の國におはし着きて、明石の驛と云ふ所に御宿りせしめ給ひて、驛の長の、いみじう思へるけしきを御覽じて、作らしめ給へる詩いと悲し。

驛長無驚時變改、一榮一落是春秋、

〔語釋〕 なき事。冤罪。○からくおぼし。つらい事に思召して。○山崎にて出家云々。山崎は山城乙訓郡の地名。出家せし事は他の書に見えねば誤傳であらう。

○ゆく／＼と。行きながら。○願みしはや。はやは歎辭。○いみじう思へるけしき。菅公の左遷を、いたく驚きたる様子。

通釋 冤罪によりて斯く罪せられたるを、菅公は、つらい事に思召して、山崎と云ふ所で、御剃髪になつてしまつた。其の程に、極て悲しい事が澤山ありました。日を経て、都が遠くなるに従ひ、菅公は哀れに心細く思召されて次の歌を詠まれた。

(歌の意) 君の住み給ふ御宿の樹の梢をば、配流の途中にて、モハヤ梢の隠れて見えなくなるまで、ふり返り／＼して、幾度も願みた事でありませぬぞや。

又、播磨國に御着きになつて、明石驛と云ふ所に御泊りになりました時に、驛長が、菅公の左遷をひどく驚いた様子を御覽になつて、御作りになつた詩は誠に悲しい。

(詩の意) 驛長よ、右大臣たる高官が、忽ち流罪になると云ふやうな、時勢の急變を驚くことは無用である。これは春に一たび榮えたものが、秋に一たび凋落すると同じ事であるから、驚くには及ばぬ。

筑紫におはし着きて、哀れに心細く思さるゝ夕、遠方に所々、煙たつを御覽じて、

夕されば、野にも山にも立つ煙、

なげきよりこそ、もえまさりけれ。

又、雲の浮きて漂ふを御覽じて、

山わかれ、飛行く雲の歸りくる、

影見る時ぞ、なほ頼まるゝ。

さりとも、世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならず、漂ふ水の底までも、

清き心は月ぞてらさむ。

これ、かしく遊ばしたりかし。げに月日こそは、照らし給はめ
ところ、はあめれ。

語釋 夕されば云々。夕になれば、野にも山にも煙が一杯に立ち塞りて、只さへ物悲しくなるのであるが、我が身の不幸を嘆く其の嘆きに依りて、煙が、益々盛に焼えあがり、夫に依りて益々悲しくなると云ふ意。「なげき」に木を引きかけ、木の縁に依

りて煙と云ひ焼ゆると云うたのである。○山分れ云々。山より分れて一たび飛去つた雲が、やがて元の山に歸つてくる。其の實景(影)を見る時には、己れの身も、再び元の都へ歸ることが出来ようかと、それが心頼みに思はるゝのであると云ふ意。○さりととも云々。今は斯くありとも、再び都へ歸らるゝ時も有らうと、菅公も心中に思召した事であらう。○月のあかき夜。明月の夜。○海ならず云々。水清き時は、海の底をも日月は照らすものであるが、たとひ海ならずとも、其の中心(心)の清き水である以上は、深ふ水の底までも、月が照らす事であらう。我が心中の皎潔なる事は、日月の照覽せらるゝ所であらうと云ふ意。○これ賢く遊ばしたりかし。これ(歌を云ふ)は御尤に賢く御詠みになつた事よと云ふこと。「かしは歎辭。○げに云々。「あめれは、あるめれ」の略。實に此の御歌の如く、月日こそは、菅公の清き心を御照覽あるであらう。これこそは、實際に斯く有りさうに見ゆると云ふ意。「これ賢く以下は世繼翁が菅公の歌に同感したる評語である。

まことに、おどろくしき事は、さるものにて、斯くやうの歌や詩などをさへ、いとなだらかに、ゆるくしう云ひつゞけ給ふと、見

聽く人、目もあやに、あさましく、あはれにも守りゐたり。物の故、知りたる人なども、無下に近く居寄りて、外目せず見聞く景色どもを見て、いよく、はへて、物を繰りいだすやうに、云ひつゞくる程ぞ、まことに稀有なるや。繁樹、涕を拭ひつゞけうじゐたり。

大意 これは筆記者(即ち著者)の評語である。世繼翁が菅公の政治上の話は云ふに及ばず、詩や歌や杯の風流の事まで、すらすらと述べ立てたので、傍聽人一同も、驚きあきれて、世繼翁の顔を見つめてゐたが、中にも物知りの連中は、翁の傍へ摩りよつて、一心不亂に傾聽してゐたので、翁は益々得意になつて述べ立てたるに、繁樹翁は感涙を拭ひつゞ、謹聽してゐたと云意。

語釋 おどろくしき事。驚くべき仰山なる事の意で、政治上の事を指して云ふ(詩歌などの風流なる事に對して、政治をば仰山なる事と云ふ)。○さるものにて。然ある者にての約で、名の然聞えたる者(即ち名人)にてと云ふ事。此の下に、あれば云ふに及ばずなどの語を補うて解釋すべき所である。世繼翁は、あの通りの名人なれば、菅公の政治上の事は云ふに及ばず、菅公の詩歌の事までも、すらく述べ

たと云ふ事。○なだらかに。滑にすらく。○ゆるく。しう。故ありさうに、尤もらしく。○目もあやに、あさましく。目もあやには目もきろくする迄にと云ふ事で、目色を妙にして驚くさまを名状する副詞。「あさましく」は、茲では臆を潰して驚くこと。目もきろくする迄に驚いて。○あはれに守りわたり。「あはれ」は天晴で、驚嘆して賞むる時に發する嘆辭。「守りわたり」は、見つめてゐた(世繼翁の顔を)。聽者は世繼翁が天晴の物知りなることを知りて、目もきろくする迄に、驚きあきれて、其の顔を見つめてゐたのである。○物の故知りたる人。物の道理を知りたる人即ち物知り。○むげに。「無下に」で、それよりは下なしの意であらう。むやみやたらに、など云ふ事。○ほかめせず。傍見もせず。○見聞くけしき。世繼翁の顔を見つめ、又其の話を聞く様子。○いよ／＼はへて。「はへて」は「延へて」で、引き延ばしてと云ふこと。世繼翁がいよ／＼其の話を引き延ばして語りつゝくるを云ふ。○物を繰り出すやうに。宛も、絲などをたぐり出すやうに、あとから、あとからのべつに語り出す。○いひつゝくる程。のべつに、言ひつゝけたる其の話の長さの程。○けうなるや。稀有は珍らしきこと。「や」は嘆辭。○涕。咸涙。○けうじわたり。「けう」は「き」ように同じで、興の字の音である。珍らしく面白くおも

うてゐた。

築紫におはします所の御門も固めておはします。大貳の居處は遙なれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやられけるに、又、いと近く観音寺といふ寺のありければ、鐘の聲を聞こしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓、纔看瓦色、
観音寺、只聽鐘聲、

これは、文集白居易

遺愛寺、鐘敲枕聽、
香爐峯、雪撥簾看、

といふ詩にも、まささまに作らしめ給へりところ、昔の博士どもの申しけれ。

語釋 筑紫におはし云々。これより又世繼の談。○御門。菅公の誦所の御門。

○大貳。太宰府に帥、大貳、小貳等の官職が置かれてあるが、帥は勅任の高官で、多くは有品親王を以て之に任じたものであるから、太宰府の實務に當るものは、此の大

貳である。帥の次に權帥と云ふ官があるが、左遷の權帥は、實務に預らぬ所の閑職であらば、太宰府の實權は此の大貳に歸してゐたものである。○樓。都府樓を指して云ふ。○譏看瓦色、只聽鐘聲。菅公は堅く其の門を閉ちて、門外には一步も出られぬ故に、都府樓も遠方より眺めて、纔に瓦の色を看たに過ぎないし、觀音寺も、只其の鐘聲を聽くのみに過ぎないのである。○文集白居易。文集は「白氏文集」と云ふ書。これは白居易の詩文集である。白居易は其の字を樂天といひ、唐の平民詩人として名高いものである。遺愛寺云々の詩は白氏文集に見ゆる詩で、人口に膾炙せるものである。○敲枕聽。夜間に鐘聲が聞ゆる故に、其の枕を敲けて人が其の音を聽くのである。「敲」は字典に「敲器、傾敲易覆之器」と註してあつて、傾の義に當る文字である。○撥簾看。簾を卷き揚げて看る。○まさいまに作る。優りたる狀に作る。○博士。物知りの人。

かの筑紫にて、九月十日、菊の花を御覽じける序に、まだ京におはしまし、時、九月の今宵、内裏にて菊の宴ありしに、此の大員、作らしめ給へりける詩を、帝畏く感じ給ひて、御衣たまはせ給へりし

を筑紫に下らしめ給へりければ、御覽するに、いとゞ其の折、おぼしめし出でて作らせ給ひける。

去年、今夜侍、清涼、秋思、詩篇、獨、斷腸、恩賜、御衣、今在此、捧持、毎日、拜、餘香、

此の詩、いとかしこく、人々感じ申されき。

【語釋】 作らしめ給へりける詩。昌泰二年九月十日の御宴會に「秋思」といふ題が出て、各々詩を賦して奉つたのであるが、此の時の菅公の詩の中に「君富春秋、臣漸老、恩無涯、報猶遲」と云ふ句があつた。此の詩が大層に帝の御意に叶うて、御衣を下賜せられたのである。○畏く感じ給ひて。勿體なくも御感賞ありて。○侍清涼。清涼殿にて開かれたる御宴に侍りて。○筑紫に下らしめ。菅公の筑紫に下りたるを云ふ。○御覽するに云々。菅公は恩賜の御衣を、御覽になつて、感慨に堪へずして次の詩を作られた。○秋思詩篇、獨斷腸。「秋思」と云ふ題に應じて作つた詩を見ると、腸のちぎるゝ思ひがすると云ふこと。去年の今夜は尙御寵愛を蒙り、御衣までも戴いたのに、今は配流の身となつたれば、今昔の感に堪へずして斷腸の思

ひがするのである。○捧持毎日拜除香。拜領の御衣を毎日捧げ持ちて、其の除香を拜むと云ふこと。除香は残香である。残香を拜して舊恩を思ふを云ふ。○かしこく云々。かしこくは、勝れて、好く、などの意。詩が誠に勝れて好く出来たれば、人々も感心したと云ふこと。

此の事ども、たゞ散りくゝなるにもあらず、かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを、かき集め一卷とせしめ給ひて、後集と名けられたり。又、をりくゝの歌を書きおかせ給へりけるを、自ら世に散り聞えしなり。

大意 菅公の詩歌などが何の書に出てるかと云ふ事に就いて其の出處を、世繼翁が述べたのである。

語釋 此の事ども。詩歌を云ふ。○散りくゝなるにも非ず。散亂してゐるので、は無くして、一部の書物に編輯されてゐるを云ふ。○後集。菅家後集と云ふ書で、主として左遷後の菅公の作を纂めたものである。之に對して左遷前の作を纂めたものを菅家前集と云ふ。○歌を書きおかせ給へりけるを云々。歌を書いてお

かれたるを、人が寫し傳へて、それが自ら世に聞えたのである。

世繼が若う侍りし時、この事、せめて哀れに悲しく侍りしかば、大學の衆の生不學には、いますがりしを、訪ひ尋ね、語らひ取りて、さるべき餌袋破子やうのもの、調じて、打ち具して、まかりつゝ、習ひとりて侍りしかど、老の氣の甚だしき事は、皆こそ忘れ侍りにけれ。これは頗る覺え侍るなりといへば、聞く人々、げにくゝ、いみじきすきものにも、ものし給ひけるかな、今の人は、さる心ありなんや」と、感じあへり。

大意 世繼翁、なほ弱年の頃に、非常の苦心をして、菅公の詩歌などを、人に聞いて覺えたが、老いて後は、其の大部分を忘れてしまつたので、今話したのは、少々記憶してゐた所のみであるといへば、傍聽者は何れも翁の篤學に感じた。

語釋 せめて哀れに。せめては切に。甚だ哀れにの意。○大學の衆。大學に出てゐるもの。○なまふがう。なまは生硬、未熟の意。ふがうは不學の音便。學問の尙熟せざる不學者。○いますがりしを。いますがりしをの略。○語らひと

り。話しあうて、我が味方に引き入るゝ事、話しあうて、我れの言ふ事を承知させる事。○るぶくろ、わりごやうのもの云々。餌袋は食物を入れるゝ袋。「わりご」は食物を入れるゝ器で、今の折の類。或は袋に、或は器に、食物を調へて、禮物として持参したのである。○てうじ。調ふること。○うち具し。「具す」は携へ行くこと。「うち」は、たゞ副へて云ふ辭。○まかりつゝ。罷出でつゝで、大學の衆の所へ赴きて學びたるを云ふ。○之は頗る覺え侍るなり。茲の「頗る」は少し其の氣味あるを云ふ辭であるから、此の詩歌は少々ばかり覺えてゐた所の者であると云ふ意。(今日の通用語の「頗」とは違ふ。○すきもの。ものすき好事家)。

通釋 私の若かつた時に、此の菅公の事蹟がいかにも哀れに思はれました故に、大學へ通うてゐる者で、まだ學問も未熟なものが有りましたのをば訪問して、その譯を話して承諾させて、菅公の事蹟を聞く事に致しました。さて、それから、然るべき食物を調へて、それを袋、又は折に入れ、携へ行きて禮物として差出したゞ、其の家に罷り出でまして、習ひ取りましたのである。が、近來甚だしく老いたる故に、大方は忘れてしまひました。今茲に御話し申した詩歌などは、ほんの少しばかりを記憶してゐたのであります」と世繼翁が云へば、傍聽者は「イヤ實に大層な物好き家で、ご

ざいますな。當世の人には、左様の熱心家があらうか」と云うて、何れも感じあうてゐた。

また雨の降る日、うち眺め給ひて、

あめの下、乾ける程の無ければや、

きてしぬれぎぬ干るよしのなき。

やがて、かしこにて亡せ給へり。

語釋 うち眺め。物思ひに沈むこと。○あめの下云々。「あめの下」は「天下」に「雨の下」を引きかく。「程」は、時の。「無ければや」は無ければにやあらん。「きてし」は着てし。「ぬれぎぬ」は水に濡れたる衣と、冤罪を負ふ事を引きかく(冤罪を負ふことを濡衣ヌシを着ると云ふ)。「干る」は濡衣の乾くことと、冤罪の晴るゝこととを引きかく。一首の意は、雨の降る天の下には、ものの乾くときの無きゆゑでもあらうか、我が身に着たる濡衣を乾す方法の無いと同じやうに、身の冤罪を晴らす由の無いのは無念であると云ふ意。○やがて。程なく、久しからずして。○かしこ。太宰府を指す。

藤原時平の逸事 大鏡

これも同じく「左大臣時平」と題する篇中の一節であつて、時平の逸事を記したのである。明君の聞え高き醍醐帝御意を政治に用ひさせ給ひたれども、世の奢侈を矯制すること能はずして、深く之を嘆かせられ、或時、左大臣時平と陰に内談せられて、時平をして殊更に美服を着して参内せしめて、さて厳しく之を詰責せられた。飛ぶ鳥をも落すといふ程の時平も、帝の御詰責に、いたく畏れ入りて、謹慎したので、世の奢侈の風俗が頓に改まつたといふのが、其の逸事の一つである。時平は、物のをかしさをば、堪へかねる性質の人であつた。或時、時平が非道の裁決を下さうとしたるに、屬吏が放屁して時平を笑はせた爲に、裁決中止になつたと云ふのが、其の一つである。菅公薨去の後に、公が雷となりて、清凉殿に落ちんとせしとき、時平が、それを叱りつけて、一たび雷鳴を止めたと云ふのが、其の三つである。

延喜の、世間の作法、したゝめさせ給ひしかど、過差を、えしづめさせ給はざりしに、この殿制を破りたる御装束の、殊の外に、めでたきをして、内に参り給ひて、殿上にさぶらひ給ふを、帝、小部より御覽じて、御けしき、いと悪しくならせ給ひて、職事を召して、世間の過差の制、厳しきころ、左の大臣の、一の人といひながら、美麗、ことの外にて参れる、便なきことなり。速に、罷り出づべきよし仰せよとありければ、

【語釋】 延喜の。延喜の帝が。○世間の作法、したゝめさせ給ひ。世の風習を調べて、奢侈に過ぎざるやうに、平かになされようとせられた。○過差。制に過ぎ差ひて奢侈なるをいふ。○えしづめさせ給はず。抑勢すること能はず。○この殿。時平をいふ。○制を破りたる御装束。制度を破りたる美麗の服装。○めでたきをして。めでたき服を召して。美しき服を着して。○内に参り。参内すること。○小部。小部とは、突き上ぐる戸の小なるを云ふ。殿上の戸を、突き上げて、日除と爲したる所の窓より、延喜帝が、時平の美服を御覽になつたのである。○御けしき。御顔色。○職事。藏人をいふ。○一の人。二の人は、もと攝政關白の異稱であるが、此處では、太政官中の事を一切統領する意味を以て、左大臣を云ふ。○便なきことなり。不都合なる事である。

通釋 延喜の帝醍醐天皇、御意を政治に用ひられ、世の風習を調へて、奢侈に過ぐるなからしめんことに務められたれども、世の奢侈の風習をば矯制すること能はずして、頗る御意を惱まされた。然るに左大臣時平は、禁制を破りたる服装にて、殊に立派なるを着して参内し、殿上に侍つてゐた。延喜帝、宮中の小節より、それを御覽になつて、龍顏殊の外に悪しくなりて、藏人を召し、嚴命を時平に下された。其の御言葉は、奢侈の禁制のいと嚴しき今日をも顧みず、左大臣は、たとひ太政官中の事を一切統領する高官なるにもせよ、格別の美服にて参内したるは不都合千萬である。斯る犯則者は、宮中に置くこと相成らぬ。即時、退出すべき旨を申傳へよとの嚴命であつた。

職事承るも、いかなる事にかと、恐れ覺えけれど、参りて、わななく、わななく、しかくの事と申しければ、いみじく驚きて、畏り承りて、御隨身の御前参るも制し給ひて、急ぎ罷り出で給へば、御前ども、あやしと思ひてなむ。

語釋 承るも如何なる事にかと。帝の仰せを承りて、それを時平に傳へたらば、其

の怒に觸れて、如何なる辛き目に遇はんも知れずと思ひて、いたく恐れられたのである。時平の勢力が非常に盛んであつたゆゑ、勅命を傳ふることすらも、職事のものがいなく、畏れたのである。○参りて。時平の側に参りて。○わななく、わななく。ぶるくと震ひながら。○しかくの事。帝より、斯くくの勅命が有つたと云ふ事。○しかくとは、分りたる事柄を略して述ぶる時に使ふ語。○いみじく。甚しく。○御隨人。時平の伴の人。○御前参るも制し給ひて。貴人の通行には、前驅があつて、其の警固を嚴にし、且つ其の行列に威嚴を添へたものである。時平はいなく、勅命を畏みて、其の警固を止めて、倉皇として歸邸したのである。○御前ども云々。前驅の者どもは、其の由を知らねば、不思議の事ぢやと思つてゐた。○思ひてなむの下に、ありけるなどの語を補うて見るべきところ。

さて、本院の御門、一月程さへせて、簾のにも出で給はず、人など参るとも、勘當の重ければとて、あはせ給はざりけり。さりしにこそ、世の中の過差は平ぎたりしか。うちくに、承りしかば、さてばかりぞ、しづまらむとて、帝と、御心合せさせ給へりとぞ。

語釋 さて本院の御門云々。時平本院の邸に歸りて後は、其の門をば一ヶ月程閉鎖して一室に籠り、訪問者あるも、勅勘の重ければと云ひて、面會せず、一意専心に謹慎恐縮してゐた。○みすのと。簾の外。○勘當。もと、規則を考へて罰を當つることをいふ語なれども、此處では、陛下の御咎めを指して云ふ。○さりしにこそ云々。左様の事の有りしに依りて、世の奢侈も直つたと云ふこと。○さりしは左有り略。○うちく。に云々。これは世繼翁の評語である。予翁の陰に聞く所に依れば、此の一條は、時平公が世の奢侈を矯めんが爲に、かねて延喜帝と内々に申し合せておいて、此の狂言を演じたのである、と云ふことぢや。○うちく。に。内々に○承りしかば。承る所に依れば。○さてばかりぞ、しづまらむ。左有りて、ばかりぞ、世の過差は鎮まらむの略。左様な事ありてのみ、世の過差は鎮まらむ、即ち只此の方法手段に依りてのみ、世の奢侈を矯制するを得んといふこと。○御心合せさせ給へりとぞ。下に「承る」などの語を補うて見るべきところ。

此の左大臣、ものゝをかしさぞ、え念ぜさせ給はざりける。笑ひたゞせ給ひぬれば、頗る事も亂れけるが、北野と世をまつりごたせ給ふ間、非道なること仰せられければ、さすがに、やんごとなく、せちにし給ふことをば、いかゞはと思して、此の大臣のし給ふことなれば、ふびんなりと嘆き給ひけるを、なにがしの史が、ことにも侍らず。己れが構へて、かの御事を止め侍らむご申しければ、いとあるまじきこと。いかにしてかはなむと、の給はさせけるを、たゞ御覽ぜよとて、

語釋 此の左大臣。時平をいふ。○ものゝ……給はざりける。物の、をかしさに對しては、笑ひを堪へてゐる事が出来なかつた。「念ぜさせは堪へさせに同じ。○頗る事も亂れ。行儀作法も頗る亂れて、笑ひ倒るゝをいふ。○北野。菅公のこと。北野の天満宮は菅公を祭りたる社である。○世をまつりごたせ給ふ。「まつりごたせ」は政治を行ふことであるから、世を治めなると云ふこと。○非道なる云々。「さすがには、さうは云ふものゝ。やんごとなきは貴きこと。「せちに、し給ふ」は、深く思ひ込むこと。「いかゞは、いかゞはせむ」の下略。時平が、非道なる裁決を下さう

と、してゐるゆゑ、菅公は之を止めたいと思つたけれども、高貴の職に在る時平が、深く思ひ込んでゐる事なれば、傍より口を出す譯にも行かずして、如何にと、致し方なしと思はれた。○此の大臣……ふびんなり。「ふびん」は不都合。時平の行ふことなれば、之を遮ぎる譯にも行かず、困つた事ぢや、不都合の事ぢやと歎息せられた。○なにがしの史。屬吏某。○ことにも……止め侍らむ。「事にもあらず」は、何事でも無い、至つて容易い事ぢやと云ふ事で、時平の裁決を遮る事の容易きをいふ。「構へて」は計略を構ひて、即ち一工夫を爲して。○いとあるまじ……なむ。「時平の裁決を遮り止むる事は、そんなに容易くは出来ない事である。どうして、そんな事が出来る」と、菅公が、屬吏に推問したのである。○たい御覽せよ。屬吏の言葉。御覽なされ、きつと中止させて御覽に入れるからと云ふこと。

座に就きて、ことごとしく定め、しり給ふに、この史、文挿に文挿、挿みて、いらなく振舞ひて、此の大臣に奉るごて、いと、高やかに鳴らして侍りけるに、大臣文も、え取らずして、わなよきて、やがて笑ひ出で、今日は、すぢ無し。右の大臣に任せ申すと、だに、いひやり

給はざりければ、それにこそ、菅原の大臣の心のまゝに、まつりごち給ひけれ。

【語釋】座に就き……給ふに。時平が裁決の座に就きて、仰山に、大聲あげて、裁決を始めた。「定め」は裁決を下すをいふ。「のゝしり」は大聲に、もの云ふこと。○文挿。貴人に文を奉るには、文杖と稱する棒に挿みて捧ぐるのである。○いらなく振舞ひ。屬吏が無作法なる振舞をして。○奉るとて。此の下に、時平の前に進み行きしが、などの語を補うて見よ。○高やかに鳴らし。高き音をさせて放屁する。○文も、えとらず。をかしさに、文を手に取り、ことも出来ぬ。○わなよき。震へること。をかしさを、こらへてゐた爲に、身體が震ひたのである。○今日は、すぢ無し云々。「すぢ」は術を云ふ。「今日は、をかしさを、こらふる術が無いから、裁決の事を右大臣菅公に一任する」と云ふ事すらも、云ふことが出来ぬ。○それにこそ。それに依りて。屬吏の此の方法に依りて、此の裁決は菅公の意の如くに公平なる裁決を下すことが出来た。

また、北野の、神にならせ給ひて、いと、恐しく神の鳴りひらめき、清

涼殿に落ちかゝりぬと見えけるに、本院の大臣、帶刀を抜きかけ
て、生きても、我が次にこそ、ものし給ひしか。今日、神となり給ふ
とも、此の世には、我れに、處置き給ふべし。いかでか、さらでは有
るべき」と睨みやりて、の給ひける。一度は、しづまらせ給へりけ
りとぞ、世の人、申し侍りし。されど、それは、かの大、臣の、いみじく、
おはするには、あらず。王威の限り無く、おはしますによりて、理
否を示させ給へるなり。

語釋 北野の神にらせ給ひて。菅公が、薨後に雷神となられて。○鳴りひらめ
き。雷の鳴り、電の光りわたること。○本院の大臣。時平。○生きても云々。菅
公は生前に右大臣なれば、左大臣たる時平よりは下位の官吏であつた。故に時平
は、生前に我が次位に在職してゐたのである。その人が今日、神となりたりとも、此
の世に於ては、我れに遠慮して、靜肅に致すべきが當然である」と云うたのである。
處置きは、遠慮して遠く避くること。○されど……給へるなり。これは世繼翁の

評語である。「いみじく」は、えらき事。「王威」は朝廷の御威光。「限りなく」の下に「を、そ
ろしく」などの語を補うて見よ。下位のものが上位のものを凌ぐは、朝廷の制度を
侵すものにて、朝廷に對して、濟まざる事である。故に、雷鳴の一たび鎮まりしは、時
平の、えらき爲にはあらずして、菅公が朝廷の制度を尊敬するよりして、下位のもの
は、上位のものに一步を譲るべき道理を示されたのである。

藤原鎌足の薨去

水鏡

水鏡は大鏡に記したる事蹟以前に溯りて、神武天皇より仁明天皇までの史實を記
したるものであるが、其の結構は七十三歳ばかりの老尼が、葛城にて仙人に逢ひて
聞きし事實を、泊瀬にて三十四五歳の修行者に物語りたる様に書き記したるもの
である。故に其の結構に於て大鏡を模倣したものであるのみならず、其の年代に
於て、全く大鏡の前編として書いたものに相違ない。之を水鏡と名けたるは、本書
の終に「大鏡の卷も凡夫のしわざなれば、佛の大圓鏡、智の鏡には、よも及び侍らじ、こ
れも若し大鏡に思ひよそへば、其の形、正しく見えずとも、などか水鏡のほどは侍ら
ざらんとてなん」と書いてあるに依て、善く分る。此の書の作者は中山忠親と云ふ

ことである。さて茲に掲ぐるは鎌足公薨去の一節である。

七年と申し、十月十三日、鎌足内大臣になりたまふ。此の御時に始めて内大臣といふ司は出でしなり。御姓は中臣と申し、を藤原と賜はせき。大織冠となん申し。

〔語釋〕 七年。天智天皇即位の第七年。○姓。「かばね」は株根でもと其の家の株として世襲したる官職に因りて、其の氏族の名に添へたる稱呼である。例へば「中臣連、蘇我臣、忌部首」など云ふ時の「連、臣、首」などが即ち、それである。此の「臣、連」などは朝廷に在りて政治に參與する所の官職である。然るに大化改新以後には、此の世襲の官職が止められてしまふたゆゑ、姓は、單に同血族たることを表章する家號となつたのである。今日云ふ所の姓名などは、全く、それであつて、官職には何等の關係も無い。茲に云ふ所の「姓」も、即ち、それである。古史に「氏」と書くべきを「姓」と書いたところは少くないのである（今日に在りては、姓と氏とが同義に用ひらるゝ）。○中臣。中つ臣といふ事で、中にありて、天皇に奉仕する臣の義。○大織冠。古代には、官位を授くるに其の官位に相當する冠を授けたものである。大織冠と云ふ冠位

は後の正一位に相當する最高の冠位である。

かゝりし程に、御心地、例ならず思されしが、まことしく重り給ひし時に、帝、行幸し給ひて、思しおく事あらば宣はせよと仰せ事ありしかば、大臣、今は限りに侍る。何事をか申し侍るべきと申し給ひしを聞きしめして、帝御涙に咽びて、歸らせおはしまして、

〔通釋〕 此の頃、鎌足公の心地が平生の如くならずして、微恙を感せられたが、それが本當に重くなつて、いよいよ大病となつた時に、天智帝が鎌足公の邸宅へ行幸なされて、鎌足公に向ひ、思ひおく事あらば、何なりと申すが善いと、誠に有りがたき仰せがありました。鎌足公は、今は命の限りで御座る。何事をか申し上げませうぞと御答を申し上げた。それをお聞きなされて、帝も御涙に咽びて、お歸りになつた。

御弟の東宮を、又、大臣の家に遣して、宣はせよとて、さきくの帝の御後見多かりしかども、大臣の志に比ぶべき人更に無し。われ一人、かく去り難く思ふのみにあらず。次々の帝、大臣の末を

惠みて年比の恩を必ず報ゆべしと宣はせて、太政大臣にあげ奉り給ふよし仰せ給ふと、其の時の人、申しあひたりしかども、此の事は、慥にも聞き侍らざりき。内大臣になり給ふを、太政大臣とは、ひが事ぞとも、申しあひたりしなり。十六日に、遂に、うせ給ひにき。帝歎き悲び給ふこと限り無し、

語釋 御弟の東宮。天智帝の弟にて後に天武帝となられたる方が、當時天智帝の世嗣となつてゐたのである。○其の時の人、申しあひ云々。鎌足公を太政大臣に擧げたと云ふ事を、其の時代の人が云うたけれども、そんな事は拙者(仙人自ら云ふ)は、慥には聞いてをりませぬ。其の事實は、内大臣に成られたるを、太政大臣に成られたと云ふは、僻事(事)事實相違であるぞと、人々が申し合ふたのであると云ふ意。
先に申し侍りつるやうに、帝も皇子と申し、大臣も、未だ位淺くおはせしに、御沓取りて奉りし果なかりし御心よせの後、位に即き給ひて、今日に至るまで互に二心なく、思し通はし給へるに、御年

の程の、今は、いかがはなど、思し慰むべきにもあらず。今年五十六にこそは、なり給ひしか。事に觸れて思し續くるに、げに、ことわりと帝の御心の中、推しはかられ侍りし事なり。

語釋 帝も皇子と申し。天智帝が、なほ、中大兄皇子と申された時。○御沓取りて。中大兄皇子が嘗て法興寺にて鞠を蹴て遊ばれし時に、其の沓が、鞠と共に飛び去りしを、中臣鎌足公が拾ひ取りて、恭しく皇子に奉り、皇子も亦、敬禮して之を受けられた事がある。茲の「御沓取り云々」は其の當時の事を指して云ふのである。○果なかりし御心よせ。苟且の御最負、一寸したる御深切。○御年の程の云々。鎌足公の御年齢は正に五十六歳に過ぎざるゆゑ、其の御年の程より見て、今は、いかでか死ぬべきなど、思つて、御心を慰め、御安心なさる譯には行かぬと云ふ意。「いかゞは」の下に「死ぬべき」などの語を補うて解釋せよ。「思し慰むべき」にあらずは、天智帝が、御自身に其の御心を慰めて、鎌足公の病氣も全快するであらうと思しめす譯には行かぬと云ふこと。

通釋 先に申しましたる如く、天智帝が、なほ、中大兄皇子と申された時の事で、鎌足

公も、なほ、官位の卑かつた時に、法興寺にて皇子の御沓を拾ひて皇子に奉つた事があつた。此の一寸したる御深切が基となつて、御兩人の間が非常に睦しくなつた。其の後、皇子が帝位に即かせられて、今日に至るまで、御互に御信用なされたのである。然るに鎌足公は今や大患に罹りて危篤に瀕してゐる。御年齢の上より打算して、なほ、死ぬる程の老年にもあらねば、全快するであらうなど思つて、御安心なされる譯には行かぬ有様で、とう／＼薨去になつた。今年で御年は五十六歳に成られたのみである。故に、天智帝が、事に觸れ物に感じて、鎌足公の在世の時の事を思ひ續けて、悲歎に沈まれたのであるが、これは實に御尤の事であると、天智帝の叡慮の程は、推察し奉らるゝ事で御座る。

上東門院の事 今鏡

今鏡は大鏡の記事の後を受けて、後一條天皇の萬壽二年より高倉天皇の嘉應年中までの事を記したるもので、全く大鏡の後編として書いたものである。其の結構は、大鏡の世繼翁の孫なる尼が、筆者等同志の大和廻りせるに逢ひて、其の記憶を物語りたる體になつてゐる。毎卷の章段を雲井子の日など名付けたるは、榮華物語に倣うたものである。之を今鏡と名付けたるは、本書中に「古を鑑み、今を鑑みるなど云ふ事にてあるに、古も餘りなり、今鏡とや云はましなど書いてあるに依て明である。著者は中山忠親と云ふ説と土御門通親と云ふ説とあつて、儲には分らぬ。さて茲に掲ぐるは「望月」と題する一節で、一條天皇の中宮なる上東門院の事を記したところである。

世繼も、帝の御序に國母の御事申し侍れば、此の帝の御母後の御事、この序に申し侍るべし。御年二十一二におはしまし、時、後一條院、後朱雀院うちつゞき生み奉らせ給へり。

大意 これは、大鏡に於ける世繼翁が、天皇の御事を語る序に、皇后皇太后の事を申されたる例に倣うて、後朱雀天皇の御母后なる上東門院の御事蹟を語るところである。之を解釋するためには、上東門院の略傳を記す必要があるから、簡短に示さう。上東門院は一條天皇の中宮にして太政大臣藤原道長の女である。長保二年に中宮となり、後一條帝、後朱雀帝を生む。長和元年に一條天皇崩じて、從弟の三條天皇が帝位に即かれたるに因りて、皇太后となり、その後、三條天皇が帝位を後一條

天皇に譲られたるに因りて、寛仁二年に大皇太后となり、萬壽三年に上東門院と申された。これが其の略歴である。

語釋 國母。皇后、皇太后を申す。○この帝。後朱雀天皇。○御母后。後に上東門院と申された人。

土御門殿にて、後一條院うみ奉らせ給へりし七夜の御遊びに、御簾の中より出だされ侍りける杯に添へられ侍りし歌は昔の御局の詠み給へりし

めづらしき光さしそふ杯は

もちながらこそ千世はめぐらめ。

とぞ覚え侍る。

語釋 土御門殿。上東門院の父なる道長公の邸宅。○七夜。出産後七日目の祝ひ。○昔の御局。紫式部を云ふ。「局」は部屋を有する女官の稱である。式部が上東門院に事へてゐた事は紫式部日記に書いてある。○めづらしき光云々。後拾遺和歌集に、後一條院の生れさせ給ひて七夜に、人々参りあひて、女房盃出せと侍り

ければ、紫式部と題して此の歌が掲げてある。「めづらしき光さし添ふ」は皇子御誕生に因りて、めでたき光明を添へたるを云ふ。「盃は祝盃を云ふのであるが、その盃を、月に比したのである。「もちながら」は祝盃を手に持ちながらと云ふ意と、望ながら、満月のまゝにて缺くることなくとの兩義を引きかけたのである。「千世もめぐらめ」は千世の後までも、満月のまゝにて缺くることなく、月が廻るであらうと云ふ意。月は満つる時は缺くるものなれども、これは、めでたき光の添ふ盃なれば、満ちたるまゝにて千世も繼續するであらう、何等のめでたきことぞや、と皇子の御誕生を祝したのである。

其の女院は、十三より后におはしましき。一條院崩れさせ給ひて、後一條の帝、稚くおはしましけるに、撫子の花を取らせ給ひければ、御母きさき、

見るまゝに露ぞこぼるゝ、おくれにし

心も知らぬなでしこの花。

五節のころ、昔を思ひいで、殿上人参りて侍りけるに、伊勢大輔、

はやく見し山井の水の薄氷

うちとけざまは、かはらざりけり。

とぞ詠み出だし侍りける。

語釋 その女院。上東門院を云ふ。○御母さま。これも上東門院。○見るまに云々。後拾遺和歌集に「一條院うせ給ひて後撫子の花の咲けるを、後一條院をさなくおはしまして、何心も知らで取らせ給ひければ、おほし出づる事やありけん、上東門院」と題して此の歌が掲げてある。此の歌は、露を涙に寄せ、撫子を御幼子（後一條院）に寄せて讀んだもので、其の意は、此の幼子を見るにつけても涙がこぼれる。一條院に先立たれて、あとに生き残つてゐる辛き心をも知らず、撫子を手に持ちて嬉しがつてゐる」と云ふ意と、今見る如くに、此の撫子には朝露が滴つてゐる。今や大分時間が後れてゐて、もはや早朝では無い、朝露も乾くべき時であるのに、それを知らずに、なほ朝露を帯びてゐる撫子の花よ」と云ふ意とを引きかけたものである。○五節のころ云々。時宛も五節の頃に、上東門院に、打ちつれだちて参りたる殿上人等に向ひ、往年の事を思ひ出して、伊勢、大輔が次の歌を詠んだと云ふこと。「伊勢、

大輔は上東門院に事へてゐた女官。○はやく見しやまゐの水の薄氷。これは、うちとけ」と云はん爲の序として置いたのではあるが、一方には一條帝在世のころ、五節に見たる小忌衣の色に引きかけたのである。「はやく見しは往年見た」と云ふ事と、早春に見たと云ふ事とを引きかく。「やまゐは山井と小忌衣の色なる山藍とを引きかく。小忌衣は袍の上に着るものにて、其の形狩衣の如くにして、其の色は白色に青摺を施し、節會の時に、祭官又は舞姫が着用するものである。○うちとけまは變らざりけり。殿上人等の、打ち解けたる快活の有様は、一條帝在世の頃、五節の時に見たる小忌衣の公達の姿に異ならずと云ふこと。これは、なほ喪中にて上東門院方の者の悲みに沈めるのと正反對なるを云うたのである。さて、打ち解けは水の縁語である。

寛弘九年二月に皇太后宮にあがらせ給ふ。御年廿五と聞こえさせ給ひき。後一條のみかど、位に即かせ給ひて、寛仁二年正月に大皇太后宮にならせ給ひき。

語釋 皇太后。天皇の母を尊んで申すのであるが、必ずしも系統上の母たるには